

小松市内遺跡発掘調査報告書 XII

二ツ梨豆岡向山窯跡群

2017.3

石川県小松市埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。
【二ツ梨豆岡向山窯跡群】（平成 17～21 年度）
[調査地] 石川県小松市二ツ梨町
[調査原因] 個人農地
[調査面積] 2,267m²
[発掘調査] 2005. 7.21～2005.10.17 (260m²)
2006. 9.19～2006.12.12 (640m²)
2007.10. 2～2007.11.30 (280m²)
2008. 9. 1～2009. 3.18 (487m²)
2009. 9. 1～2009.12.11 (600m²)
[調査担当] 大橋由美子
発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
4. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 27・28 年度に実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、執筆担当者が行った。
6. 本書の作成は、第 I 章の執筆を宮田 明が担当し、第 II 章と付章 1 の執筆を望月精司の指導のもと、横幕 真が担当した。付章 2 については、小林克也氏およびパレオ・ラボ AMS 年代測定グループより玉稿を賜った。全体の編集は横幕が行った。
7. 資料の検討にあたって、能美市立博物館と菅原雄一氏（能美市教育委員会）に御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡 例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高 (T.P.) で表示し、世界測地系「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目 次

I	位置と環境	1
II	二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査 2 (遺物編 1)	13
	付章 1 その他の遺構	43
	付章 2 自然科学分析	45
	写真図版 1～24	
	報告書抄録	

第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km² を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣 7 町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後 2 次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には 5～10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約 3 分の 2 が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

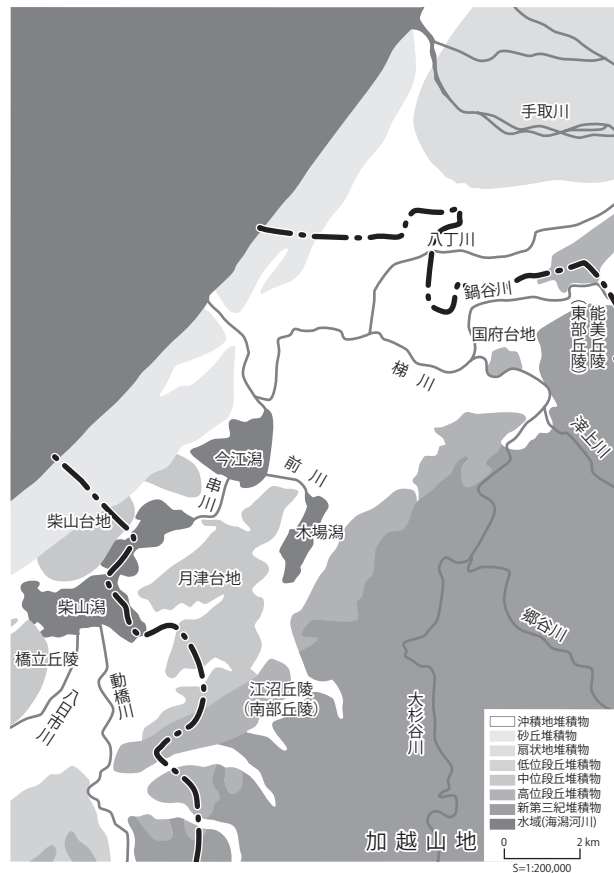
梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をめぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図 2 は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



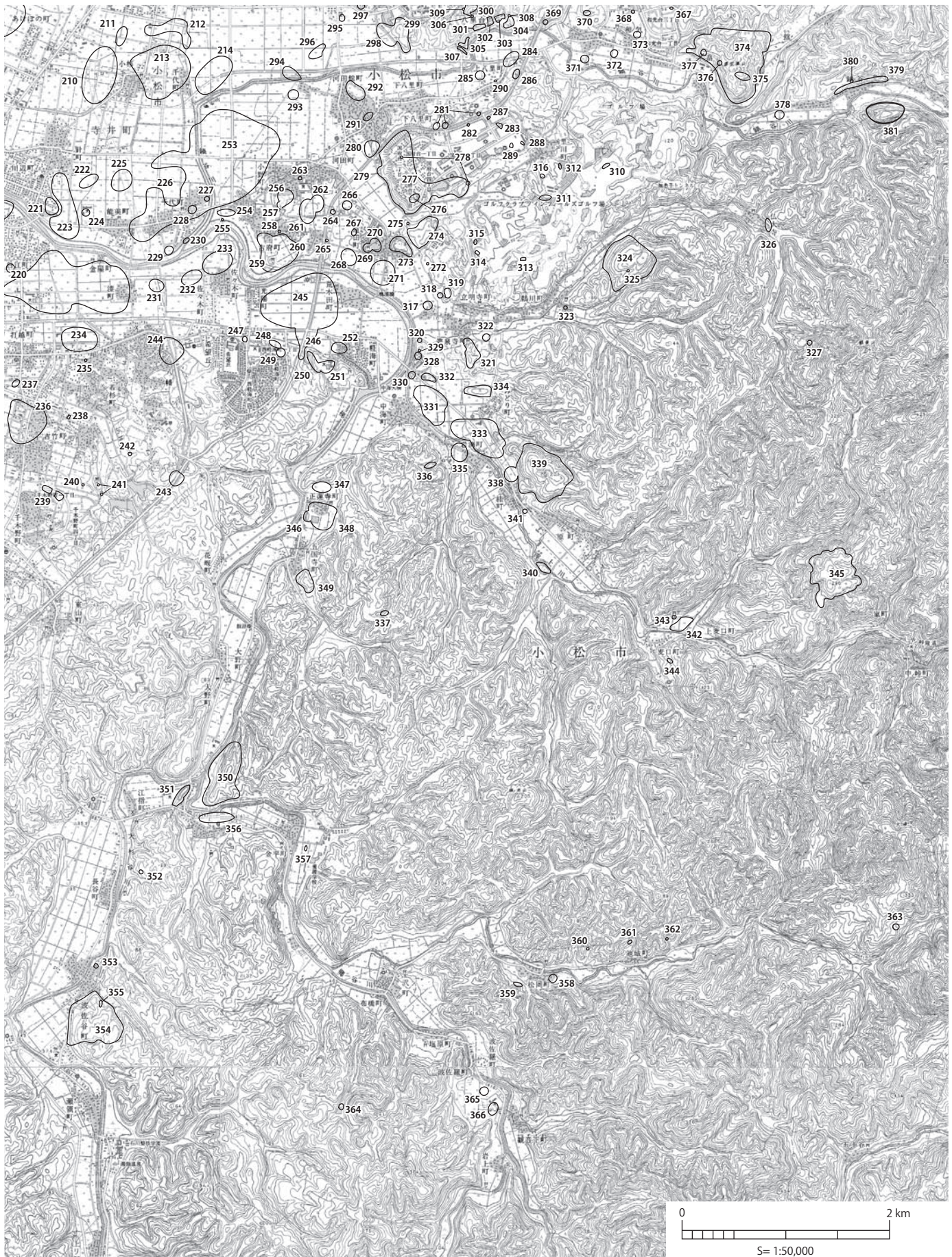
第 1 図 小松市の位置



第 2 図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡(276)や八里向山A～F遺跡(300～305)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしょやまA・B遺跡(いずれも図郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡(37)が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡(198)が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡^{たかんだう}(図郭外)、大長野A遺跡(210)、漆町遺跡(220)、荒木田遺跡(245)のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(276)や八里向山A遺跡(300)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳、和田山5号墳(いずれも図郭外)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群(277)や下開発茶白山古墳群(図郭外)など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在しないいずれかのみ構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡(226)で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳(44)や御幸塚古墳(82)などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群(52)のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏^{たから}関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡^{きよみずでら}(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、近年調査が行われた松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨殿様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡：309)で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッシュウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～未ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡(漆町遺跡：220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

1640（寛永17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括り而言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No	名 称	種 別	時 代	備 考
1	柴山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一白A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡 集落跡	縄文 古代	加賀市指定史跡
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山山村遺跡A地点に所在する貝塚
8	柴山山村遺跡（A地点） 柴山山村遺跡（B地点）	集落跡	弥生 古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日末経塚	経塚	不詳	
12	合河遺跡	散布地	不詳	
13	動橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	猫橋遺跡	散布地 集落跡	縄文 弥生～中世	
15	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	動橋堡跡	堡塁跡	中世（室町）	
17	梶井衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	梶井遺跡	散布地	古代	
19	分校A遺跡	散布地	古墳	
20	分校B遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校山王古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分校カマ山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、方墳6
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越A遺跡	散布地	縄文	
25	打越B遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城館跡	中世（安土桃山）	
27	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山A遺跡 茶臼山B遺跡	散布地 散布地	不詳 縄文	
29	茶臼山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津A遺跡	散布地	古代(奈良)	
32	額見町遺跡	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	
33	額見神社前A遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
34	額見神社前B遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
35	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田新遺跡	集落跡	古代(奈良)	
40	刀何理遺跡	散布地 集落跡	縄文 古代～中世	
41	矢田A遺跡	散布地	縄文	
42	矢田B遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	白のほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室、家形石棺
51	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田借屋古墳群	古墳	古墳	円墳14、前方後円墳3、不明1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳3、前方後円墳1
55	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	養輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	符津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
60	下粟津A横穴群	横穴墓	不詳	横穴7～8
61	島経塚	経塚	不詳	
62	下粟津B横穴群	横穴墓	不詳	横穴2
63	島遺跡	集落跡	弥生～中世	
64	島B遺跡	散布地	古代	
65	島C遺跡	散布地	古墳	方墳?
66	符津A遺跡	散布地	縄文	
67	符津B遺跡	散布地	縄文	
68	符津C遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	薬師遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	串カンノヤマA遺跡	散布地	古代(奈良)	
72	串カンノヤマB遺跡	散布地	古墳	
73	串カンノヤマC遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土百遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎座貝塚	貝塚	縄文	
79	矢崎B古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土百古墳	古墳	古墳	
82	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴4
84	御幸塚城跡	城館跡	中世	主郭と曲輪の一部
85	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	煙瓦窯
87	大領遺跡	散布地	古代	
88	浅井殿古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡(林タカヤマ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須惠器窯3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林オオカミダニ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須惠器窯2、土師器坑1、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林製鉄跡)	生産遺跡	古代	製鉄炉2、製炭窯4、鍛冶炉2、鋳型坑2
91	戸津5・12号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯2、南加賀古窯跡北群
	戸津シンブザワ製鉄跡	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉4、製炭窯3
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代、中世(鎌倉)	須惠器窯36(瓦陶兼窯5)、土師器坑19、製炭窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
93	戸津六字ヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯7、製炭窯1、南加賀古窯跡北群
94	戸津1号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯
	戸津ワクダニ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯1
95	戸津ショウガダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
96	戸津2号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
	戸津アナイヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	戸津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯2、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
98	ニツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須惠器窯12、土師器坑28、製鉄炉1、製炭窯2、南加賀古窯跡北群
99	ニツ梨豆岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須惠器窯4
100	ニツ梨豆岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須惠器窯12(埴陶兼窯2、瓦陶兼窯2)、南加賀古窯跡北群
101	ニツ梨殿様池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代(平安)	須惠器窯(埴陶器兼窯)3、土師器坑3、南加賀古窯跡北群
102	ニツ梨グミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器坑4、須惠器窯、南加賀古窯跡北群
103	ニツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯3、南加賀古窯跡北群
104	ニツ梨峠山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯8、南加賀古窯跡北群
105	ニツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯5、南加賀古窯跡北群
106	ニツ梨脇釜遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯1、製鉄1、製炭窯1、南加賀古窯跡北群
107	ニツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯1、製鉄1、南加賀古窯跡北群

No	名 称	種 別	時 代	備 考
108	ニツ梨奥谷古窯跡群	生産遺跡	古代(平安末)	須惠器窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
109	ニツ梨奥谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
110	ニツ梨釜谷古窯跡群	生産遺跡	古代	須惠器窯6(瓦陶兼窯1)、南加賀古窯跡北群
111	ニツ梨カセイデ古窯跡群	生産遺跡	不詳	須惠器窯2、南加賀古窯跡北群
112	矢田野向山古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯6、南加賀古窯跡北群
113	矢田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須惠器窯4、加賀窯2、製鉄3、南加賀古窯跡北群
114	箱宮ドウガヤチ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須惠器窯6、加賀窯2、南加賀古窯跡北群
115	箱宮A遺跡	散布地	中世	
116	箱宮B遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷1～2号窯跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
118	小天王谷1号製鉄跡(天王山1号製鉄跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷2～3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	那谷1号窯跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯
123	矢田野カクソダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄3
124	矢田野1～2号横穴	横穴墓	不詳	
125	那谷1～5号横穴	横穴墓	不詳	
126	那谷6号横穴	横穴墓	不詳	
127	那谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉3
128	上荒屋ユルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
129	上荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯4、製鉄3、南加賀古窯跡北群
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯4～5、製鉄2、横穴1、地下式坑1、南加賀古窯跡北群
131	上荒屋サンマイダニヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代(奈良)	須惠器窯4、南加賀古窯跡北群
132	上荒屋キダシ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯2、南加賀古窯跡北群
133	上荒屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須惠器窯1、加賀窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
134	上荒屋オジヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯4、製鉄炉1
135	戸津1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世(室町)	
137	戸津八幡神社前遺跡	散布地	古代～中世	
138	上荒屋那谷口遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
139	馬場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
140	馬場タニヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
141	上荒屋ホウジョウヤマ遺跡	生産遺跡、社寺跡、墳墓	古代(平安)～中世	須惠器窯5、製鉄炉2、墳墓、南加賀古窯跡北群
142	上荒屋ハカタン古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
143	湯上谷古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯10、製鉄炉2
144	西原フルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカナクソ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
146	牧口キドラ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
147	牧口中世墓跡	墳墓	中世(鎌倉)	牧師塚比定地
148	白山田ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	井口神社製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	井口エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	井口遺跡	散布地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世(鎌倉)	
153	津波倉ホツジ遺跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式坑6、2基調査
154	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
155	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	鉾澤散布地
156	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
157	小山田オクサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
158	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯複数
159	木場古墳群	古墳	古墳	円墳4
160	木場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
161	池田城跡	城館跡	不詳	
162	木場温泉遺跡	散布地	縄文	
163	木場A遺跡(木場遺跡H地区)	生産遺跡	古代(奈良)	製鉄炉1、製炭窯2
164	木場B遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
165	木場C遺跡	散布地	弥生	
166	木場遺跡A地区(1号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯3、鉾澤散布地
167	木場遺跡B地区(2号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉2、製炭窯2
168	木場遺跡C地区(3号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
169	木場遺跡D地区(4号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯1
170	木場遺跡E地区(5号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡F地区(6号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
172	木場遺跡G地区(7号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
173	木場遺跡D地区(8号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴1
174	大曲遺跡	散布地	不詳	鉾澤散布地
175	長谷齋油屋の山遺跡	散布地	不詳	鉾澤散布地
176	三谷遺跡	散布地	縄文	
177	三谷B遺跡	散布地	弥生～古墳	
178	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
179	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
180	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、鉾澤散布地
181	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な若跡か
182	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	製鉄炉1、製炭窯1
183	蓮代寺ガッシュウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯3、鉾澤散布地
184	蓮代寺A遺跡	散布地	不詳	鉾澤散布地
185	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶
186	蓮代寺窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
187	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	煙瓦窯
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	渋川氏菩提寺「蓮台寺」比定地
189	安宅関跡	その他	不詳	県指定史跡
190	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
191	安宅中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
192	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の昔石とも、現存せず
193	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡
194-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・肥町の町屋跡

No	名 称	種 別	時 代	備 考
194-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	幸町遺跡	生産遺跡	中世(室町)	鍛冶
196	多太神社境内遺跡	散布地	中世(室町)	埋納銭出土地
197	本折城跡	城館跡		本折氏居館跡伝承地の一
198	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
199	上小松遺跡	散布地	古代(平安)	
200	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
201	梯川鉄橋B遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
202	島田A遺跡	散布地	古墳～古代	
203	島田B遺跡	散布地	古墳	
204	御館遺跡	城館跡	中世(室町)	
		散布地	弥生～古代	
205	銭畑遺跡	集落跡	中世	一向一揆・蛭川新七郎重親居館伝承地
		散布地	弥生～古代	
206	梯遺跡	集落跡	中世	
		散布地	縄文～弥生・中世	
207	松梨遺跡	集落跡	古墳～古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
209	長田南遺跡	散布地	弥生・古代(平安)	
		集落跡	中世(室町)	
210	大長野A遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野B遺跡	散布地	不詳	
212	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代(平安)	
213	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
215	平面梯川遺跡	集落跡	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
216	平面梯川B遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
217	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	白江堡跡	城館跡	中世(室町)	白江新助景盛居館伝承
219	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
220	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一針遺跡	散布地	縄文	
222	一針B遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一針C遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定地坊跡	社寺跡	中世(室町)	
225	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
		散布地	縄文～弥生	
226	千代オオキダ遺跡	集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳6
227	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	千代城跡	城館跡	中世(室町)	
229	千代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡(奈良)
232	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	佐々木アサハタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
236	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	吉竹B遺跡(吉竹遺跡19地区)	散布地	古墳	旧河道の堰跡
238	吉竹C遺跡	集落跡	弥生～中世	
		散布地	縄文	
239	千木野(A)遺跡	古墳	古墳	方墳8
		集落跡	古墳	
240	幡生1号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
241	釜谷古墳・釜谷2号墳	古墳	古墳	切石積横穴式石室
242	若杉オンボ山1号窯跡	生産遺跡	古墳	須惠器窯
243	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
		散布地	縄文	
244	八幡遺跡	集落跡	弥生～古墳・古代(奈良)・中世(鎌倉)	
		その他の墓	古代(平安)	土坑墓
		古墳	古墳	円墳8、木芯粘土室
		生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡6号墳を削平して築いた連房式登窯
245	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
246	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
247	大谷口遺跡	散布地	弥生	
248	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
249	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軽海中世墓群	その他の墓	中世(室町)	集石墓9
251	軽海庵寺	社寺跡	古代(平安)	大興寺伝承地
252	西芳寺遺跡	社寺跡	古代(平安)	西芳寺伝承地
253	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
254	古府遺跡	集落跡	古代(平安)	
255	古府フンド遺跡	散布地	古代(平安)	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
258	古府横穴	不詳	不詳	
259	古府シマ遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
260	南野台遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一隅
262	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一隅
263	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
264	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が茶毘に付された地とされる
265	殖田の虫塚	その他	近世末	害虫の菩提供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
266	殖田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
267	埴田ミヤタン遺跡	散布地	不詳	
268	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
269	埴田フルカフ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世(室町)	
271	埴田遺跡	散布地	古代	
272	埴田塚	不詳	不詳	
273	埴田後山古墳群	古墳	古墳	円墳9、木棺直葬、木芯粘土室
274	埴田山古墳群	古墳	古墳	円墳12、方墳4
275	御菩提所古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山10～12号墳が重複
		その他の墓	古代(奈良)	火葬墓、河田山1号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳2、前方後方墳2、円墳22、方墳34、不明1、木棺直葬、木芯粘土室、切石横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式坑、河田山54号墳の南に開口
278	河田山1号窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群、河田山60号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
279	河田B遺跡	散布地	縄文・古代(奈良)	
280	河田C遺跡	散布地	不詳	
281	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑6、横穴1、不明1、3地点で計8基
282	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴2基
283	上八里横穴群	横穴墓	中世(室町)	横穴11基
284	上八里中世墓跡	その他の墓	中世(室町)	
285	上八里A遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
286	上八里B遺跡	散布地	古代(奈良)	
287	上八里C遺跡	横穴墓	古墳	横穴2基
288	上八里D遺跡	散布地	古代(奈良)	
289	上八里1号窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
290	上八里2号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
293	下出地割遺跡	散布地	不詳	
294	佐野A遺跡	散布地	弥生	
295	佐野B遺跡	散布地	古墳	
296	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
297	狭野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
298	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
299	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳7
300	八里向山A遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
301	八里向山B遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代(奈良)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
302	八里向山C遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代(奈良)	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳1、木棺直葬
303	八里向山D遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳2、木棺直葬
304	八里向山E遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳1
		集落跡	古代	
305	八里向山F遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世(室町)	集石墓1、横穴3
306	八里向山G遺跡	散布地	弥生・古代(平安)	
307	八里向山H遺跡	その他の墓	中世(鎌倉)	集石墓群、96基調査
308	八里向山I遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
309	八里向山J遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
310	里川A遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯2、製炭坑約20
311	里川B遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
312	里川C遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
313	里川D遺跡	散布地	縄文	
314	里川E遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
315	里川F遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
316	里川G遺跡	散布地	不詳	
317	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
318	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	古代(平安)～中世	社寺(降明寺)又は城館伝承地
319	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯(瓦陶兼窯)
319	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
		社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
320	降明寺跡	社寺跡	古墳	
321	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	
321	宮の奥墳墓群	その他の墓	(平安)	墳墓4、3基調査、2号墓は鎌倉時代に経塚に利用された?
322	涌泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
323	常徳寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇川常徳の居宅跡とも
324	鶴川學跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川常徳の詰城伝承地
325	鶴川横穴	不詳	不詳	地下式坑?
326	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世	
327	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
328	仏生寺跡	社寺跡	中世	
329	仏生寺塚	経塚	中世	
330	ブッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳2、木芯粘土室
331	中海B遺跡	集落跡	古墳～中世	
		(伝)長寛寺跡	社寺跡	古代(平安)
332	中海C遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
333	中海遺跡・岩淵遺跡	散布地	縄文	
		岩淵上野遺跡	散布地	旧石器

No	名 称	種 別	時 代	備 考
334	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
335	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
336	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明、5基開口とされる
337	赤穂谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴9、地下式坑4
338	善興寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
339	岩瀬城跡	城館跡	中世	
340	仏ヶ原城跡	城館跡	中世	
341	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代(平安)	小松市指定史跡
342	麦口遺跡	散布地	縄文	
343	麦口中世墓跡	その他の墓	中世	
344	下麦口横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
345	岩倉城跡	城館跡	中世(室町)	
346	椎の木山遺跡	散布地	縄文	
347	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
348	護国寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
349	松谷庵寺 松谷寺跡	社寺跡	古代(奈良)	8世紀前半に遡る古代山林寺院
350	平野堡跡	城館跡	不詳	中宮八院
351	江指城跡(山神山砦跡)	城館跡	中世(室町)	一向一揆・平野某詰城伝承地
352	蓮化寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
353	波佐谷遺跡	散布地	中世(室町)	
354	波佐谷城跡 (伝)波佐谷松岡寺跡	城館跡 社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇津呂波波守詰城伝承地
355	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴13、地下式坑5
356	六橋遺跡	集落跡	縄文	
357	麻島尾谷遺跡	散布地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世(室町)	
359	火灯山横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
360	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
361	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
362	池城経塚	経塚	中世(室町)	
363	曾山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ腰遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
366	観音下城跡	城館跡	不詳	
367	和気後山谷奥遺跡	生産遺跡	古代(平安)	土師器焼成坑、能美古窯跡南群 後山谷支群
368	和気後山谷2号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末~平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
369	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群
370	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和気矢口A遺跡	散布地	縄文	
372	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
373	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
374	虚空蔵城跡	城館跡	中世	
375	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺島古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
377	寺島業師坂古墳	古墳	古墳	
378	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
379	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
380	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
381	鍋谷堡跡	城館跡	不詳	

参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992)石川県遺跡地図
- 石川県立埋蔵文化財センター(1986)漆町遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)漆町遺跡II,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)辰口西部遺跡群I,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)白江梯川遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡III,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡IV,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)白江梯川遺跡II,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)蓮代寺地区遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1990)小松市高堂遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1993)能美丘陵東遺跡群I,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1995)石川県小松市荒木田遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1997)能美丘陵東遺跡群II,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1998)能美丘陵東遺跡群III,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群IV,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群V,石川県能美市

- (財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡, 石川県能美市
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
- 石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
- ウ 上野 與一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77. p201-221., 石川県
- コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県
- 小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. ニツ梨豆岡向山窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 千代才オキダ遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II, 石川県
- 小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
- 小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
- 小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V, 石川県
- 小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡・薬師遺跡 V 次, 石川県
- 小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶白山古墳群, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶白山古墳群 II, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
- テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343., 石川県
- 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第Ⅱ章 ツツ梨豆岡向山窯跡群 2 (遺物編 1)

はじめに

今報告は『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』(小松市教委 2015)にて遺構編を報告した「ツツ梨豆岡向山窯跡群 2」の遺物編 1 にあたる。報告遺物は 4 号窯(4-I 号窯及び 4-II 号窯) 関連遺物である。なお調査の経緯と概要については、小松市教委(2015)を参照されたい。

付章として、その他遺構の一部(SK02・SK03)と、2次調査(小松市教委 2005)及び3次調査(今報告)で出土した炭化材の自然科学分析結果を報告する。自然科学分析については、小林克也氏およびパレオ・ラボ AMS 年代測定グループの御協力により玉稿を賜った。記して感謝の意を表したい。

【凡例】

1. 遺物の器種分類と編年観

須恵器・土師器ともに、北陸古代土器研究会で使用するものに準じ、第 5 図の通り設定した。貯蔵具に関しては、北野博司 1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究第 8 号』に基づいたものである(ただし壺 A・壺 B および壺 D・壺 E は区分していない)。

土器編年と暦年代観は、田嶋明人氏の古代土器編年軸(田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)』及び 1997「加賀地域での 10・11 世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の 10・11 世紀代の土器様相』)に基づいて、望月精司氏が示した編年観と細分案に準じる(望月精司 2002「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」『ツツ梨一貫山窯跡』及び 2005「第 8 章考察—能美窯跡群の 8 世紀後半～9 世紀中頃の須恵器編年と窯場動向—」『和気後山谷窯跡群』、2009「南加賀地域古代土器編年軸と暦年代観」『額見町遺跡Ⅳ』)。

近年、古代 V 期を若干遡らせた暦年代観(2010「南加賀地域古代土器編年軸と三湖台編年、暦年代観」『額見町遺跡Ⅴ』)が提示されているが、今報告では従来のもを踏襲する。

2. 遺物図版について

- 縮尺は食膳具と焼台 1/3、貯蔵具と煮炊具 1/4 を基本とする。
- 掲載番号と[実測図番号]を併記。
- 須恵器は断面黒塗、土師器は断面白抜き。
- 粘土塊や焼台片等付着物は断面斜線パターン、赤彩は黒 20%塗。
- 「▼」を正中線上に付すものは、全体を反転復元するもの。それ以外は全実測あるいは部分的に反転するものである。正中線と稜線・調整線等が離れているものは、ゆがみが大きいか残存率が低く、径の数値が正確でない可能性があるもの。
- ヘラケズリ調整の範囲や方向は矢印で示す
- 底部に回転糸切痕をもつものは「●」を付す。
- その他特徴的な調整は観察表に付記した。

3. 遺物観察表について

器種：上記の器種分類に準じた器種名を示す。

区・地点・取上げ詳細：出土した調査区及び遺構名・グリッド名を示し、「窯床」「窯灰層(焚口前面土坑)」「窯舟底状ピット内」「灰原」「窯埋土」「SK01」の地点ごとに記載する。詳細な出土地点は一部省略しつつ注記内容に準じた。なお表土や盛土からの出土など 2 次堆積の可能性が極めて高いものには()を付す。

法量：「口」=口径、「底」=底径、「台」=高台径、「脚」=脚部径、「胴」=胴部最大径、「頸」=頸部径、「つ」=つまみ径、「高」=器高、「台高」=高台高、「頸高」=頸部高、「つ高」=蓋つまみ高、「頸高」=頸部高で示し、()は残存値、[]は推定復元値を表す。単位は cm に統一した。

性格：「製」は器種分類に準じた使用が想定される製品とし、「転」は主に 2 次被熱痕がある製品の中で焼台や置台として転用した可能性をもつものとして扱った。

焼成：「堅緻」=焼き締まりが非常に強いもの、「良好」=焼き締まりが強いが堅緻より弱いもの、「良」=還元状態を保つが焼き締まりが弱いもの、「やや良・やや不良」=「良」と「不良」の中間に位置するもの、「不良」=白い生焼け状態のもの(生)や酸化状態の焼成不良で軟質のもの(酸)をそれぞれ示す。

色調：降灰部分、釉付着部分を除いた大まかな色調を示す。ただし素地の色が不明瞭な場合は適宜降灰や釉の色調も示した。色調の判別は以下のとおりマンセル表色系に準拠して表記する。

白色～N-8(生焼け品)、灰白色～N-8、灰色～N-7～5、灰オリーブ色～5Y6/1～4/1、明青灰色～5PB7/1あるいは5P7/1、青灰色～5PB6/1～5/1あるいは5P6/1～5/1、暗(青)灰色～N-3あるいは5PB4/1～3/1、褐灰色～7.5YR6/1～4/1、(明)赤灰色～2.5YR7/1～6/1あるいは2.5YR7/2～6/2(酸化焼成品)、ほか例外となる色調はその都度付記した。

胎土：「通常」=南加賀窯跡群の戸津オオダニ支群窯で通常見られる、粘土質の素地に適度に砂粒(粒径 2mm 未満)が混在し、まれに礫粒(粒径 2mm 以上)を含む胎土、「砂少」=砂粒の混入が少ない比較的良質な粘土質胎土、「砂(礫)多」=通常の胎土よりもやや砂粒や礫粒が多い胎土、「礫極多」=混和材と呼べる大粒の礫を多量に混在させる土師器煮炊具同様の胎土を、それぞれ示す。ほか特記すべき事項がある場合は付記する。

完存：口縁部残存率(36 分率)を示す。他の部位で示す場合は胴、底、台、脚等を数値に付記する。

回転：ロクロ回転の方向がヘラケズリや底部ヘラ切り痕・糸切り痕の観察から判明した場合は、回転方向を「右」「左」で示す。

備考：その他下記のような記載事項がある場合は備考に記す。

- 底部糸切り=糸切りがある場合に記す。ヘラ切りの場合は特に記さない。
- ヘラケズリ=部位を示し、「回転ケズリ」もしくは非回転ケズリの場合は「ケズリ」と記す。
- ヘラ記号=部位と種類を示す。種別できない場合は「不明ヘラ

書き」。

- 重ね焼き分類—坏 B 焼成痕跡の分類。北野博司 1988「重焼の観察」『辰口西部遺跡群 I』に基づく（I 類—蓋身正位組合せ重ね焼き、II a 類—蓋逆位と身正位の組合せ重ね焼き、II b 類—蓋正位・逆位と身正位・逆位の組合せ重ね焼き、III 類—蓋および身の柱状重ね焼き）。対象は有蓋器種（坏 B）だが、無蓋器種（坏 A・盤 A・盤 B）についても III 類が観察されたものは付記する。
- タタキ分類—貯蔵具の胴部成形や調整の際に生じる叩き具・当て具痕跡の分類。花塚信雄 1984「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』に基づく。

- 頸部接合分類—瓶類の頸部接合法は『和気後山谷窯跡群』（2005）に倣い、A 類（風船技法）と B 類（開口法）に大別し、A 類は 3 細分した（A1 類—大円盤閉塞、A2 類—中円盤閉塞（円盤痕見えるタイプ）、A3 類—小円盤閉塞（円盤痕見えないタイプ）もしくは円盤閉塞しない絞り切り）。

※観察箇所を示す場合、（部位）—（内面・外面）—（上半・下半）の順に略して記載

第 1 節 4 号窯関連遺物の概要

調査区 A 区に 4 号窯と SK01 が位置し、A 区から D 区にわたって灰原が広がる。灰原は後世の切土・盛土によって攪乱が激しいため、灰層確認状況から灰原範囲（か 3～か 5 グリッドおよび、き 3～き 5 グリッド）を推定した。今報告で計測・実測の対象とした灰原出土遺物は、基本的にこの範囲からの出土であるが、攪乱による 2 次堆積の可能性をもつものが含まれている。SK01 は遺構編で窯操業時に伴う土取り場・製品や燃料の置き場・廃棄場の機能を想定した。窯埋土から出土した遺物は操業後の埋没・廃棄品と考えられる（調査区の位置は第 24 図参照）。

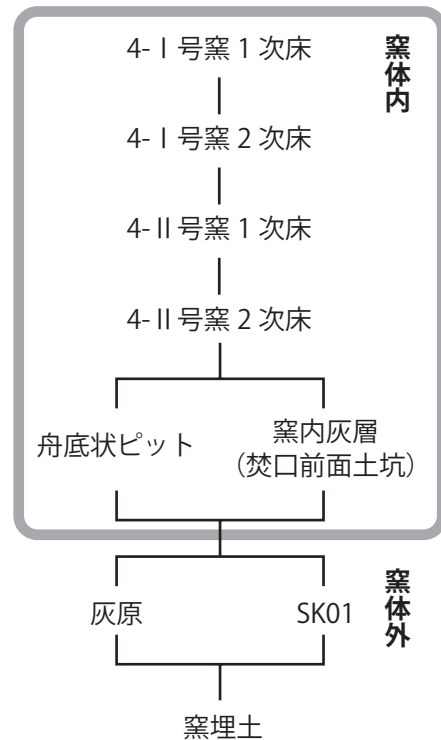
4 号窯は遺構編で 9 世紀前半代に位置づけたが、今報告の遺物報告をもって詳細な時期を確定したい。灰原を含む調査区 D 区の表土や標高の低い地点には 5・6・13 号窯由来と考えられる時期の新しい遺物が混ざるため、それらの遺物は極力除外した。

SK01 は基本的に 4 号窯に伴う遺物が主体だが、窯操業時期より新しい VI 期以降の内黒埴 B や鉢 B（括れ鉢）を確認している。おそらく操業後も廃棄場として機能したと推測されるものだが、今報告では除外した。

遺物の出土量はパンケース（64.5cm × 37.5cm × 14.5cm）に換算すると、凡そ窯体内出土遺物（窯床・窯灰層・舟底状ピット）が 4 箱、灰原・窯埋土出土遺物が 100 箱弱、SK01 が 2 箱である。遺物の接合状況は、窯灰層—灰原—窯埋土—SK01 の間で複数認められているが、窯床面と他地点の接合は 1 点のみ調査区表土との接合を除いて確認していない（詳細は本章末尾の観察表参照）。

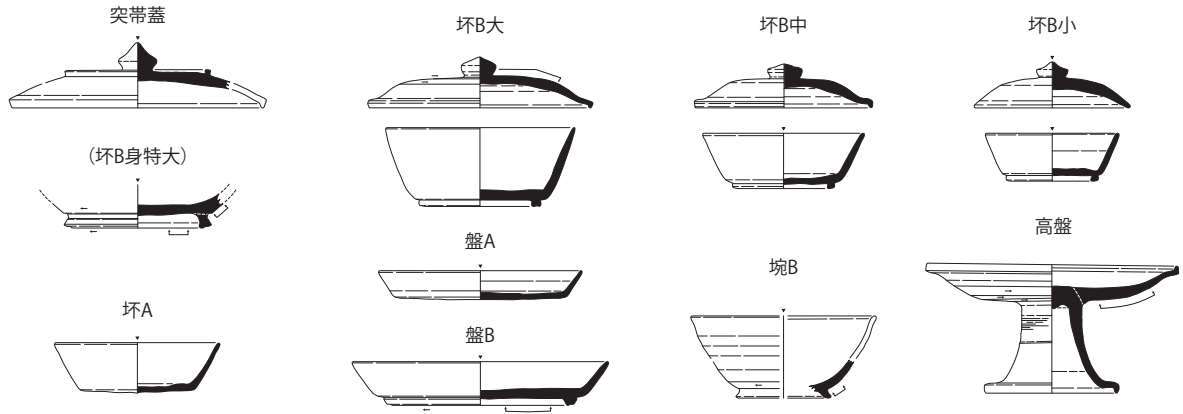
第 2 節 器種構成と各器種について

器種構成表（第 2 表）に示したように、出土遺物は高火度還元焰焼成の須恵器食膳具が約 90% を占め、貯蔵具と煮炊具が伴う。煮炊具は低火度酸化焰焼成の土師器器種であるが、須恵質と土師質のものが存在するため、構成表に加えた。表に示したもの以外に埴 B・小型貯蔵具・赤彩土師器埴 A・貯蔵具専用焼台が出土しているが、極わずかであるため計測対象から除外し、特殊品として別に扱った。また、坏 B は蓋の計測値を採用し、有蓋の壺 A につく壺蓋は除外した。

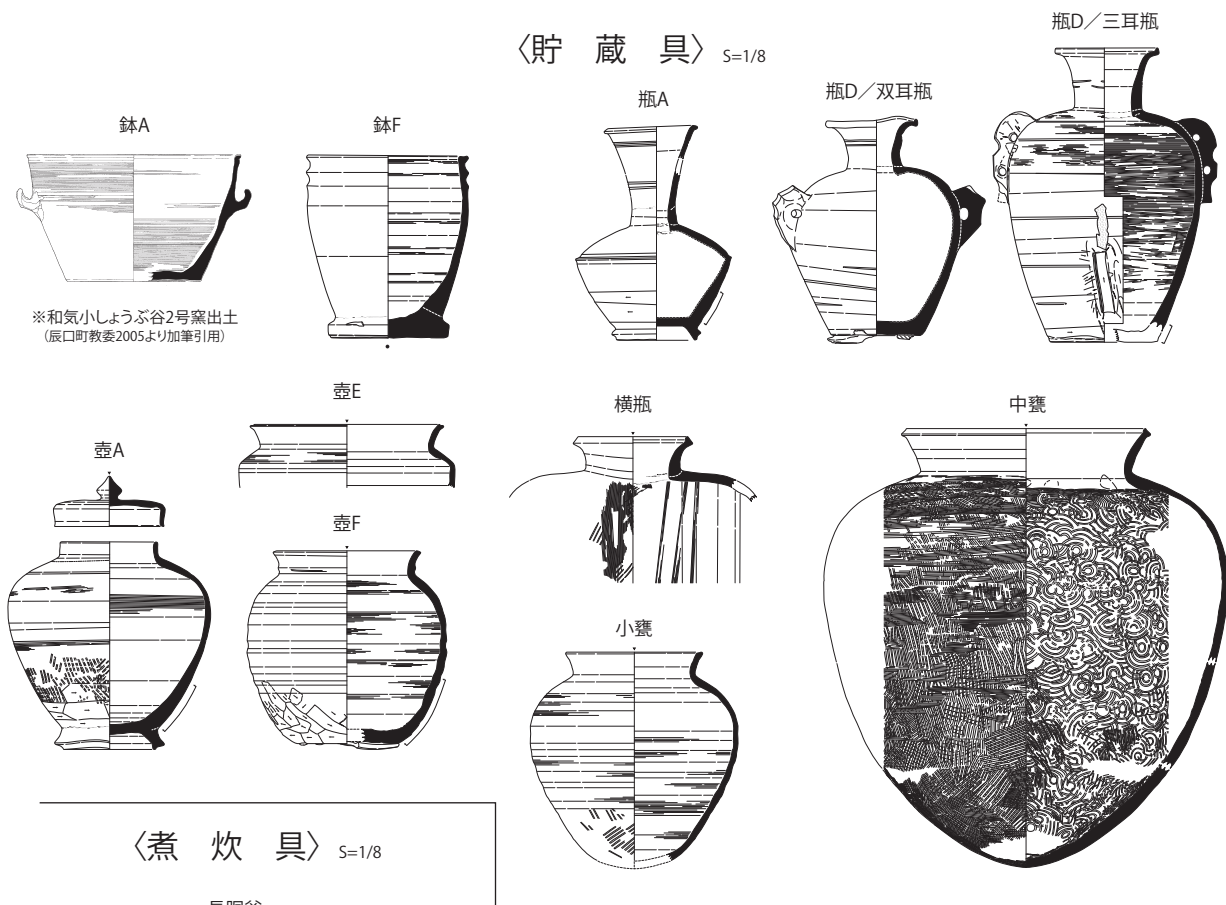


第 4 図 出土地点概略図

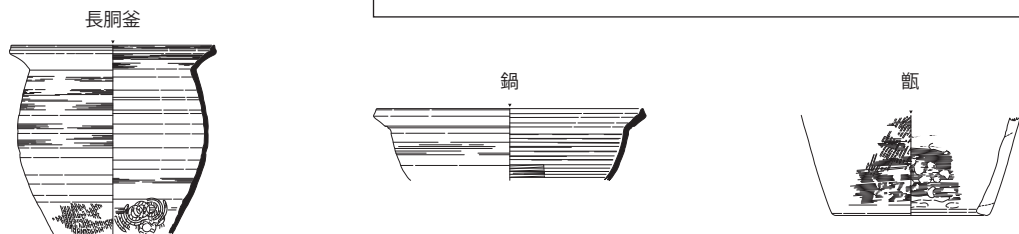
〈食膳具〉 S=1/6



〈貯蔵具〉 S=1/8



〈煮炊具〉 S=1/8



第5図 器種分類図

参考文献（第Ⅱ章および付章1）

小松市教育委員会 1975 『戸津5号窯跡（概報）』

小松市教育委員会 1991 『戸津古窯跡群Ⅰ』

石川県埋蔵文化財保存協会 1993 『小松市林遺跡』

石川県埋蔵文化財センター 1999 『辰口町上徳山谷山西谷窯跡』

小松市教育委員会 2005 『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

辰口町教育委員会 2005 『和氣後山谷窯跡群』

小松市教育委員会 2015 『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅺ』

※凡例で記載したものは一部省略

食膳具は底部回転ヘラ切り器種で占められ、坏 A と盤 A が合わせて 70%以上にのぼり、これに坏 B と盤 B が伴い、わずかに高盤が含まれる。貯蔵具は壺瓶類が主体で、これに甕類が伴い、わずかに鉢類と横瓶が含まれる。煮炊具の約 90%は（長胴）釜で、鍋と甑は個体数でわずかに 1 個体のみの出土である。なおこれら各器種の中には、焼色が白色系で堅緻に焼かれる一群が一定量存在する。

参考までに窯体内の器種構成表を第 3 表に示した。全体の構成と同じく食膳具主体であるが、この中には焼台（置台）転用品が多く含まれ、貯蔵具（瓶台部・壺口縁・甕胴部）転用品もみられた。詳細は確認していないが、壁床修復材として利用されたものも一部含まれると思われる。以下、各器種の概要を述べる。

第 2 表 全体器種構成表（口縁部計測値総計 17,509 / 36）

器種	坏 B (蓋・身)		坏 A	盤 A	盤 B	高 盤	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	蓋 1,843	身 1,492	6,432	5,339	2,306	118	16,038
占有率	11.5%		40.1%	33.3%	14.4%	0.7%	91.6%
器種	鉢 類	瓶 類 (瓶 D 内訳)		壺 類	横 瓶	甕 類	貯蔵具計
口縁部計測値 (/36)	20	506	(251)	606	20	218	1,370
占有率	1.5%	36.9%	(17.9%)	44.2%	1.5%	15.9%	7.8%
器種	釜	鍋	甑 * 底径	煮炊具計			
口縁部計測値 (/36)	90	5	6	101			
占有率	89.1%	5.0%	5.9%	0.6%			

第 3 表 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 1,546 / 36）

器種	坏 B (蓋・身)		坏 A	盤 A	盤 B	高 盤	食膳具計	貯蔵具計	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	68	46	558	558	232	35	1,451	88	7
占有率	4.7%		38.5%	38.5%	16.0%	2.4%	93.9%	5.7%	0.5%

1 食膳具

〈金属器系有蓋器種 (1・2)〉 天井部を巡る突帯や高い宝珠形のつまみをつける金属器系の蓋（突帯蓋）が特徴的である。器種構成表では坏 B 蓋に含めた。全体の器形が分かるものはわずかであるが、2 法量（20cm 以上と 20cm～19cm 間）が存在し、ヘラケズリや厚く降灰する点など優品として生産されたものと考えられる。この蓋に伴う身は特定できていないが、坏 B 身として掲載した中で台部高く踏ん張り、体部から底部をヘラケズリするシャープなつくりのもの（45）が候補としてあげられる。

〈坏 B (3～74)〉 蓋口径から法量分化を見ると、19cm 未満 14.5cm 以上を大、14.5cm 未満 12.5cm 以上を中、12.5cm 未満を小の 3 法量に分けられる。19cm 以上の確実な特大法量は確認できておらず、前述の金属器系器種があてはまるのかもしれない。大法量と中小法量の境目は明確で、中法量と小法量の境目は近接するが、小法量は口縁端部折り曲げの無いタイプ（39～42）として作り分ける傾向にある。金属器系器種（特大法量）を含めて大まかな量比を口縁部計測値から算出すると、特大と小がそれぞれ約 10%で、大が約 50%、中が約 30%となる。

蓋は乳頭状つまみ（8）や偏平つまみ・偏平器形（15・24・25・37）の古いタイプに、高い宝珠形つまみ（14・29）や、天井部丸味を帯びて器高が高く口縁端部がつぶれて外屈傾向にある（13・14・16）新しいタイプが伴う。天井部ヘラケズリ率は実測個体数中で 55%。

身は蓋よりも口径が 1～1.5cm 程小さくなるサイズで、体部外傾化傾向にある。前述の金属器系

器種と推測される特大の台部(45)があり、壺瓶類台部を思わせるがっしりとしたつくりをしている。それ以外にも大法量の中に金属器系器種の影響と考えられる太く高い台部(台高0.9～0.8cm)があり、体部下半～底部をヘラケズリするもの(46)や径高指数54の超深身になるもの(47)がある。一般的な大法量は台高0.5cm前後に径高指数37～45程で、中には台径小さく口縁が大きく開く埴形指向タイプ(59)が存在する。61は体部にヘラ描きを施す。中小法量は径高指数32～37の大法量よりもやや扁平器形となるものが主体である。底部ヘラケズリは大法量のみみられ、実測個体数中で約19%にとどまった。

蓋身の重ね焼き方法は確認個体数109点中で、Ⅰ類41点(38%)、Ⅱa類53点(49%)、Ⅱb類15点(14%)とⅡa類がやや多くⅠ類がそれに次ぐ。以下の無蓋器種は身のみを重ねるⅢ類となる。
〈坏A(75～123)〉 口径12～14cm前後、径高指数21～30主体の1法量。器形は底部厚く丸みを帯びて立ち上がる一群(88～94)とやや外反する一群(80・81・86・95～101)の古いタイプと、底部薄く体部外傾する新しいタイプ(76・77・118～123)がある。後者のタイプは底部小さい深身器形とやや扁平器形に分けられる。

〈盤A(124～173)〉 口径は概ね15～18cmに分布する。坏A同様に体部外傾化傾向にあり、体部長く伸びるタイプが主体である。これに底部から丸く立ち上がる一群(135～139)、体部やや短く立ち上がる一群(140～144)といった古いタイプが伴う。底部ヘラケズリは1個体確認(124)。

〈盤B(174～192)〉 口径は概ね19～23cmに分布する。坏A・盤A同様、体部外傾化傾向にあり、外傾化が著しいものもある(174・175)。これに体部が立ち気味となる古いタイプ(176・179～182)が伴う。底部ヘラケズリは盤Aに比べて多く、実測個体数中で約63%を占める。

〈埴B(193)〉 口径14.5cmの施釉陶器模倣器種で1個体のみ確認。図上復元のため計測値に誤差があるかもしれないが、深身で体部内湾して口縁端部が外反する器形である。体部上半にはロクロヒダが残り、下半にヘラケズリを施す。底面のヘラケズリは残存部位から確認できなかった。焼色は灰白堅緻で、口縁端部が黒化し、内面には台部片が釉着することから、重ね焼きⅢ類と判断される。

〈高盤(195～199)〉 盤器形に脚部のつく器種。盤部は全て口径20cm前後の坏蓋逆転器形を呈し、ヘラケズリを施す。脚部は太く短いタイプである。

2 貯蔵具

〈鉢類(200～205)〉 鉢Aと鉢Fを確認しており、後者が主体である。鉢Aは把手1点のみの確認(205)で、窯土が付着し破面が研磨されていることから、窯道具への転用が考えられる。鉢Fは容量2.5ℓ程で、やや内湾気味に立ち上がる器形である。200・202・203で底部糸切り痕が確認され、202～204の底面および底側面にはヘラ先刺突が施される。

〈瓶類(206～227・256)〉 瓶A、瓶D、横瓶を確認し、瓶Dが瓶類全体の約半数を占める(残りの半数は瓶A主体で、なで肩球胴形となる明確な瓶Bは確認できていない)。瓶Aは容量1ℓ程の肩張り長頸台付器形である。口縁端部は面取り風のナデ仕上げ(206)と外屈(207・208)の2つがあり、口頸部は長く外反する。胴部下半はヘラケズリを施すものもある。瓶Dは耳付きのなで肩平底器形である。耳は双耳主体で三耳が伴い、1穴穿孔が主体である。容量は2ℓ代(小)、4ℓ前後(中)、5ℓ以上(大)の3法量あり、217の小型球胴形以外は胴長傾向にある。口縁端部は外屈面取り(218・220)、折り返しつまみ上げ(217・221・226・227)、上下端つまみ出し(222)があり、口頸部は細く短くつのが一般的である。胴部下半～底部はヘラケズリするものが多い。216のみ底部糸切り痕を確認した。ほかに口径4～6cmの小型品(223～225)も確認している。横瓶

(256) は胴部叩き成形する俵形器形で、口頸部が太く短く外反するタイプを確認した。

瓶 A と瓶 D の頸部接合法については、大円盤閉塞 (A1 類) は認められず、小円盤閉塞もしくは絞り切り (A3 類) が主体である。瓶 A 内訳は確認個体数 12 点中で A2 類 1 点と A3 類 11 点、瓶 D 内訳は確認個体数 12 点中で A2 類 3 点、A3 類 7 点、B 類 2 点となった。

〈壺類 (228 ~ 255)〉 貯蔵具の中で最も高い占有率となる器種である。壺 A・壺 E・壺 F を確認しており、壺 A・壺 F が主体である (概ね 3 : 7 の割合だが、小甕口縁が混ざる可能性あり)。壺 A は有蓋で、なで肩球胴台付器形である。容量は身では 2 l ~ 4 l 前後が主体であるが、蓋口径では 10cm ~ 12cm (228 ~ 230)、15cm 台 (231 ~ 233)、20cm 台 (234) の 3 法量がある。蓋は天井部ヘラケズりするほか、234 の大型品は面に対して円弧を描くように叩き成形する。また 2 次被熱を受けた転用痕が多くみられた。身は口径 10cm 前後の狭口で、口頸部立ち上がり付近に蓋釉着痕が残る。胴部下半はヘラケズりするが、4 l 前後のものには叩き成形後ヘラケズりする (235・238)。台部は瓶 A 同様の形状が主体だが、一部に足高となる新しいタイプも存在する (237)。壺 E は南加賀窯では客体的な肩張り器形である。252 と 254 が肩部張る確実なものだが、253 は 246・247 同様の中小型壺、255 はやや肩の張りが弱いもので、厳密には分類できないかもしれない。壺 F は広口なで肩平底器形で、容量 8 l 台 (大) と 3 ~ 4 l 程 (小) の 2 法量存在する。大法量は長く開く口縁、小法量は短く開くか直立気味となる口縁である。共に胴部下半に非回転のヘラケズりを施し、大法量には叩き成形するものも含まれる (245)。251 の底面には舂圧痕が観察された。

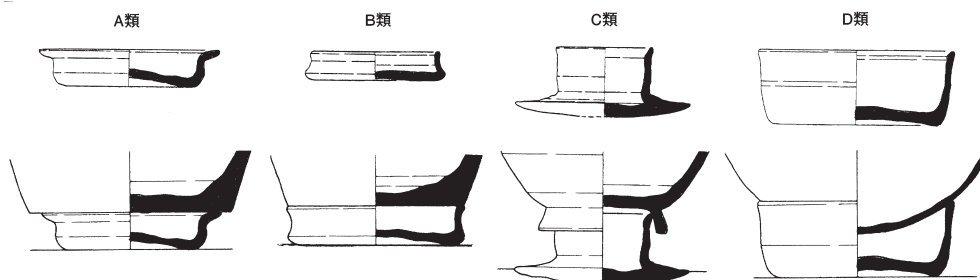
〈甕類 (257 ~ 266)〉 中甕 (30 l 台) と小甕 (30 l 未満) が主体で、大甕が伴う (頸部片確認、掲載なし)。胴部成形については、外面平行線文叩き出し後カキメ調整、内面同心円文当て具痕が基本だが、中甕の中に叩き出し後内面ハケ調整するものがある (261・265)。叩き工具痕は外面 He 類、内面 Da 類が主体である。

3 煮炊具

釜 (267 ~ 272)、鍋 (274)、甑 (273) を確認しており、釜主体である。釜は長胴形で、カキメ調整後に非回転ヘラケズりおよび胴部下半~底部の叩き成形を行うものである。叩き工具痕は外面 Ha 類、内面 Da 類が主体となる。口縁端部は上につまみ上げるものが主体だが、一部つまみ上げた部分を外へわずかに伸ばす新しいタイプ (271) を含む。鍋も釜同様に口縁端部をつまみ上げるタイプで、胴部はカキメ調整を施す。甑は底部付近のみの資料だが、叩き成形後のカキメ調整が観察される。

4 土師器

底径 5.5cm の赤彩土師器埴 A (279) を確認した。器面の風化が激しいが、内外ともに赤彩の痕跡が認められる。本窯で焼かれたものではないと推測されるが、他の器種と時期的に齟齬がないため掲載した。ほか 271・272・273 が土師質の製品である。



第 6 図 貯蔵具専用焼台の基本類型 (小松市教委 2002 より・S=1/6)

5 窯道具

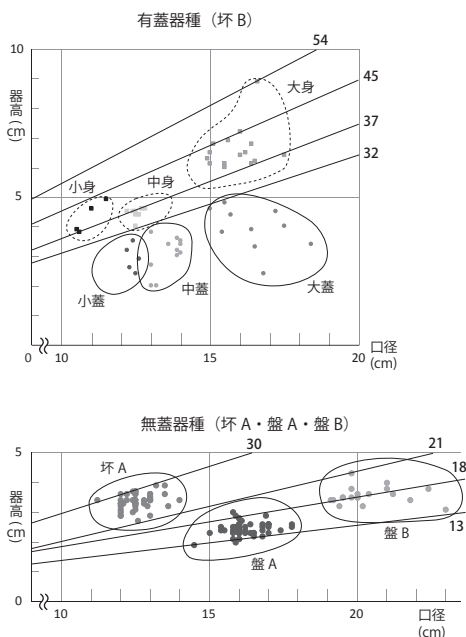
明確な量比は出していないが、前述したように窯体内を中心に須恵器食膳具や貯蔵具の転用焼台(置台)を多数確認している(写真図版12参照)。275は瓶Aの台部片と粘土塊を組み合わせた転用焼台で、体部内傾する専用焼台C類のような断面形状をつくる。一方、専用焼台は灰原周辺の表土でいくつか検出されている。多くは本窯よりも新しい時期に位置づけられる5・6・13号窯由来のものが混入したと考えられるが、その中から本窯に伴うと思われるものを抽出した(276～278)。特に278は能美窯で確認される底部穿孔を施す古いタイプであるが、わずか1個体にとどまるため、本窯では積極的に専用焼台を使用しなかったことが推測される。

第3節 まとめ

概要の中で漠然と「古い」「新しい」という語句を用いたが、前者を古代Ⅳ期、後者を古代Ⅴ期の要素として考えている。南加賀窯では同時期に、戸津5号窯・58号窯、二ツ梨一貫山9・11号窯灰原および斜面下方堆積灰原の資料があるが、部分的な資料や複数時期混在の資料である。そのため同時期と考えられる能美窯(和気後山谷窯跡群)と対比しながら、操業時期を評価したい。

食膳具は坏盤類主体で、能美窯と比べて坏A・盤A主体は共通するが、坏Bが少なく盤Bが多い。金属器系器種(突帯蓋)の生産や全般的な体部外傾化・薄手化傾向、白色系堅緻製品の定量生産は新しい要素と言えるが、古手の器形や口縁端部折り曲げない坏B小法量、底部ヘラケズリの存続等古い要素も認められる。ヘラケズリは盤Aでほぼなくなり、坏B蓋や盤Bが多い。坏B重ね焼きのⅡa類主体化はⅣ₂期以降の南加賀窯の特徴で、Ⅱb類主体となる能美窯とは逆転傾向にある。能美窯で新たに加わる埴類や足高の盤B等は確認できず、わずかに定着前の埴Bが存在するのみである。高盤は伝統的な太く短い脚部に坏蓋逆転器形の盤部を有する。

第4表 食膳具の法量分布

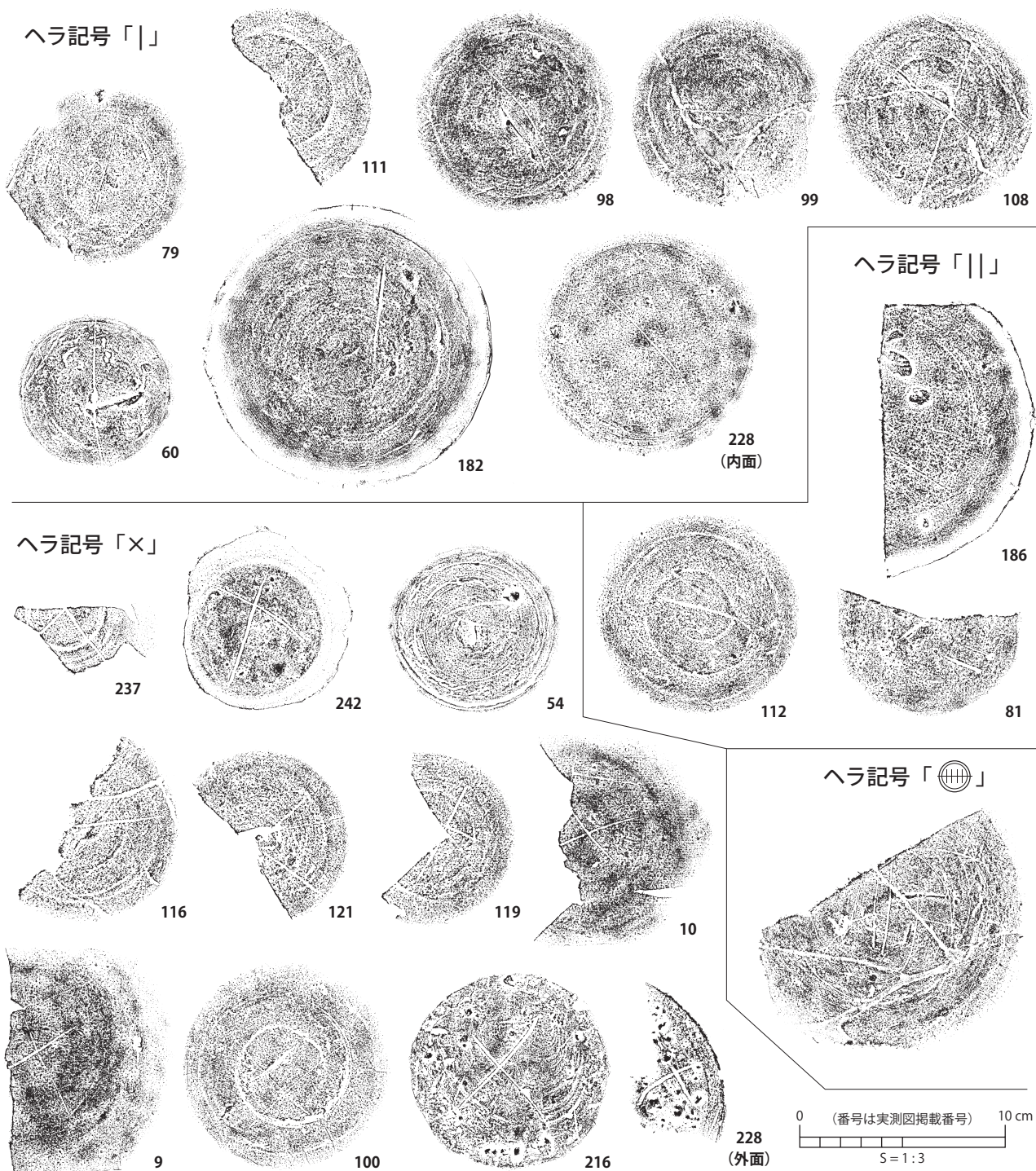


貯蔵具は壺瓶類主体で、Ⅳ₂新时期以降に能美窯で進行する現象に共通するが、鉢Bや瓶B等の新器形は確認できない。ただし瓶Dの生産率は高く、Ⅳ期以前の特徴(細く短い口頸部や球胴形の胴部)を残しつつ、Ⅴ期以降につながる長胴化や法量分化の兆しがみられる。壺類では壺A台部足高タイプは新しい要素であるほか、壺Fが多いのはⅤ期以降に壺Eが増加する能美窯とは異なり、南加賀窯の特徴である。また叩き成形する壺類が存在するが、Ⅴ期以降に中甕の小型化と壺F増加によって小甕が減少することと関連するのかもしれない。横瓶は南加賀窯ではⅣ₂古期以降衰退する器種だが、わずかに残存する。貯蔵具専用焼台は積極的に導入せず、伝統的な転用品を多用する。

能美窯と南加賀窯の生産体制が前者は先進的で後者は保守的と評価される点や、本窯が修復や改造を経ている点を考慮して、本窯操業時期をⅣ₂新时期～Ⅴ₁期(8世紀末～9世紀前葉)に位置づけておきたい。またⅤ₁期でも古い段階(上徳山谷山西谷窯段階か?)で操業を終えると推測される。

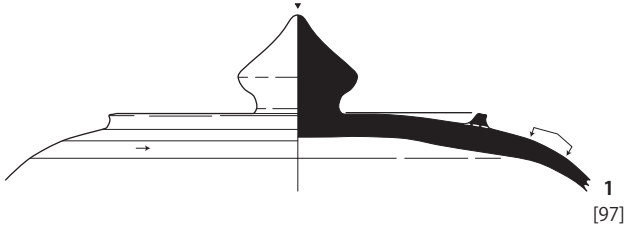
第5表 ヘラ記号構成表

	坏A	坏B蓋	坏B身	盤A	盤B	食膳具 分類不可	壺蓋	壺類	瓶類	貯蔵具 分類不可	計
	44	6	6	45	5	1	1		1	2	111
	6	1		4	2			2			15
	1			2							3
×	24	4	1	17	9		1	3	1		60
不明ヘラ描き	49	2	4	34	8	2		1		2	102
計	124	13	11	102	24	3	2	6	2	4	291

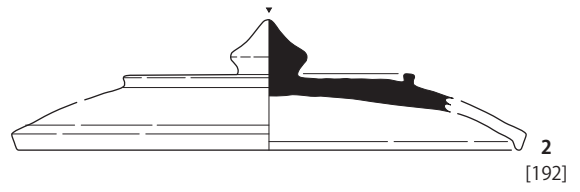


第7図 ヘラ記号拓本

〈灰原出土 突帯蓋〉



〈窯埋土出土 突帯蓋〉



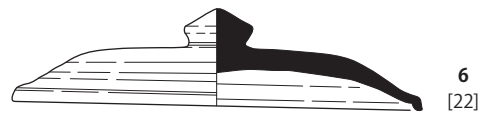
〈4-II号窯1次床出土 坏B蓋〉



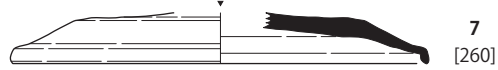
〈4-II号窯2次床出土 坏B蓋〉



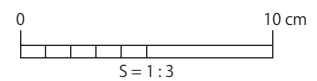
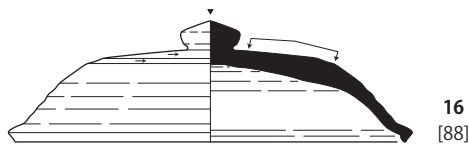
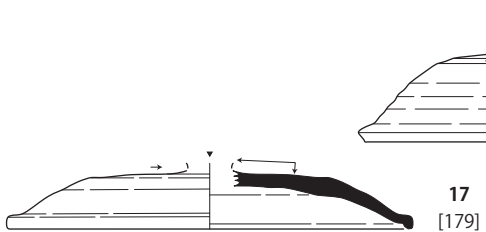
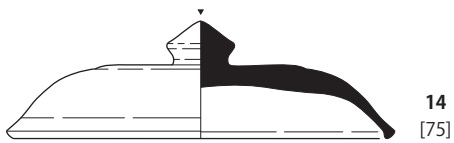
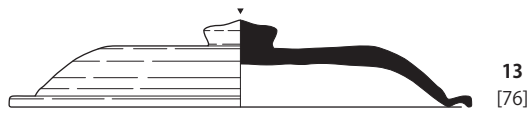
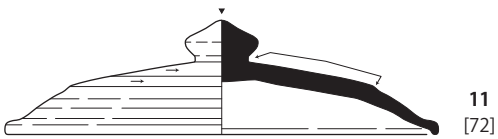
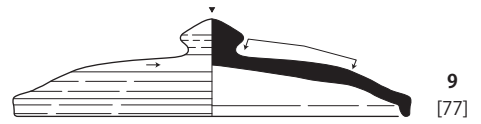
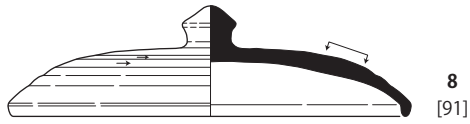
〈窯灰層出土 坏B蓋〉



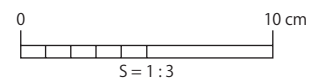
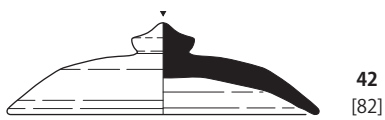
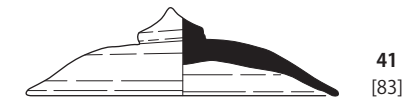
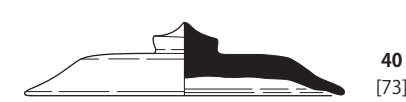
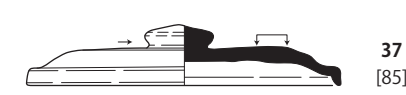
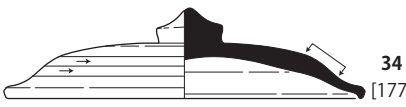
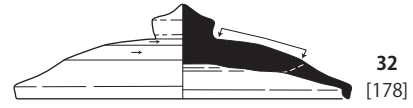
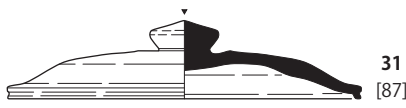
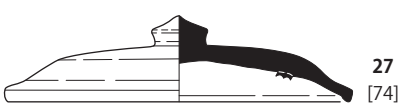
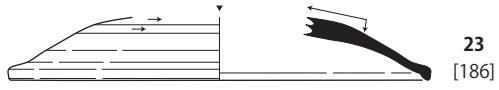
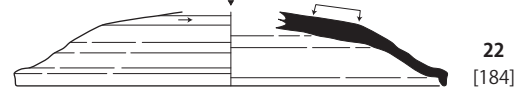
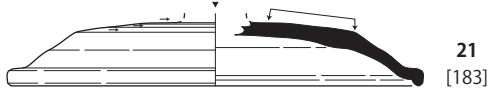
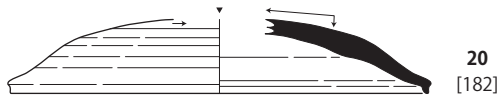
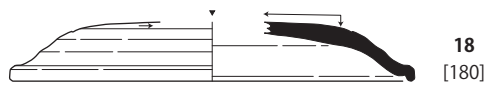
〈SK01出土 坏B蓋〉



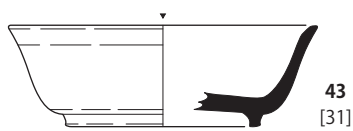
〈灰原・窯埋土出土 坏B蓋〉



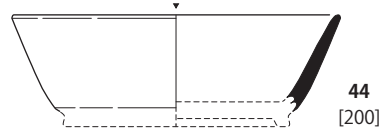
第8図 遺物実測図1



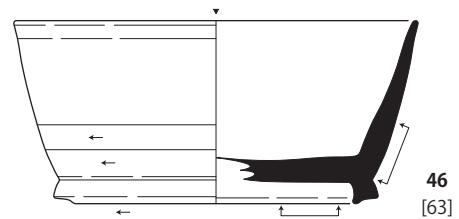
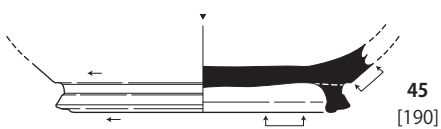
〈舟底状ピット出土 坏B身〉



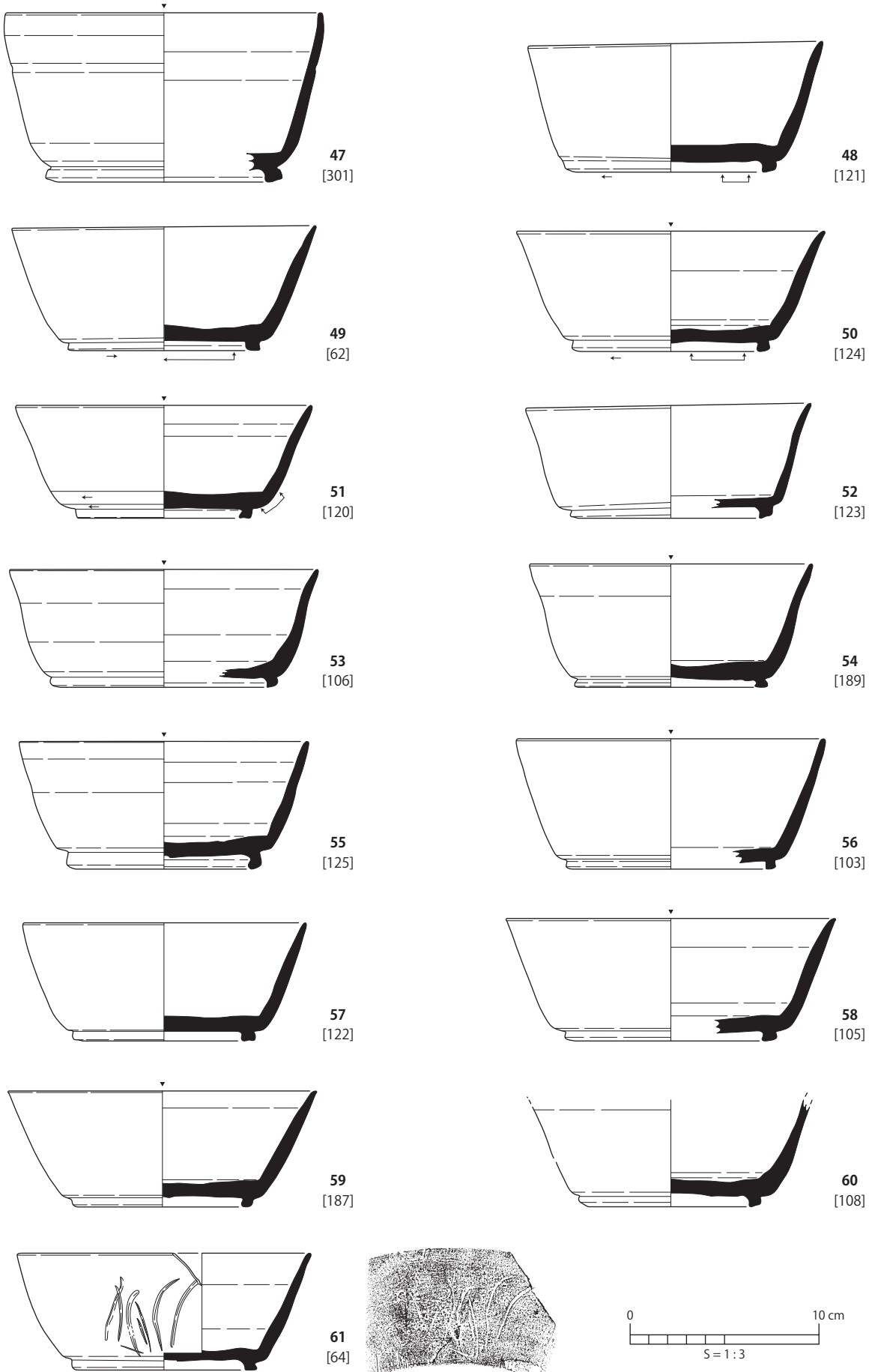
〈SK01出土 坏B身〉



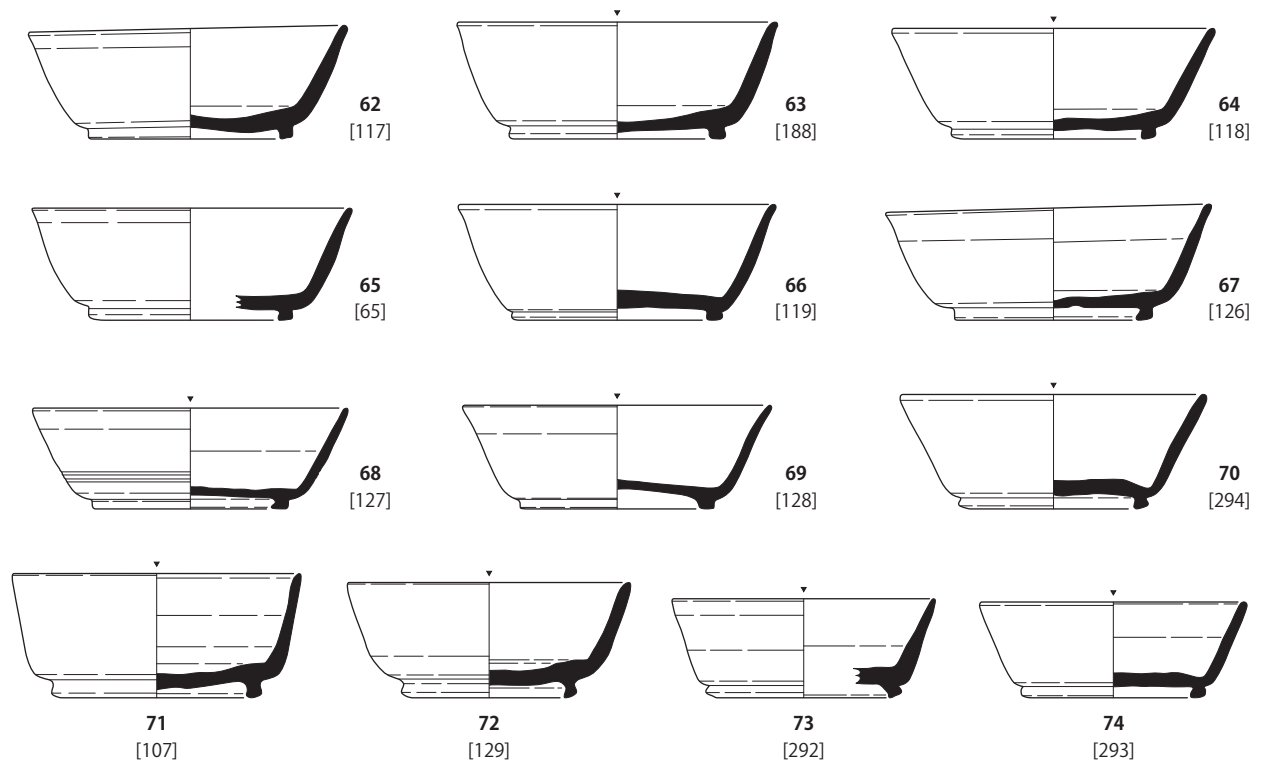
〈灰原・窯埋土出土 坏B身〉



第9図 遺物実測図2

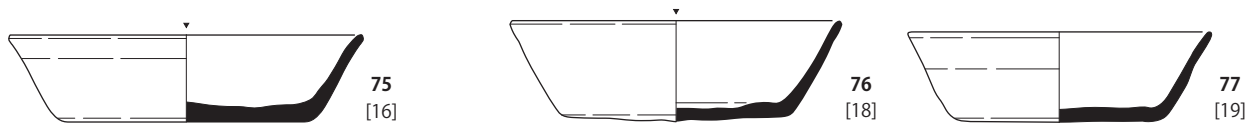


第10図 遺物実測図3

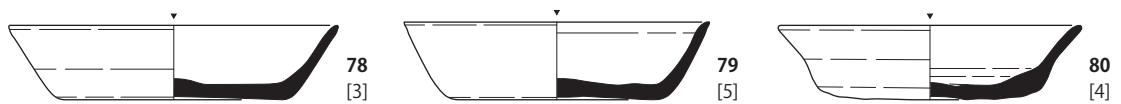


〈4-I号窯 2次床出土 坏A〉

〈4-I号窯 2次床+4-II号窯 1次床下出土 坏A〉

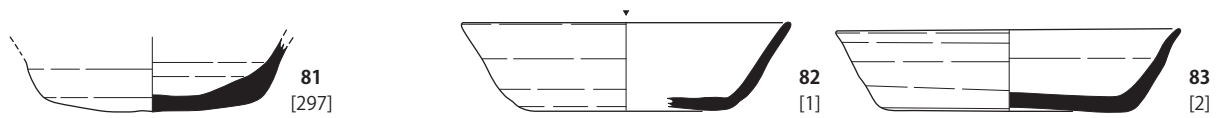


〈4-II号窯 1次床出土 坏A〉



〈4-II号窯 1次床下出土 坏A〉

〈4-II号窯 2次床出土 坏A〉

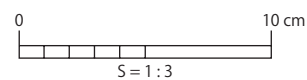
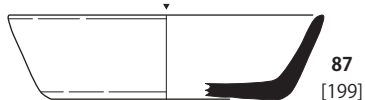


〈舟底状ピット出土 坏A〉

〈窯灰層出土 坏A〉

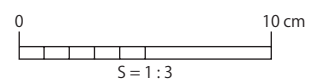
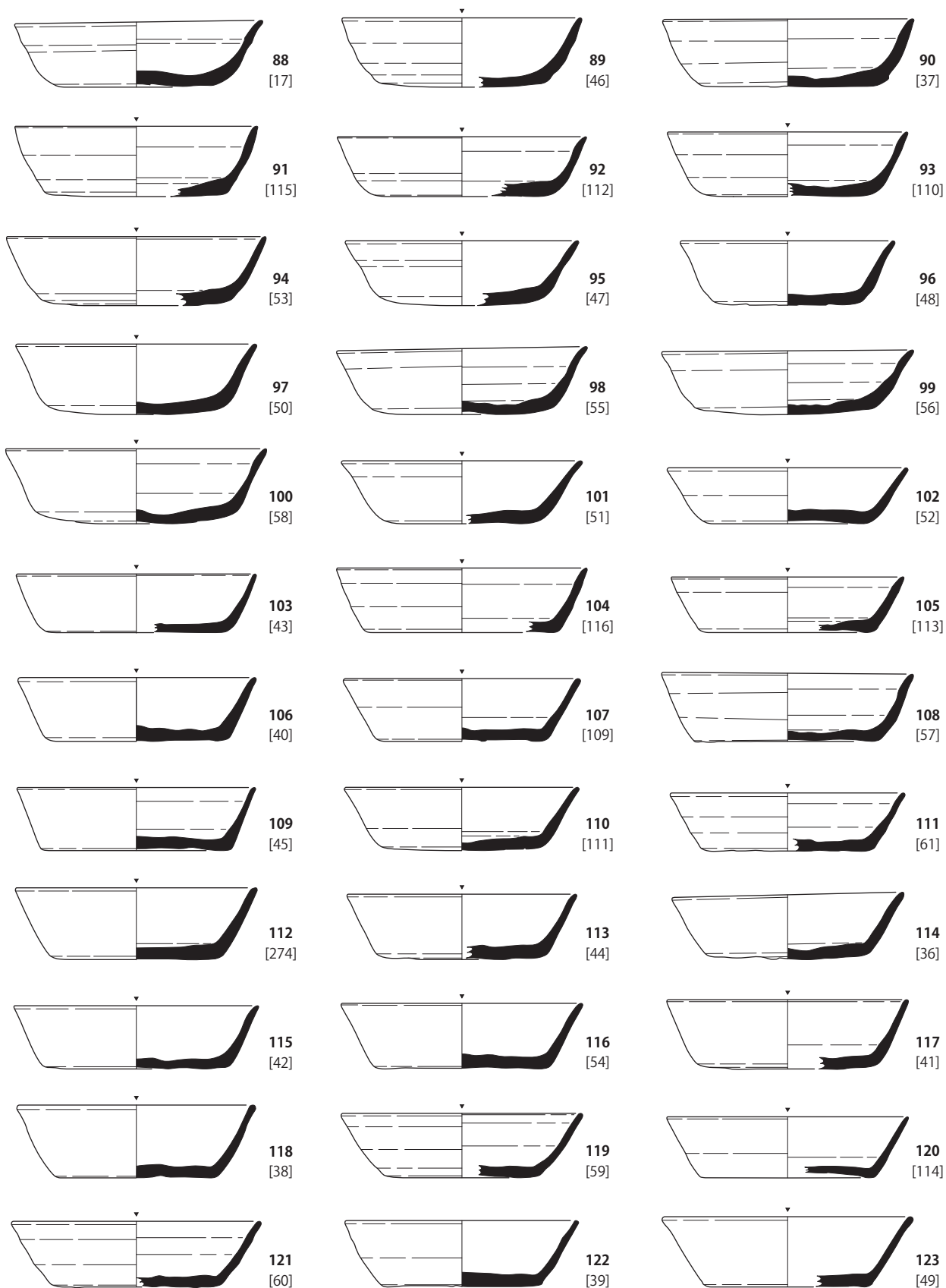


〈SK01 出土 坏A〉



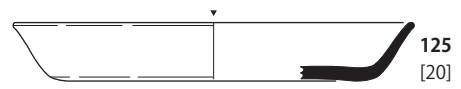
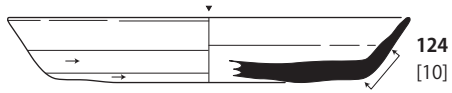
第 11 図 遺物実測図 4

〈灰原・窯埋土出土 坏A〉

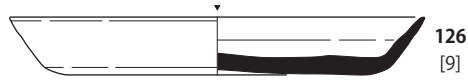


第12図 遺物実測図5

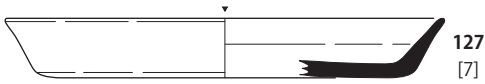
〈4-I号窯2次床下出土 盤A〉



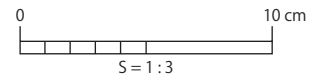
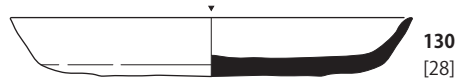
〈4-I号窯2次床+4-II号窯1次床出土 盤A〉



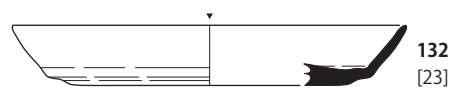
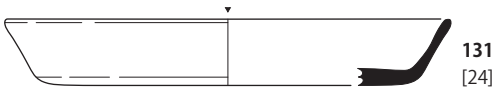
〈4-II号窯1次床(下)出土 盤A〉



〈舟底状ピット出土 盤A〉



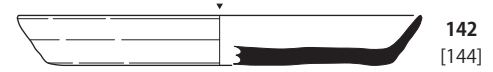
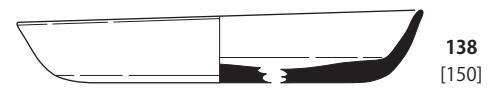
〈窯灰層出土 盤A〉



〈SK01出土 盤A〉



〈灰原・窯埋土出土 盤A〉

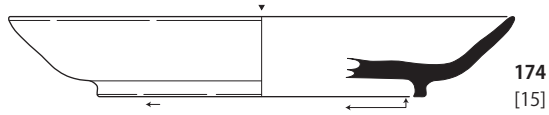


第13図 遺物実測図6

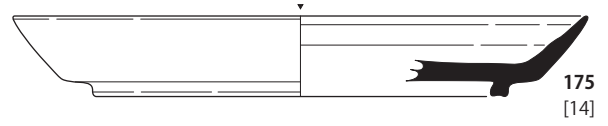


第14図 遺物実測図7

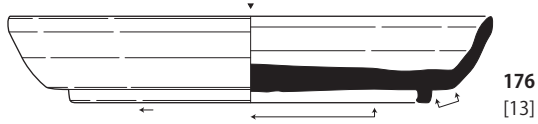
〈4-I号窯 2次床+4-II号窯 1次床出土 盤B〉



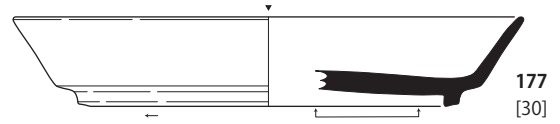
〈4-II号窯 1次床出土 盤B〉



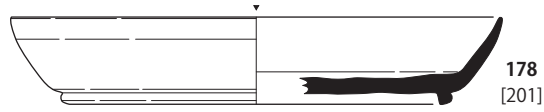
〈4-II号窯 2次床出土 盤B〉



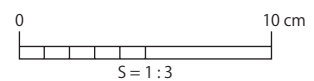
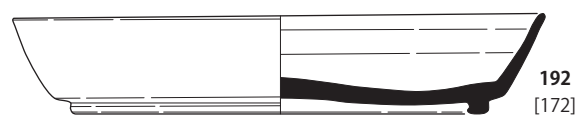
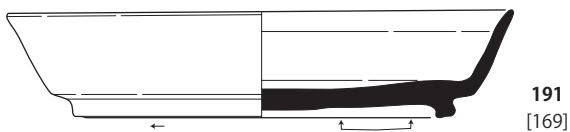
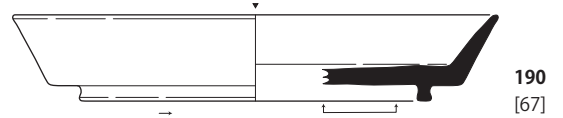
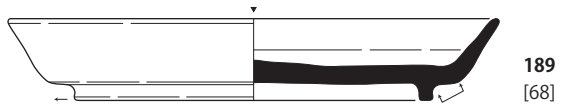
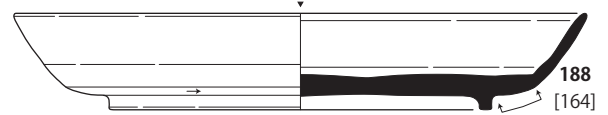
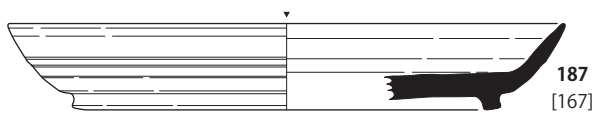
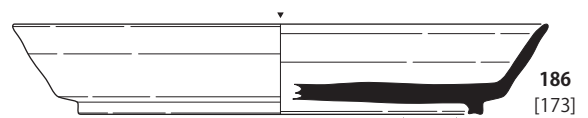
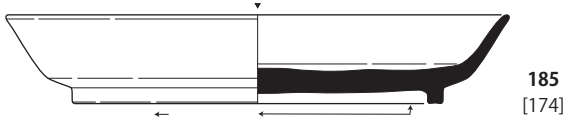
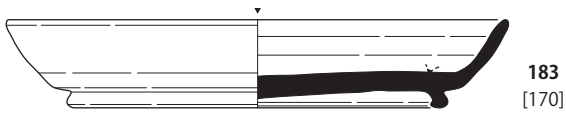
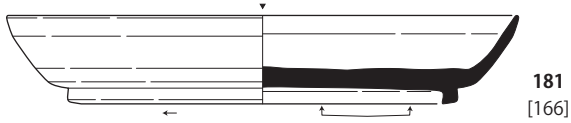
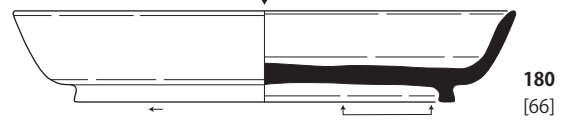
〈舟底状ピット出土 盤B〉



〈SK01 出土 盤B〉

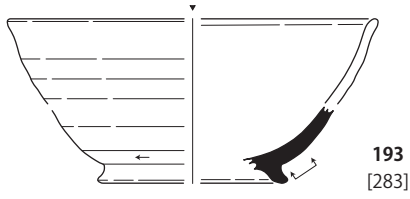


〈灰原・窯埋土出土 盤B〉



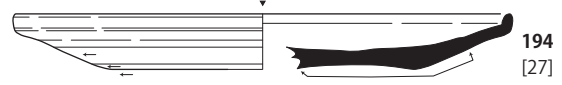
第 15 図 遺物実測図 8

〈灰原出土 塀B〉



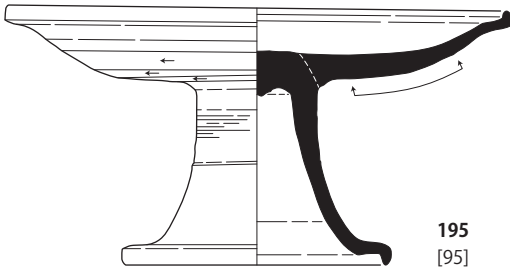
193
[283]

〈舟底状ピット出土 高盤〉



194
[27]

〈灰原出土 高盤〉



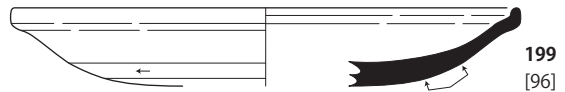
195
[95]



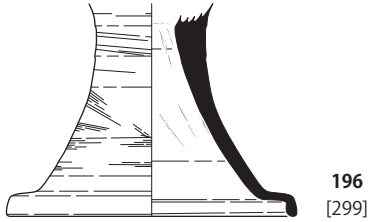
197
[93]



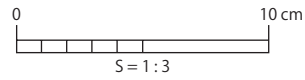
198
[94]



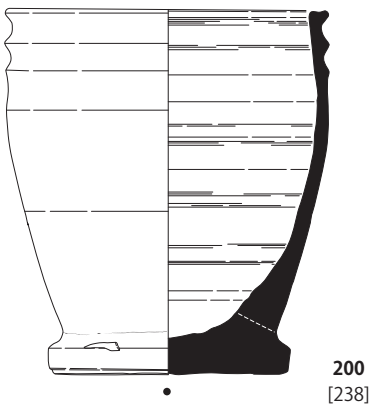
199
[96]



196
[299]



〈灰原出土 鉢F〉



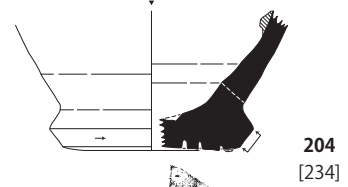
200
[238]



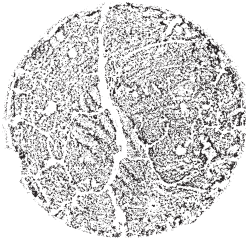
201
[239]



203
[236]



204
[234]



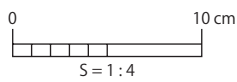
202
[235]



〈灰原出土 鉢A〉

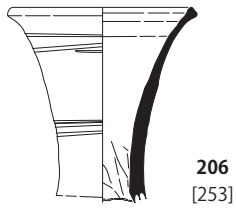


205
[237]



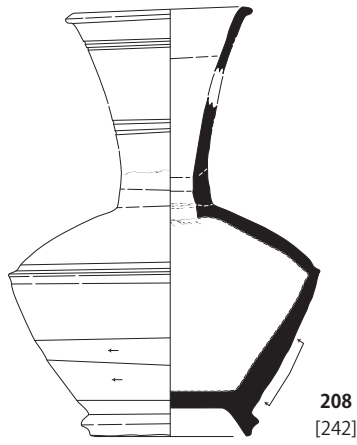
第16図 遺物実測図9

〈SK01 出土 瓶 A〉

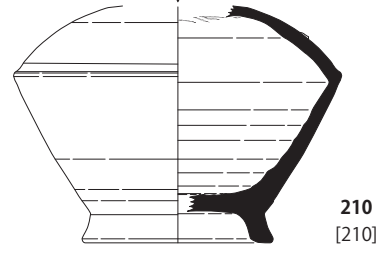


206
[253]

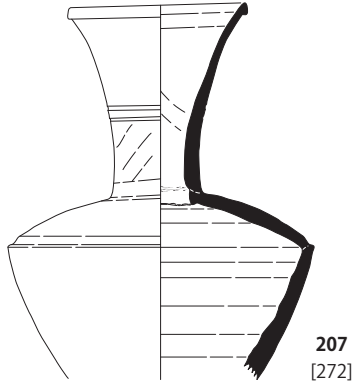
〈灰原・窯埋土出土 瓶 A〉



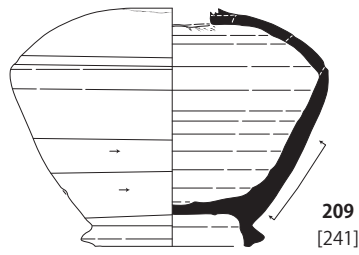
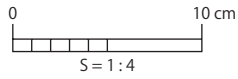
208
[242]



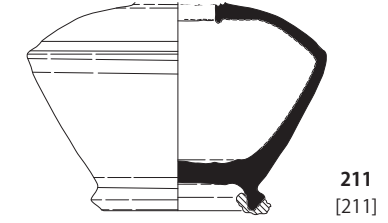
210
[210]



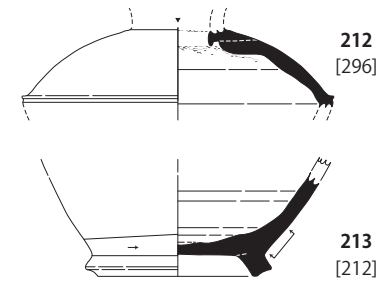
207
[272]



209
[241]



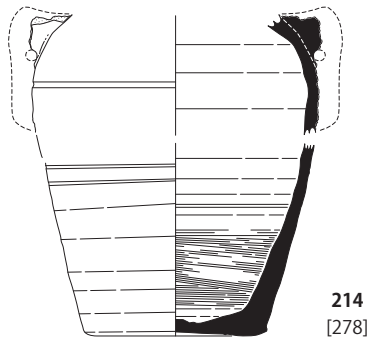
211
[211]



212
[296]

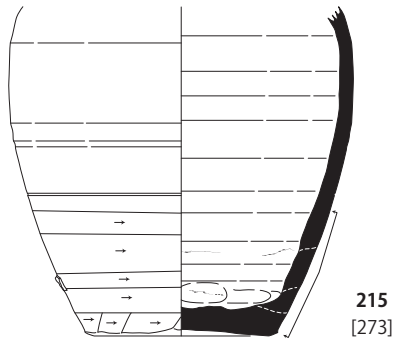
213
[212]

〈4-II号窯 2次床出土 瓶 D〉



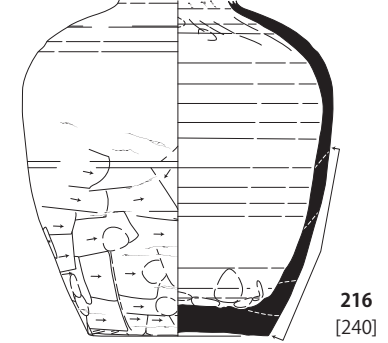
214
[278]

〈SK01 出土 瓶 D〉



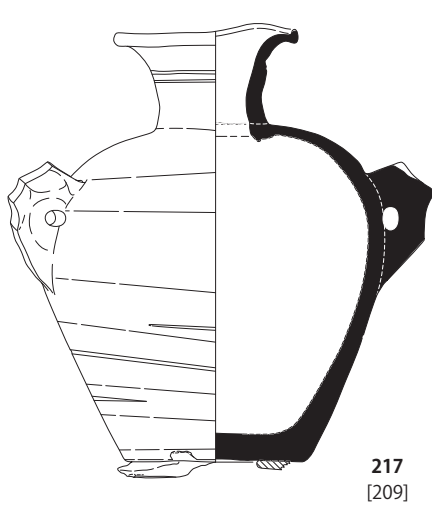
215
[273]

〈灰原+SK07 出土 瓶 D〉

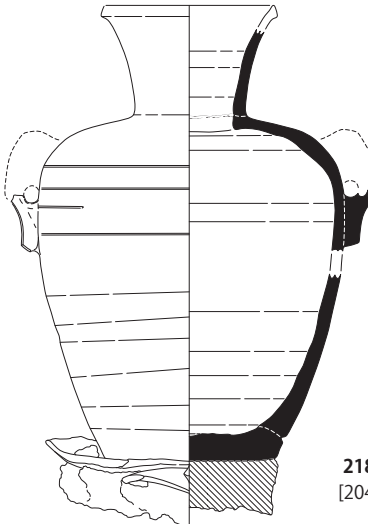


216
[240]

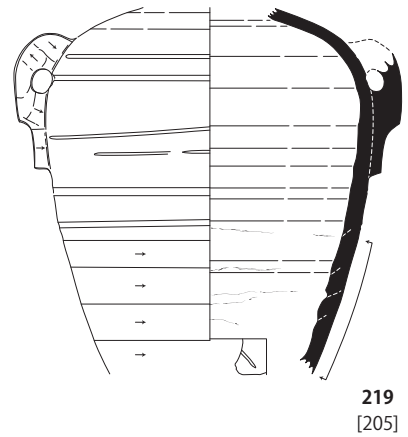
〈灰原・窯埋土出土 瓶 D〉



217
[209]

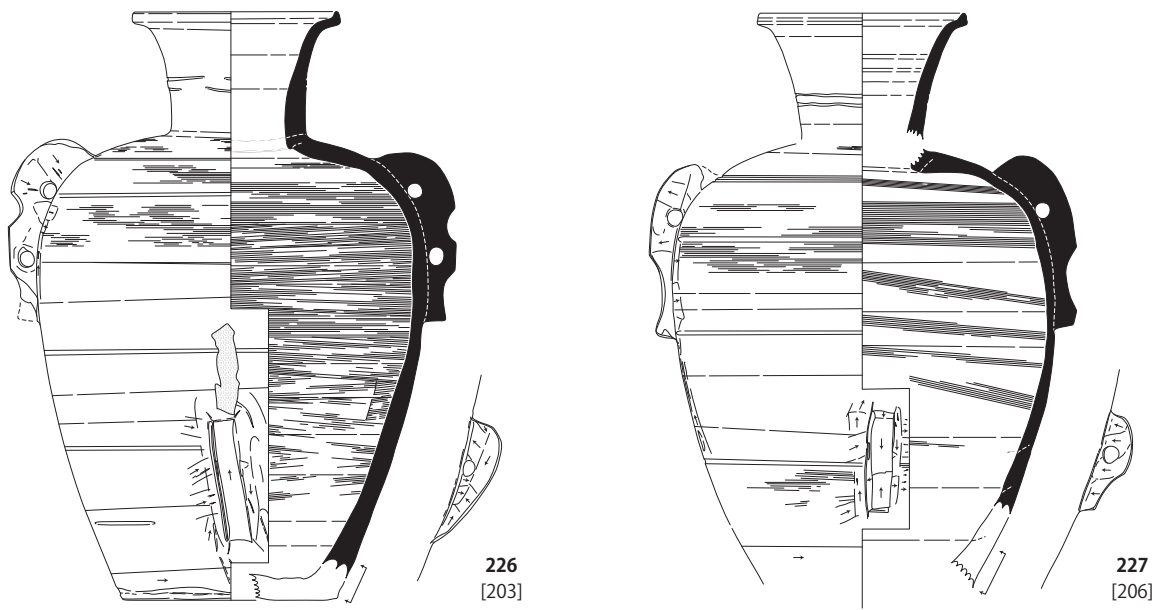
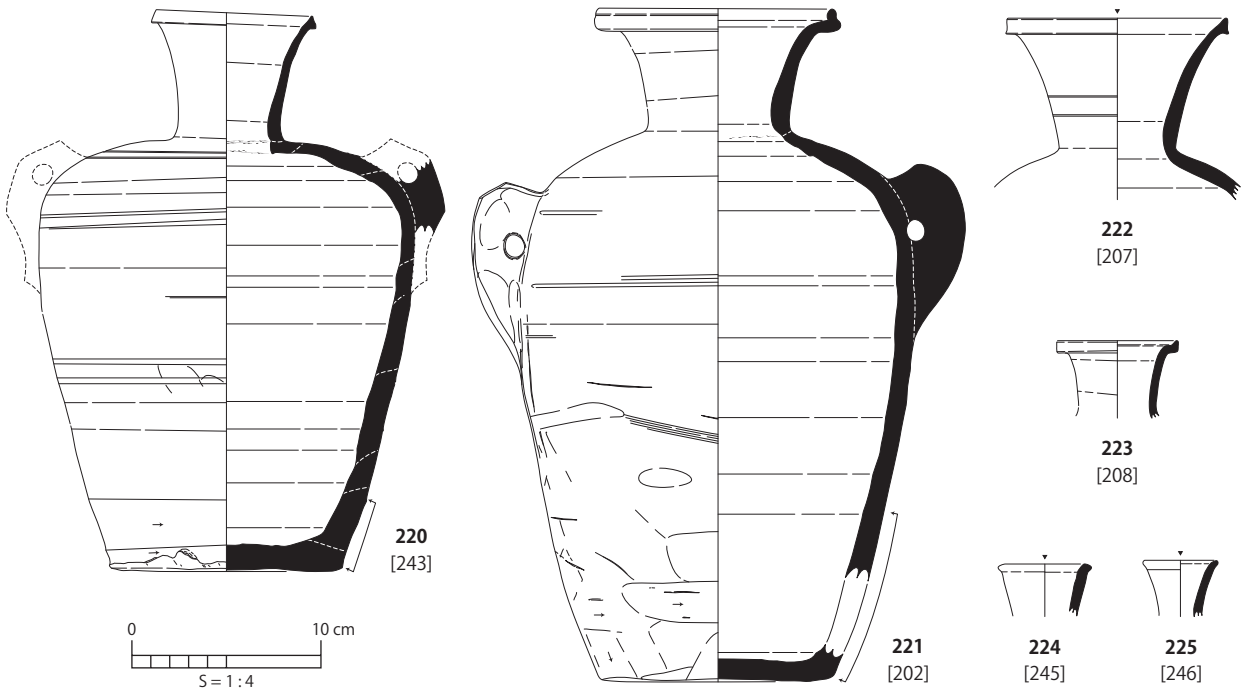


218
[204]

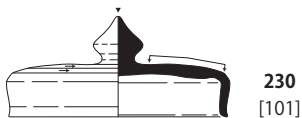
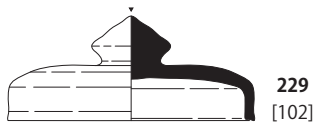
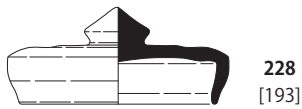


219
[205]

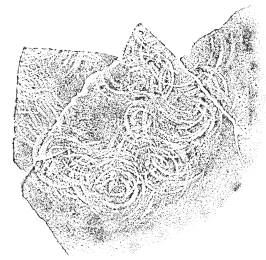
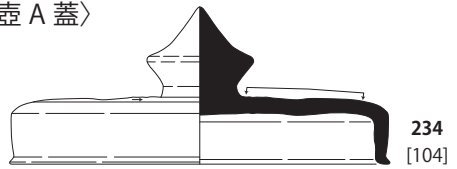
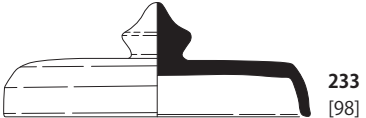
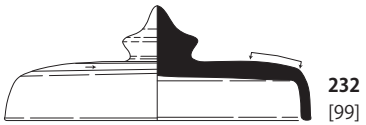
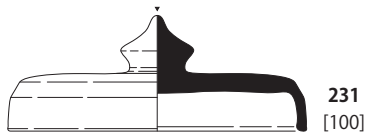
第 17 图 遺物実測图 10



〈SK01+ 灰原出土 壺 A 蓋〉

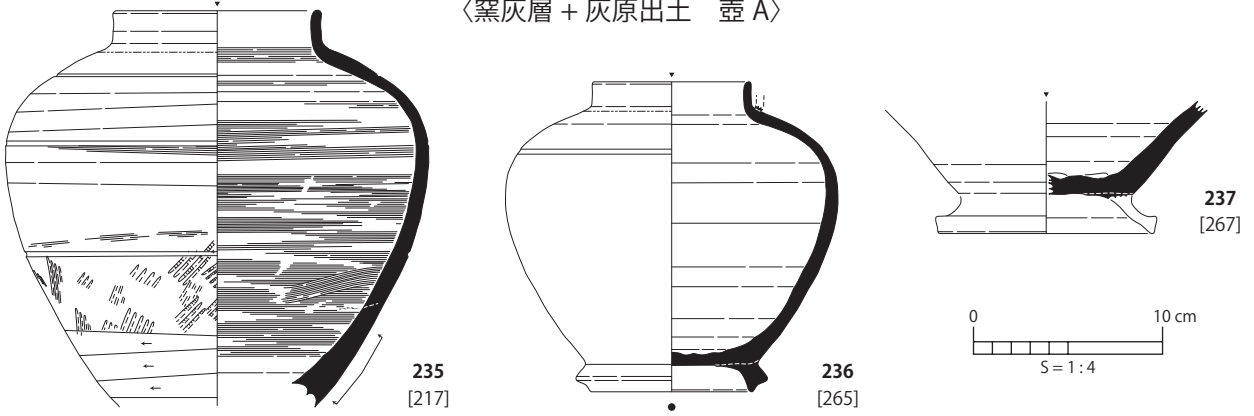


〈灰原出土 壺 A 蓋〉

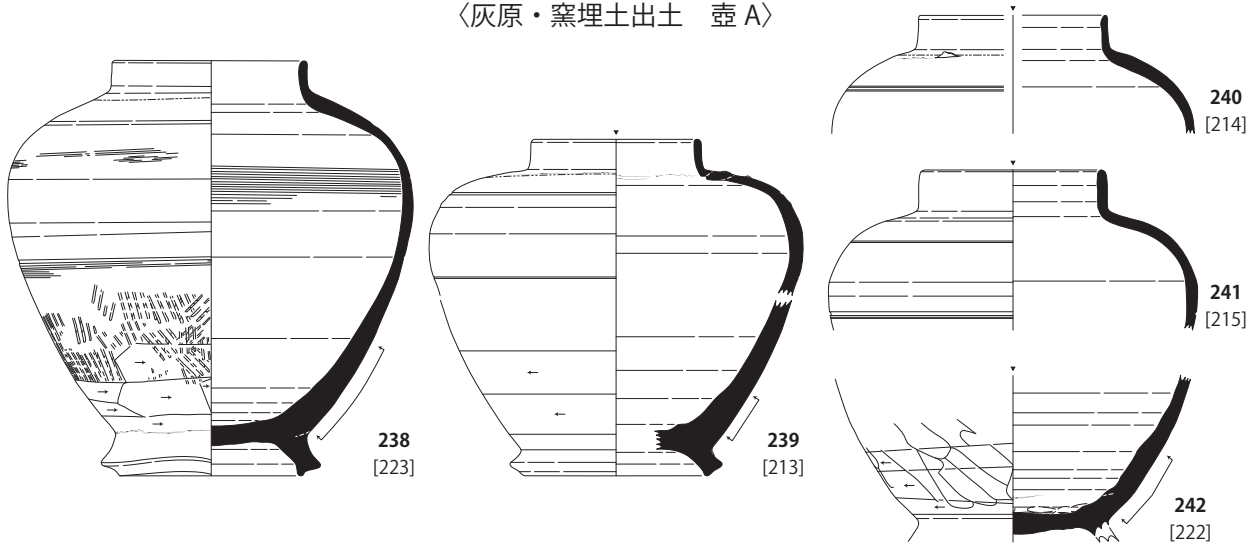


第18図 遺物実測図11

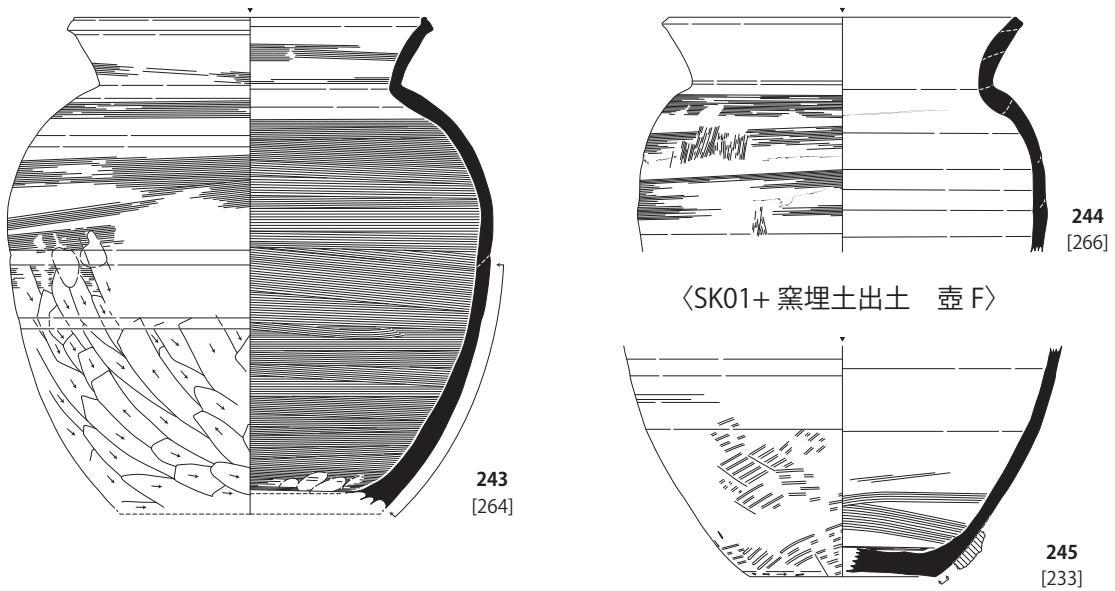
〈窯灰層 + 灰原出土 壺 A〉



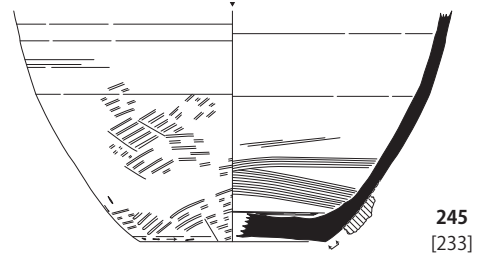
〈灰原・窯埋土出土 壺 A〉



〈窯灰層 + 灰原出土 壺 F〉



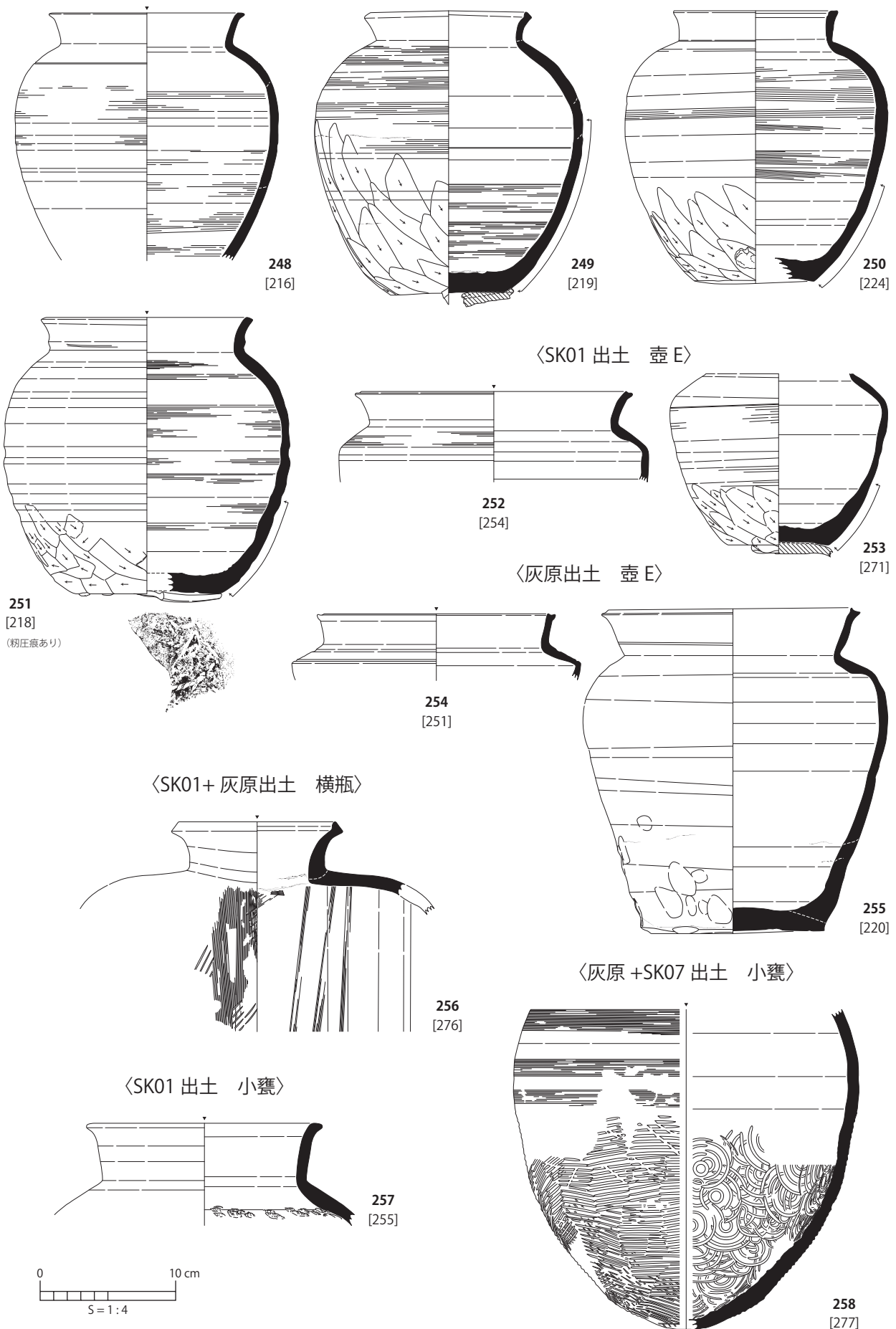
〈SK01+ 窯埋土出土 壺 F〉



〈灰原・窯埋土出土 壺 F〉

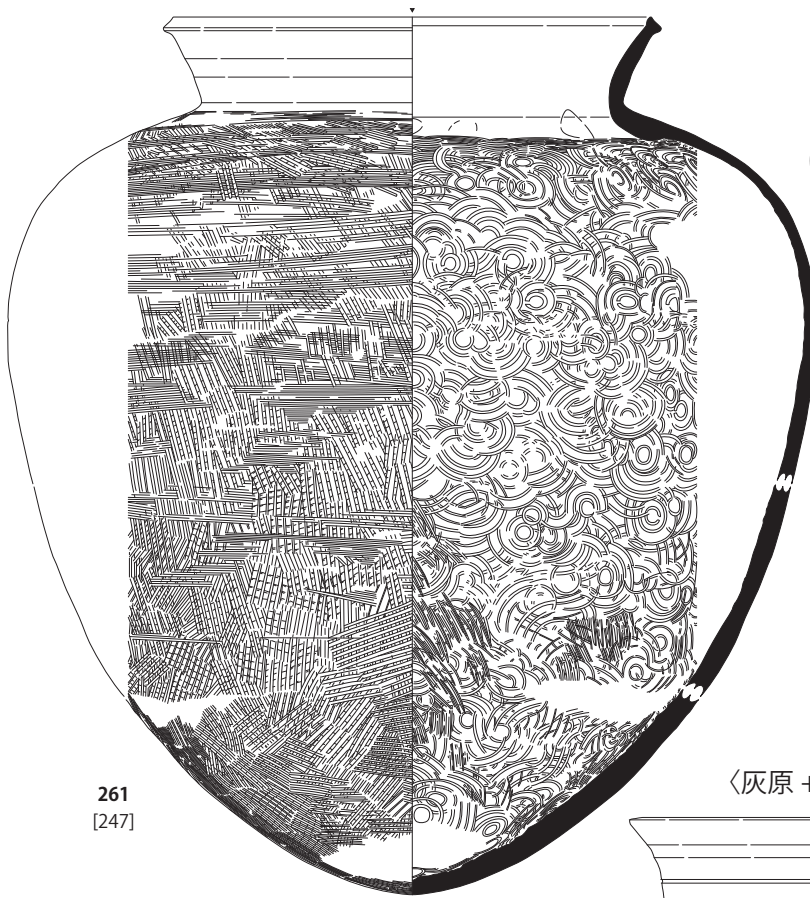


第 19 図 遺物実測図 12



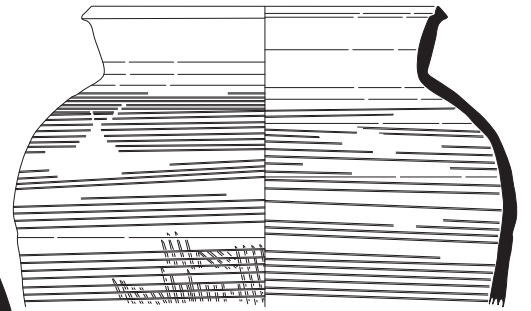
第 20 図 遺物実測図 13

〈SK01+ 灰原 + 窯埋土出土 中甕〉

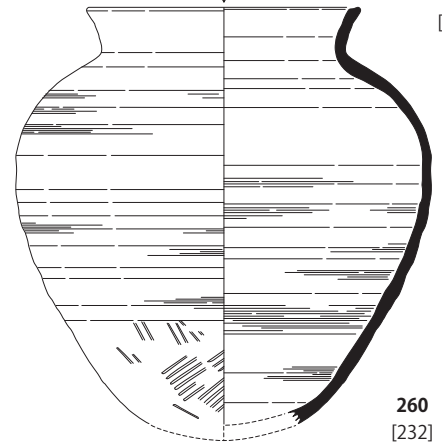


261
[247]

〈灰原出土 小甕〉

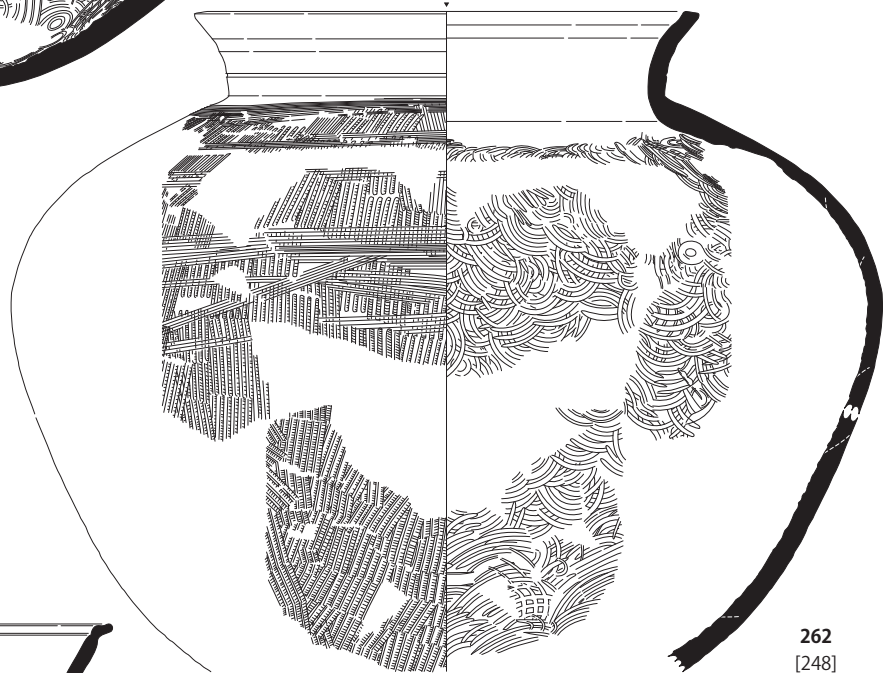


259
[231]



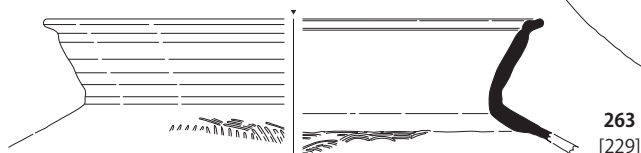
260
[232]

〈灰原 + 窯埋土出土 中甕〉

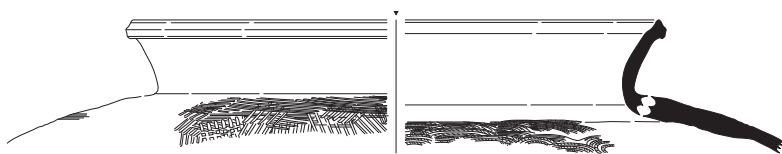


262
[248]

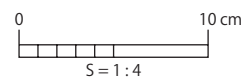
〈灰原出土 中甕〉



263
[229]

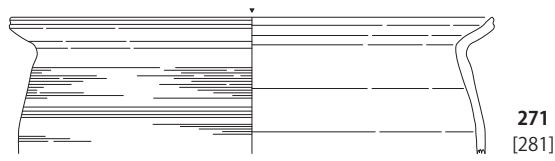
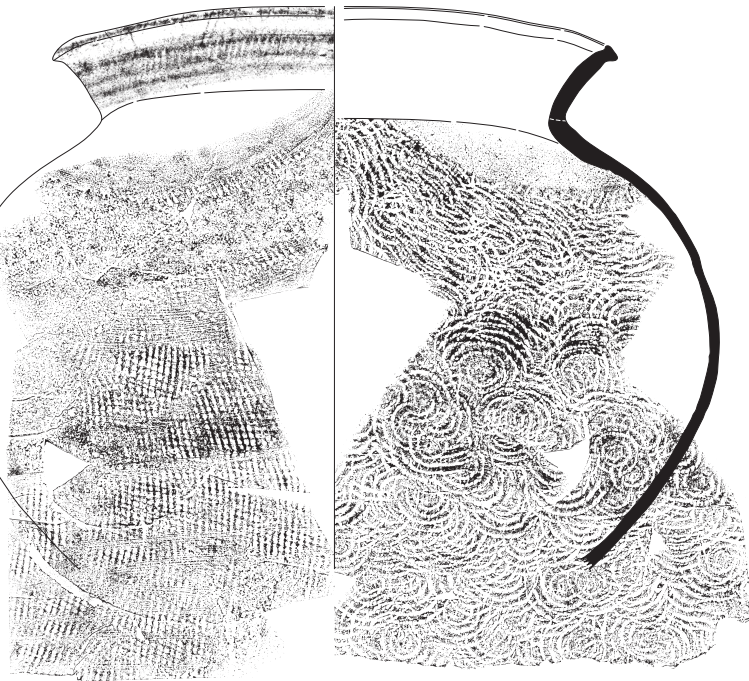
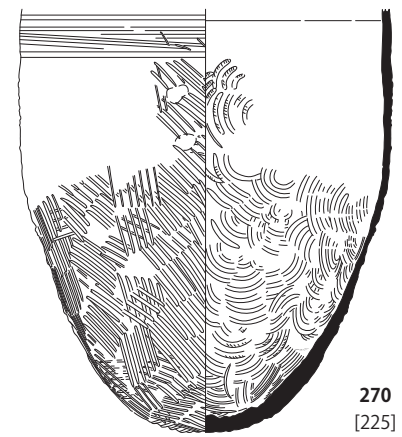
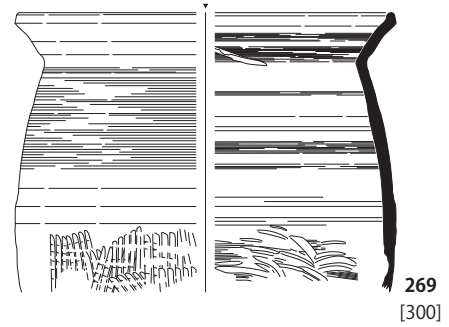
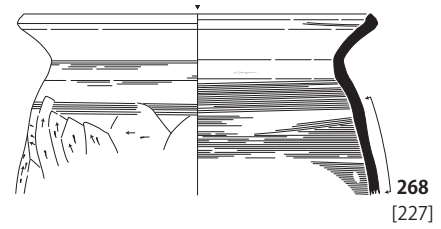
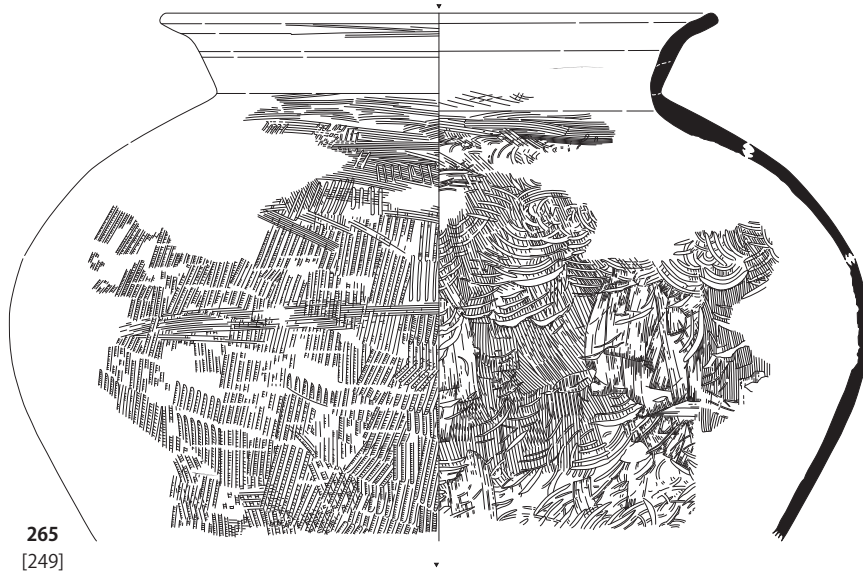
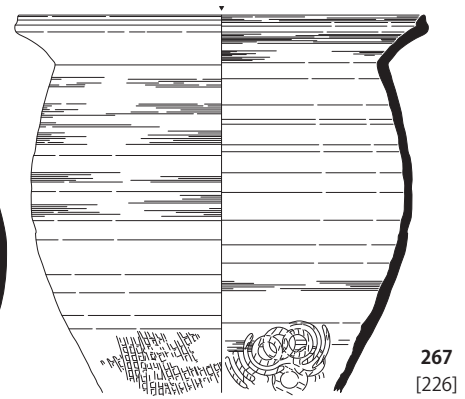


264
[228]



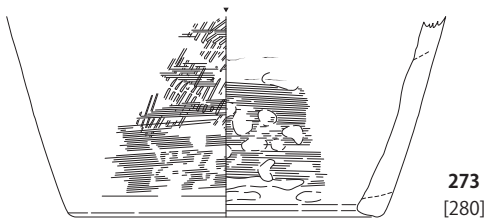
第 21 図 遺物実測図 14

〈灰原出土 長胴釜〉

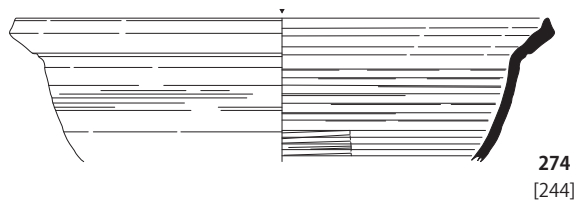


0 10 cm
S=1:4

〈灰原出土 甑〉

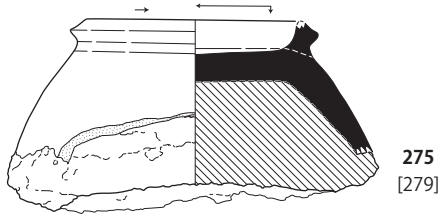


〈灰原出土 鍋〉



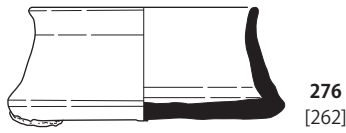
第22図 遺物実測図15

〈舟底状ピット出土 瓶 A 転用焼台〉

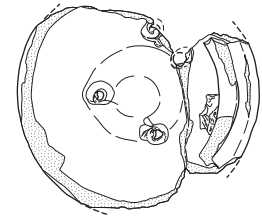


275
[279]

〈灰原出土 専用焼台〉

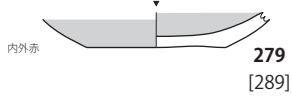


276
[262]

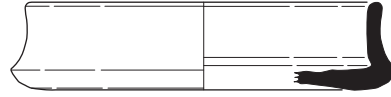


278
[291]

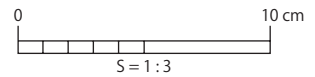
〈灰原出土 赤彩土師器埴 A〉



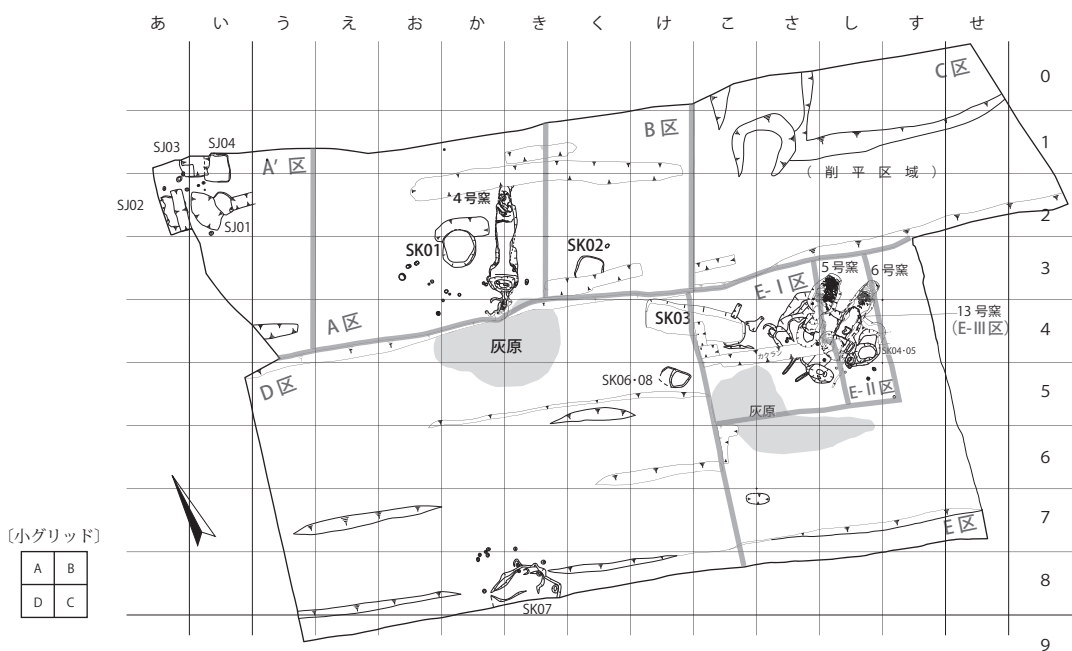
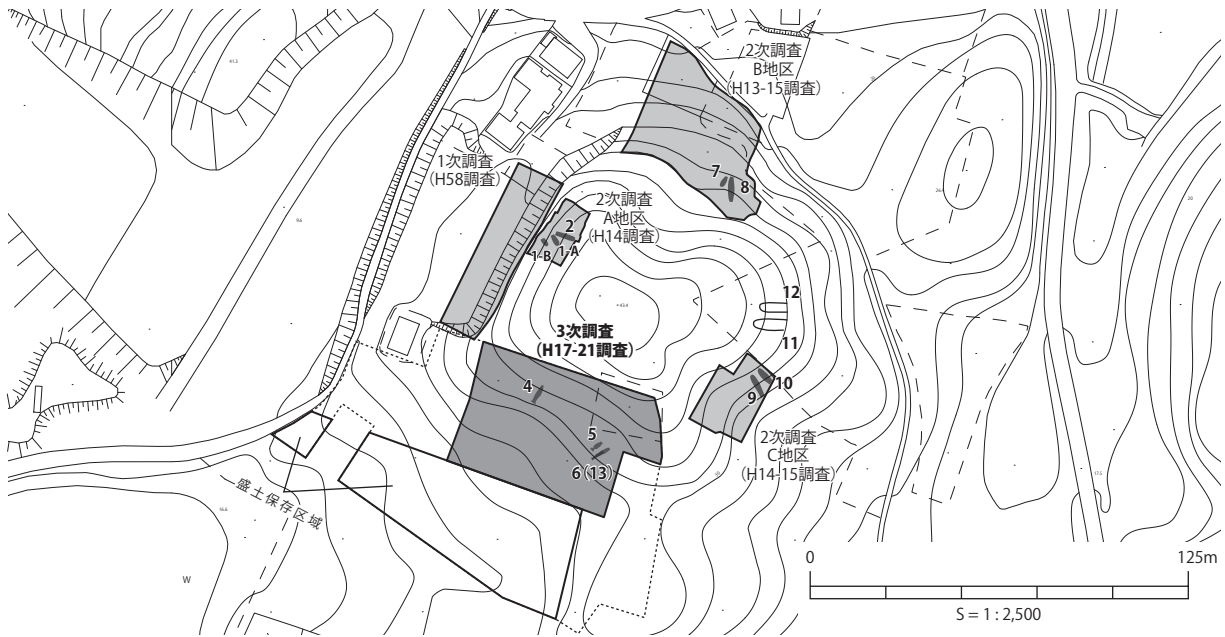
279
[289]



277
[263]



第 23 図 遺物実測図 16



第 24 図 調査地位置図 (上段・S=1:2500) と全体平面概略図 (下段・S=1:600)

第Ⅱ章 ニツ梨豆岡向山窯跡群 2 (遺物編 1)

掲載 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
1	97	突帯蓋	D	灰原	き 4Dgr22' 層	つ [4.7]、高 (6.9)、つ高 3.9	製	堅緻	内明青灰、外釉 (灰緑-ア 5Y4/2)	通常	-	右	天外回転アリ
2	192	突帯蓋	A	窯埋土	4 加 F 区 9-10 層・B 区 2 層・盛土 2 区	口 [19.8]、つ 3、高 [5.2]、つ高 2.3	製	堅緻	内灰、外釉 = 灰緑-ア (5Y4/2)	砂多	1	-	
3	11	坏 B 蓋大	A	Ⅱ 1 窯床	4 加 2 次床 41	口 [17]、高 (2)	転	(2 次被熱)	内外暗灰	通常	5	右	重Ⅱ b 類?、天外回転アリ
4	12	坏 B 蓋中	A	Ⅱ 2 窯床	4 加 31	口 [15.2]、高 (1.6)	転	(2 次被熱)	内外暗灰	砂多	2	右	天外回転アリ、ゆがみ大
5	21	坏 B 蓋小	A	窯灰層	4 加 C 区 3 層・5 層	口 [12.2]、高 (2)	製	やや不良 (半酸)	内橙 (7.5YR7/6)、外灰	通常	14	-	重Ⅰ類?
6	22	坏 B 蓋大	A・D	窯灰層+灰原	4 加 D 区 3-5 層+き 4Dgr16 層 (カマ) +き 4gr	口 16.4、つ 2.7、高 3.9、つ高 1.5	製	良	内外灰白	通常	20	-	重Ⅱ a 類
7	260	坏 B 蓋大	A	SK01	SK1-19・63・91	口 16.4、高 (2)	転	(2 次被熱)	内外黒 (N-2)	砂多	11	-	一部酸化気味
8	91	坏 B 蓋大	A・D	灰原	か 4Bgr 7' 13 層・7' 14 層+か 4Cgr18 層+調 D 区灰原内	口 [15.7]、つ 2.1、高 4.4、つ高 1.7	転	(2 次被熱)	内外暗青灰	砂多	7	-	
9	77	坏 B 蓋大	A	灰原	き 4Bgr1 層・6 層	口 [15.4]、つ [2.5]、高 3.8、つ高 1.4	製	堅緻	内外灰白	通常	22	右	重Ⅱ a 類、天外回転アリ、天内の記号「×」
10	84	坏 B 蓋大	A・D	灰原	か 4Agr1 層+き 4Bgr24 層+き 4Agr 盛土+か 4Dgr 盛土+か 4Cgr 7' 精査	口 [16.5]、つ [2.7]、高 3.3、つ高 1.1	製	堅緻	内外灰白	通常	9	右	重Ⅰ類、天外回転アリ、天内の記号「×」
11	72	坏 B 蓋大	A・D	灰原	き 4Agr22 層+き 4Dgr21 層+き 4Dgr カマ+き 4gr 内	口 [17.2]、つ [2.9]、高 4.5、つ高 1.6	製	堅緻	内外灰白	通常	5	右	重Ⅱ a 類、天外回転アリ
12	70	坏 B 蓋大	D	灰原	き 4Agr22 層+き 4Cgr18-27 層+き 4Dgr21 層	口 17.5、つ 2.7、高 4、つ高 1.6	製	良好	内灰白、外灰	通常	32	右	重Ⅰ類?、天外回転アリ
13	76	坏 B 蓋大	A	灰原	き 4Bgr1 層・14 層+き 3Cgr1 層+1 カマ	口 [18.4]、つ [2.9]、高 3.4、つ高 1.1	製	良好	内外灰白	通常	3	-	重Ⅱ b 類
14	75	坏 B 蓋大	D	灰原	か 4Cgr26 層+き 4Agr26 層	口 [15]、つ [2.6]、高 4.6、つ高 1.7	製	堅緻	内外灰白	通常	3	-	重Ⅱ a 類
15	78	坏 B 蓋大	D	灰原	き 4Dgr22' 層+き 4gr 内	口 16.8、つ [2.7]、高 2.4、つ高 1.4	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	26	-	重Ⅰ類
16	88	坏 B 蓋大	D	(灰原)	か 4Dgr 灰原盛土+か 4gr 内	口 [15.5]、つ [2.4]、高 4.8、つ高 1.2	製	良好	内外灰	通常	8	右	重Ⅱ a 類、天外回転アリ
17	179	坏 B 蓋大	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 加表土 1 区・盛土 1 区+か 4Agr1 層+か 4Bgr+か 4Cgr18 層	口 [15.9]、高 (2.3)	製	良好	内外灰	通常	11	右	重Ⅱ a 類?、天外回転アリ
18	180	坏 B 蓋大	A	灰原 (+ 窯埋土)	4 加盛土 1 区+か 4Bgr	口 [15.8]、高 (2.4)	製	良好	内外灰	通常	15	-	重Ⅱ a 類?、天外回転アリ
19	181	坏 B 蓋大	A	灰原 (+ 窯埋土)	4 加表土 1 区+か 4Agr1 層	口 [17.2]、高 (2.2)	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	8	右	重Ⅰ類
20	182	坏 B 蓋大	A	(窯埋土)	4 加盛土 1 区	口 [16.5]、高 (2.9)	製	やや不良 (半生)	内外白~灰白	通常	10	-	重Ⅱ a 類?、天外回転アリ
21	183	坏 B 蓋大	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 加盛土 1 区+か 4Cgr18-27 層+か 4Dgr18 層	口 [16.1]、高 (2.5)	製	良好	内外灰	通常	10	左	重Ⅱ a 類、天外回転アリ
22	184	坏 B 蓋大	A・D	灰原+窯埋土	4 加 D 区 2 層・埋土 1 区+き 4Bgr22-22' 層	口 [17]、高 (2.9)	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	20	-	重Ⅰ類、天外回転アリ
23	186	坏 B 蓋大	A・D	灰原+窯埋土	4 加 B 区 2 層+き 4Dgr6 層+調 D 区表土 (灰原区)	口 [16.4]、高 (2.5)	製	良好	内灰、外暗青灰	砂多	11	左	重Ⅱ a 類、天外回転アリ
24	79	坏 B 蓋中	A・D	灰原	き 3Cgr16 層+調 D 区灰原内	口 [13.2]、つ [2.5]、高 2、つ高 0.9	製	堅緻	内灰白、外釉 (オリーブ黒 7.5Y3/1)	砂少	23	-	重Ⅰ類
25	80	坏 B 蓋中	D	灰原	き 4Dgr19 層+き 5Dgr 表土・21 層	口 [13]、つ [2.6]、高 2、つ高 0.9	製	堅緻	内外灰白	砂少	13	-	重Ⅰ類
26	71	坏 B 蓋中	A・D	灰原	か 4Agr1 層+か 4Cgr21 層+き 4Bgr24 層+調 D 区内	口 [13]、つ [2.1]、高 2.7、つ高 0.8	製	良	内外灰白	通常	5	-	重Ⅰ類
27	74	坏 B 蓋中	D	灰原	き 4Agr25 層	口 13.6、つ 2.2、高 3.4、つ高 1.2	製	堅緻	内外灰白	通常	33	-	重Ⅱ a 類
28	89	坏 B 蓋中	D	灰原	き 4Agr22 層+き 4Dgr22' 層	口 [14]、つ [3.2]、高 3.4、つ高 1.3	製	良	内灰、外灰白	通常	11	-	天外回転アリ
29	90	坏 B 蓋中	A	灰原	か 4Bgr 7' 13 層	口 [13.5]、つ [2.6]、高 (3.4)、つ高 (1.3)	転	(2 次被熱)	内外灰白	通常	6	-	
30	92	坏 B 蓋中	A	灰原	き 3Dgr2 層・6 層	口 [13.9]、つ [2.9]、高 3.2、つ高 1.1	製	良好	内外灰	通常	19	-	重Ⅰ類?、天外回転アリ
31	87	坏 B 蓋中	D	(灰原)	か 4Dgr 灰原盛土	口 [14]、つ [2.7]、高 3.1、つ高 1.3	製	良好	内外灰白	砂多	13	-	重Ⅰ類
32	178	坏 B 蓋中	A	窯埋土	4 加 A 区 2-3 層・H 区 10 層・H 区 13 層・盛土 2 区	口 [13]、つ径 2.5、高 3.8、つ高 1.2	製	堅緻	内外灰白	通常	14	右	重Ⅰ類、天外回転アリ
33	69	坏 B 蓋中	A・D	灰原	き 4Agr1-3 層・22 層+き 4Dgr 7' 精査	口 14、つ 2.7、高 3.5、つ高 1.2	製	良好	内灰白、外灰	通常	31	-	重Ⅰ類?
34	177	坏 B 蓋中	A	灰原 (+ 窯埋土)	4 加表土 1 区+き 4Agr6 層	口 [13.9]、つ径 2.6、高 3.6、つ高 1.5	転	(2 次被熱)	内外灰白	通常	9	-	重Ⅱ a 類、天外回転アリ
35	176	坏 B 蓋中	A	(窯埋土)	4 加盛土 1 区	口 13.9、つ径 2.9、高 3、つ高 1.2	製	良好	内灰白、外灰~青灰	通常	20	-	天外回転アリ
36	185	坏 B 蓋中	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 加盛土+か 4Cgr18 層	口 [13.6]、高 (2.4)	製	良好	内外灰	通常	17	-	重Ⅱ a 類?、天外回転アリ
37	85	坏 B 蓋小	A・D	(灰原)	き 5Agr カマ+調 A 区盛土 1・1 カマ	口 12.5、つ 2.7、高 2.4、つ高 0.9	製	良好	内灰白、外灰	通常	34	右	重Ⅰ類、天外回転アリ、天内の記号「J」
38	175	坏 B 蓋小	A	(窯埋土)	4 加表土 1 区+表土 1	口 [12.3]、つ径 2.5、高 2.6、つ高 0.8	製	良好	内青灰、外灰	砂多	11	-	重Ⅰ類、天外回転アリ
39	81	坏 B 蓋小	D	灰原	き 4Cgr22 層	口 12.2、つ 2.4、高 3.2、つ高 1.2	製	良好	内外灰白	通常	30	-	重Ⅰ類
40	73	坏 B 蓋小	A・D	灰原	か 4Agr13 層+き 4Agr18 層+か 5gr 内	口 12.6、つ 2.5、高 2.9、つ高 1.2	製	良好	内灰白、外青灰	通常	20	-	重Ⅱ類
41	83	坏 B 蓋小	D	灰原	き 4Agr25 層	口 12.4、つ 2.6、高 (3.1)、つ高 (1)	転	(2 次被熱)	内外灰	通常	10	-	
42	82	坏 B 蓋小	D	灰原	き 4Agr25 層	口 [12.4]、つ [2.4]、高 3.5、つ高 1.2	製	良好	内外青灰	通常	10	-	重Ⅱ類
43	31	坏 B 身中	A	舟底状ビツト	舟底上層 24	口 [12.2]、台 [7.6]、高 4、台高 0.5	転	(2 次被熱)	内外暗青灰	通常	15	-	カマ付着
44	200	坏 B 身中	A	SK01	SK1-53	口 [13]、高 (3.8)	製	良好	内外灰	通常	6	-	
45	190	坏 B 身特大	D	(灰原)	き 5Agr カマ	台 [10]、高 (2.7)、台高 1.1	製	良好	内外灰白	通常	台 7	右	底外回転アリ
46	63	坏 B 身大	D	(灰原)	調 D 区灰原内	口 [16]、台 [12.8]、高 7.2、台高 0.9	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	体下~底外回転アリ
47	301	坏 B 身大	A	灰原	き 4Bgr6 層+き 3Cgr1-14 層	口 [16.6]、台 [12.5]、高 8.9、台高 0.8	製	堅緻	内灰白、外青灰	砂多	15	-	外 1 条沈線?
48	121	坏 B 身大	D	灰原	か 4Cgr18-27 層・カマ	口 15.6、台 11、高 6.9、台高 0.6	製	良好	内灰、外青灰~灰	砂多	15	-	底外回転アリ

掲載No.	実測No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
49	62	坏B身大	D	灰原	き4Agr18層	口16.2、台10、高6.5、台高0.4	製	良好	内灰白、外青灰	通常	25	右	底外回転アリ
50	124	坏B身大	D	(灰原)	か4Cgr 灰原内	口[16]、台[10.3]、高6.4、台高0.6	製	良好	内灰、外青灰	通常	7	-	底外回転アリ
51	120	坏B身大	D	灰原	か4Cgr21'層・21'・26層・18-27層	口[15.5]、台[9.1]、高6、台高0.5	製	良好	内灰、外青灰～灰	通常	7	右?	底外回転アリ
52	123	坏B身大	D	灰原	き4Dgr18層・21層・22-22'層	口15、台10.5、高6.1、台高0.6	製	良好	内外灰白	通常	29	-	
53	106	坏B身大	A	灰原+窯埋土	4かN区9層+か4Agr3層	口[16.5]、台[11.8]、高6.2、台高0.5	製	良	内灰白、外青灰	通常	4	-	
54	189	坏B身大	D	灰原	か4Dgr19層	口[15]、台[10.2]、高6.5、台高0.4	製	不良(生)	内外白	通常	4	右	底外回転記号「×」
55	125	坏B身大	D	灰原	き4Dgr22-22'層+か5Bgr盛土	口[15.1]、台[10.2]、高6.8、台高0.9	製	良好	内外灰白	通常	17	右	
56	103	坏B身大	D	灰原	か4Cgr19層+か4Dgr盛土	口[16.4]、台[11.2]、高6.8、台高0.4	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	20	-	
57	122	坏B身大	D	灰原	か4Cgr20-21層・21層+き4Dgr18層・21層・22-22'層	口14.9、台9.4、高6.3、台高0.5	製	良好	内灰、外青灰	砂多	15	右?	
58	105	坏B身大	A・D	灰原(+窯埋土)	4か表土1区・盛土1区+か4Cgr18・21層	口[17.5]、台[11.2]、高6.4、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	11	-	
59	187	坏B身大	A	灰原	き3Cgr16層・表土1・盛土1	口[16.4]、台[9.5]、高6.1、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	5	-	
60	108	坏B身大	A	窯埋土	4かE区・M区	台9.6、高(5.6)、台高0.5	製	良	内外灰白	砂少	底36	-	底外回転記号「 」
61	64	坏B身大	A	灰原	き4Bgr6層+き3Cgr6層+き3Dgr6層	口15.5、台9.5、高6.1、台高0.5	製	堅緻	内外青灰	砂多	26	右?	体外回転アリ
62	117	坏B身中	D	灰原	き4Dgr21層・22-22'層・24層	口12.4、台7.8、高4.5、台高0.5	製	良好	内灰、外青灰	通常	36	右	
63	188	坏B身中	A	灰原	き3Cgr1層・6層+き4Bgr6層+表土1+盛土1	口[12.7]、台[8.4]、高4.6、台高0.5	製	やや良	内暗灰～灰、外青灰～灰	通常	18	右	
64	118	坏B身中	D	灰原	か4Cgr21層+き4Dgr22-22'層	口[12.5]、台[8]、高4.4、台高0.4	製	良好	内灰、外暗灰	通常	15	右	
65	65	坏B身中	D	(灰原)	き5Agr 上トシ	口12.6、台7.9、高4.4、台高0.4	製	良	内灰、外青灰	通常	28	右	
66	119	坏B身中	A	灰原	か4Agr1層+き4Bgr14層+き3Cgr6層・1-14層	口[12.5]、台[8.2]、高4.5、台高0.5	製	堅緻	内灰白、外暗灰	通常	13	右?	
67	126	坏B身中	D	灰原	か4Agr6層・13層+か4Bgr6層+か4Dgr19層	口12.8、台7.8、高4.6、台高0.5	製	堅緻	内灰、外青灰	通常	21	-	
68	127	坏B身中	D	灰原	き5Agr6'層・表土+か4gr	口[12.5]、台[7.6]、高4、台高0.4	製	やや良	内灰、外灰白	通常	5	-	外2条沈線?
69	128	坏B身中	D	灰原	き4Dgr19層+き5Agr5層・7層精査	口[12.1]、台[7.4]、高4.2、台高0.4	製	堅緻	内灰白、外灰	砂少	8	右	
70	294	坏B身中	D	灰原	き4Bgr24層+き4gr 灰原内	口[12.2]、台[7.5]、高4.5、台高0.4	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	2	右	
71	107	坏B身小	A	(窯埋土)	4か盛土1区	口[11.5]、台[8.4]、高4.9、台高0.6	転	(2次被熱)	内外暗灰	通常	4	-	
72	129	坏B身小	A・D	灰原(+窯埋土)	4か表土1区+か4Cgr18層+き4Agr18'層・22-22'層	口[11]、台[7]、高4.6、台高0.6	転	(2次被熱)	内灰白、外青灰	通常	26	-	
73	292	坏B身小	D	灰原	き4Bgr23層	口[10.5]、台[7.8]、高3.9、台高0.5	製	良好	内灰、外青灰	通常	8	-	
74	293	坏B身小	A	灰原	か4Agr1層+き4Agr1-3層+表土1	口[10.6]、台[7.3]、高3.8、台高0.5	製	堅緻	内外灰白	通常	10	右?	
75	16	坏A	A	I 2窯床	4か1次窯2次床1・8・10	口[14]、底[10.2]、高3.4	製	堅緻	内外灰白	砂少	15	右	重皿類?
76	18	坏A	A	II 1窯床下+I 2窯床	4か1次窯2次床3・7・8+2次窯1次床床下0区	口[13.2]、底[9]、高3.9	製	不良(酸)	内明赤褐(5YR5/6)、外黄褐(10YR5/6)	通常	8	右	
77	19	坏A	A	II 1窯床下+I 2窯床	4か1次窯2次床4・6・8+2次窯2次床床下0区	口[12.4]、底[8.4]、高3.7	製	不良(酸)	内外明赤褐(5YR5/6)	通常	4	右	
78	3	坏A	A	II 1窯床	4か2次床13・5	口[13]、底[9.2]、高2.9	製	良好	内外灰	通常	8	右	重皿類
79	5	坏A	A	II 1窯床	4か2次床32	口[12]、底[8.7]、高3.1	転	(2次被熱)	内外暗灰	通常	13	-	底外回転記号「 」
80	4	坏A	A	II 1窯床	4か2次床16	口[12]、底[8.8]、高2.9	転	(2次被熱)	内外暗灰	通常	7	右?	
81	297	坏A	A	II 1窯床下	4か2次床1次床内(床下L区)	底8.6、高(2.9)	製	良好	内外灰	通常	底36	-	底外回転記号「 」
82	1	坏A	A	II 2窯床	4か7	口[13]、底[8]、高3.5	転	(2次被熱)	内灰、外暗灰	通常	7	-	
83	2	坏A	A	II 2窯床	4か37	口13.6、底9.6、高3.2	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	31	右	
84	29	坏A	A	舟底状ビット	舟底上層49+舟底床下G区f・h層	口12.4、底8.8、高3	転	(2次被熱)	内青灰、外暗青灰	通常	24	右	
85	25	坏A	A	窯灰層	4かA区3層	口[12]、底[8.6]、高3.2	製	不良(生)	内外灰白	通常	5	-	
86	26	坏A	A	窯灰層	4かC区3層	口[12.6]、底[8.2]、高2.7	製	堅緻	内外灰	通常	8	-	重皿類
87	199	坏A	A	SK01	SK1-C区2層	口[12.5]、底[10]、高3.3	製	不良(生)	内外白	通常	3	-	
88	17	坏A	D	灰原	き4Agr24'層	口12.8、底8.6、高3.4	製	良好	内外灰	通常	26	右	重皿類
89	46	坏A	D	灰原	き4Agr22-22'層	口[12.5]、底[8.6]、高3.6	製	不良(生)	内外白	砂多	11	-	重皿類
90	37	坏A	D	灰原	か4Cgr18層	口13、底9.8、高3.5	製	良	内外灰	通常	25	右	重皿類
91	115	坏A	A	(窯埋土)	4か表土1区	口[12.5]、底[9.6]、高3.7	製	やや不良	内外灰	砂多	8	-	重皿類
92	112	坏A	A	(窯埋土)	4か盛土1区	口[12.9]、底[9.3]、高3.2	製	良好	内外灰	砂少	9	-	重皿類
93	110	坏A	A・D	灰原(+窯埋土)	4か表土1区+か4Cgr表土・盛土・灰原内	口[12.4]、底[8.6]、高3.4	製	良好	内外灰	通常	5	-	重皿類
94	53	坏A	D	灰原	き4Agr1層	口[13.5]、底[9.8]、高3.6	製	良	内外暗灰	通常	10	-	
95	47	坏A	D	灰原	き4Agr18層・22-22'層	口[12.2]、底[8.6]、高3.4	製	良好	内外灰	通常	19	右?	
96	48	坏A	D	灰原	き4Agr22-22'層・24層・25層	口[11.2]、底[7.8]、高3.4	製	良好	内外灰	通常	12	右	
97	50	坏A	D	灰原	き4Agr22層・22-22'層・24層+き4Cgr24層	口[12.5]、底[9.2]、高3.7	製	良好	内外灰	通常	8	右	重皿類
98	55	坏A	D	灰原	き4Dgr18層	口13、底9.4、高3.4	製	やや不良(半生)	内外灰白	砂多	10	右	重皿類、底外回転記号「 」
99	56	坏A	D	灰原	き4Dgr21層	口13、底9.5、高3.4	製	やや不良(半生)	内外灰白	砂多	14	-	重皿類、底外回転記号「 」
100	58	坏A	D	灰原	き4Agr22層	口[13.5]、底[10.4]、高3.9	製	不良(生)	内外白	通常	10	右	重皿類、底外回転記号「×」
101	51	坏A	D	灰原	き4Agr22層・22-22'層・25層	口[12.5]、底[8.2]、高3.3	製	良好	内外灰	通常	9	-	重皿類

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群 2 (遺物編 1)

掲載No.	実測No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
102	52	坏A	D	灰原	き4Agr22層	口[12.5]、底[9]、高3.3	製	良好	内青灰、外灰	通常	11	右?	
103	43	坏A	D	灰原	き4Dgr22-22'層・22層	口[12.5]、底[9.4]、高3.1	製	良好	内外灰	通常	10	右	重Ⅲ類
104	116	坏A	A	窯埋土	4が2層	口[13]、底[10.2]、高3.4	製	良好	内外灰白	通常	9	-	重Ⅲ類
105	113	坏A	D	灰原	き4Agr18層・表土	口[12]、底[9.2]、高2.9	製	堅緻	内外灰白	通常	18	-	重Ⅲ類
106	40	坏A	D	灰原	き4Agr22層・25層	口[12.5]、底[9.6]、高3.3	製	堅緻	内外明青灰	通常	7	右	重Ⅲ類
107	109	坏A	D	灰原	き4Bgr19層・22'層	口[12.1]、底[8.9]、高3.3	製	不良(生)	内外白	通常	31	左?	
108	57	坏A	D	灰原	き4Dgr18層・22-22'層	口13、底9.6、高3.6	製	やや不良(半生)	内外灰白	通常	24	右	重Ⅲ類、底外への記号「J」
109	45	坏A	D	灰原	き4Dgr6層+か4Cgr	口[12.5]、底[10]、高3.3	製	堅緻	内外灰	砂少	7	右	重Ⅲ類
110	111	坏A	A	(窯埋土)	4が表土1区	口[12]、底[8.3]、高3.3	製	良好	内外青灰	通常	5	-	
111	61	坏A	D	灰原	か4Cgr21層+き5Agr上層	口[12]、底[9.1]、高3	製	やや不良(半酸)	内赤灰、外灰	通常	13	右	底外への記号「J」
112	274	坏A	D	灰原	き4Agr22層	口[12.5]、底[9]、高3.7	製	不良(生)	内外白	通常	7	右	重Ⅲ類、底外への記号「J」
113	44	坏A	A・D	灰原	き4Agr1層・3層+き4Bgr24層	口[12]、底[8.8]、高3.4	製	良好	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類
114	36	坏A	D	灰原	き4Dgr22層	口[12]、底8.6、高3.3	製	良好	内外灰	通常	32	右	重Ⅲ類
115	42	坏A	D	灰原	き4Agr22-22'層・25層	口[12.8]、底[9.4]、高3.3	製	堅緻	内外明青灰	通常	5	右	重Ⅲ類
116	54	坏A	D	灰原	き4Dgr18層・21層・22-22'層	口[12.5]、底[9.1]、高3.4	製	やや不良(半生)	内外灰白	通常	19	-	重Ⅲ類?、底外への記号「X」
117	41	坏A	D	灰原	き4Dgr6層	口[12.5]、底[9.4]、高3.6	製	良好	内外青灰	砂多	10	-	
118	38	坏A	D	灰原	き4Dgr18層	口12、底8.3、高3.6	製	良	内外灰白	砂少	27	右	重Ⅲ類
119	59	坏A	A・D	灰原	き3Dgr6層+き4Bgr22-22'層・24層+表土1	口[12.5]、底[8]、高3.4	製	堅緻	内外青灰	通常	11	右?	重Ⅲ類、底外への記号「X」
120	114	坏A	A	窯埋土	4がE区	口[12.5]、底[9]、高3.2	製	良好	内外灰	砂少	7	-	重Ⅲ類
121	60	坏A	A・D	灰原	か4Agr1層+き4Bgr22-22'層・24層	口[13]、底[8.8]、高3.4	製	堅緻	内外明青灰	通常	10	-	重Ⅲ類、底外への記号「X」
122	39	坏A	D	灰原	き4Dgr6層+き4gr灰原内	口12.2、底8.2、高3.6	製	不良(酸)	内外明青灰=5YR7/2	通常	26	右	重Ⅲ類
123	49	坏A	D	灰原	き4Dgr18層+7ヶ精査	口[13]、底[8.8]、高3.6	製	良	内外灰白	砂少	10	-	重Ⅲ類
124	10	盤A	A	I 2 窯床下	4が1次床内床下m区	口[16]、底[13]、高2.5	製	良好	内灰、外灰白	通常	18	右	重Ⅲ類
125	20	盤A	A	I 2 窯床下	4が1次床下D区	口[16]、底[13]、高2.3	製	堅緻	内外灰	通常	5	-	重Ⅲ類
126	9	盤A	A	II 2 窯床+II 1 窯床	4が2次床21+4が33	口[16.5]、底[13.4]、高2.3	製	堅緻	内外灰白	通常	13	右	重Ⅲ類
127	7	盤A	A	II 1 窯床+床下	4が2次床39+2次床下N区	口[17.4]、底[15]、高2.4	製	良好	内外明青灰	砂多	9	右	
128	8	盤A	A	II 1 窯床+床下	4が2次床35+2次床下N区	口[16.4]、底[13.5]、高2.6	製	不良(生)	内外白	通常	3	右	
129	6	盤A	A	II 1 窯床	4が22	口[15]、底[11.9]、高2.3	転	(2次被熱)	内外暗灰	通常	3	-	
130	28	盤A	A	舟底状のト	舟底上層64	口[16]、底[13.6]、高2.3	転	(2次被熱)	内青灰、外暗青灰	通常	6	-	
131	24	盤A	A	窯灰層	4がD区5層	口[17.8]、底[13.2]、高2.6	製	堅緻	内外暗青灰	通常	5	-	重Ⅲ類
132	23	盤A	A	窯灰層	4がD区5層	口[15.8]、底[12.8]、高2.4	製	堅緻	内灰、外青灰	通常	3	-	重Ⅲ類
133	257	盤A	A	SK01	SK1-104	口16、底13.7、高2.8	製	良好	内外灰	砂多	36	右	
134	258	盤A	A	SK01	SK1-105	口17、底13.8、高2.6	製	良好	内外灰	通常	36	右	重Ⅲ類
135	143	盤A	D	灰原	き4Agr24層+き4Cgr24層	口[17]、底[14.8]、高2.6	製	良	内外灰	通常	10	右	
136	159	盤A	D	灰原	き4Agr24層・24'層	口[16.9]、底[15.2]、高2.9	製	やや不良(半生)	内外灰白	通常	6	-	
137	146	盤A	D	灰原	き4Cgr26層	口[16]、底[13.6]、高2.6	製	良好	内灰、外暗灰	通常	19	-	
138	150	盤A	D	(灰原)	き4gr灰原内	口15.9、底13.1、高2.9	製	良好	内外灰	通常	23	右	重Ⅲ類
139	34	盤A	D	灰原	き4Bgr1層・23層・24層+か4Cgr表土盛土	口16、底13.3、高2.8	製	良好	内外灰	通常	15	右	
140	154	盤A	A	灰原	き3Dgr2層・6層+き4Dgr6層	口16.2、底13.8、高2.3	製	良	内外灰白	通常	24	右	重Ⅲ類
141	32	盤A	D	灰原	き4Dgr21層	口15.8、底13.4、高2.1	製	堅緻	内外灰白	通常	31	右	重Ⅲ類
142	144	盤A	D	灰原	き4Dgr24層	口[15.9]、底[13.7]、高2	製	良	内外灰白	通常	16	-	重Ⅲ類
143	140	盤A	D	灰原	き4Dgr6層	口[16]、底[13.9]、高2.1	転	(2次被熱)	内外灰	砂多	12	右?	
144	163	盤A	A	(窯埋土)	4が盛土1区	口[16.8]、底[14.3]、高2.2	製	やや不良(半生)	内外灰白	通常	5	-	重Ⅲ類
145	139	盤A	D	灰原	か4Cgr23層	口[16]、底[13.4]、高2.1	製	堅緻	内外暗青灰	通常	8	-	重Ⅲ類
146	33	盤A	D	灰原	き4Dgr2層・18層・21層	口16.8、底14、高2.4	製	やや不良(半生)	内外白	通常	14	右	重Ⅲ類
147	131	盤A	D	灰原	き4Agr22層+き4Dgr21層	口15.8、底13.2、高2.3	製	やや良	内外灰白	通常	28	左?	重Ⅲ類
148	35	盤A	D	灰原	き4Dgr22-24層+き4Dgr盛土+調D区灰原内	口[17]、底[15]、高2.3	製	良好	内青灰、外灰	通常	7	右	
149	132	盤A	A	灰原	き4Bgr6層	口16、底13.7、高2.3	製	やや良	内外灰白	通常	24	右	重Ⅲ類
150	138	盤A	D	灰原	き4Agr26層	口[16.4]、底[13.6]、高2.3	製	良好	内外灰	通常	16	-	重Ⅲ類
151	134	盤A	D	灰原	か4Cgr18層	口[16]、底[13.6]、高2.5	製	良	内灰、外青灰	通常	17	右	重Ⅲ類
152	137	盤A	D	灰原	か4Agr6層	口[15.5]、底[12.2]、高2.4	製	不良(生)	内外白	通常	12	-	重Ⅲ類
153	133	盤A	A	灰原	き3Cgr1層+き4Bgr14層・盛土	口16、底13.7、高2.6	製	良	内灰白、外灰	砂少	18	-	重Ⅲ類
154	148	盤A	D	灰原	き4Dgr6層・24層・7ヶ精査	口[16]、底[13.6]、高2.4	製	堅緻	内外灰白	通常	10	-	重Ⅲ類
155	152	盤A	D	(灰原)	き4Dgr盛土	口16.8、底13.7、高2.6	製	不良(酸)	内明青灰(2.5YR7/2~6/2)、外灰白	通常	16	右	重Ⅲ類
156	156	盤A	D	灰原	き4Dgr21層	口15.4、底13.2、高2.5	製	不良(生)	内外白	通常	26	-	重Ⅲ類
157	153	盤A	D	灰原	き4Bgr22層	口16.1、底13.4、高2.7	製	良好	内外灰白	通常	27	右	重Ⅲ類
158	149	盤A	D	(灰原)	き4gr灰原内	口17、底14.4、高2.6	製	堅緻	内外灰白	通常	29	右?	重Ⅲ類
159	256	盤A	A	灰原	き4Agr6層	口[16.5]、底[13.8]、高2.2	製	不良(生)	内外白	通常	7	-	重Ⅲ類、底外への記号「E」
160	157	盤A	A	灰原	き4Agr2-3層・6層	口[15.9]、底[14]、高2.5	製	不良(生)	内外白	通常	9	右	重Ⅲ類
161	160	盤A	A	灰原(+窯埋土)	4が表土1区+き3Cgr1層・6層+き3Dgr2層+き4Bgr6層	口[15.4]、底[13.2]、高2.4	製	良	内外灰	通常	18	右	重Ⅲ類
162	162	盤A	A・D	灰原(+窯埋土)	4が表土1区+か4Bgr25層+か4Cgr18層・18-27層+き4Agr上層+表土	口[16]、底[13.3]、高2.6	製	堅緻	内外灰白	通常	25	-	重Ⅲ類
163	161	盤A	A・D	灰原(+窯埋土)	4が表土1区+か4Cgr表土・盛土	口[16]、底[12.6]、高2.4	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	重Ⅲ類

掲載No.	実測No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
164	155	盤 A	A	灰原	き 4Bgr6 層 + お 4gr 盛土 + 表土 1 区	口 15.8、底 12.8、高 3	製	良好	内灰白、外青灰	通常	26	-	重皿類
165	141	盤 A	D	灰原	き 4Bgr23 層 + き 4Cgr22 層・7' 精査 + か 4Cgr23 層 + か 4Dgr トリフ	口 15.8、底 13.5、高 2.5	製	堅緻	内外暗青灰	通常	18	-	重皿類
166	142	盤 A	D	灰原	き 4Bgr1 層 + 24 層	口 [17.8]、底 [15]、高 2.5	製	堅緻	内外灰白	通常	11	-	重皿類?
167	147	盤 A	D	灰原	き 5Agr6 層・7' 精査・上トリフ	口 16、底 14、高 2.4	製	良好	内外灰白	通常	14	左?	重皿類?
168	151	盤 A	D	灰原	か 4Cgr21 層・18・27 層	口 16.2、底 13.9、高 2.4	製	良好	内灰、外灰白	砂多	20	右	重皿類
169	135	盤 A	D	灰原	き 4Dgr6 層・22・22' 層	口 [17]、底 [14.6]、高 2.5	製	良	内外灰白	通常	13	-	重皿類
170	158	盤 A	A	灰原	か 4Dgr19 層 + き 3Dgr6 層	口 [16]、底 [13.6]、高 2.3	製	やや不良 (半酸)	内外灰白~明赤灰	砂少	17	-	重皿類
171	145	盤 A	D	灰原	き 4Agr26 層	口 [16.5]、底 [13.8]、高 2.3	製	良好	内外灰	通常	16	-	重皿類
172	136	盤 A	D	灰原	き 4Dgr21 層	口 [16.2]、底 [13.6]、高 2.5	製	不良 (生)	内外白	通常	15	-	重皿類
173	130	盤 A	D	灰原	き 4Dgr18 層	口 [16.8]、底 [14.3]、高 2.5	製	やや不良	内外灰白	通常	14	右?	
174	15	盤 B	A	II 1 窯床 + I 2 窯床	4 桁 2 次床 48+1 次窯 2 次床 7	口 [20.2]、台 [12.2]、高 3.2、台高 0.7	転	(2 次被熱)	内暗青灰、外青灰	通常	7	右	底外回転ケズリ
175	14	盤 B	A	II 1 窯床	4 桁 2 次床 12	口 [23]、台 [15.2]、高 3.1、台高 0.6	転	(2 次被熱)	内青灰、外暗青灰	砂多	6	-	
176	13	盤 B	A	II 2 窯床	4 桁 40	口 [19.1]、台 [14.2]、高 3.4、台高 0.5	転	(2 次被熱)	内青灰、外暗青灰	砂多	13	右	底外回転ケズリ、底外へ記号「J」?
177	30	盤 B	A	舟底状ビット	舟底上層 + 舟底床下 f・f' 層 + 窯埋土 9・10 層	口 [20.4]、台 [14]、高 3.6、台高 0.6	転	(2 次被熱)	内外灰	通常	20	右	重皿類?、底外回転ケズリ
178	201	盤 B	A	SK01	SK1-64・C 区	口 [19.5]、台 [15.5]、高 3.5、台高 0.5	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	2	-	
179	165	盤 B	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 桁表土 1 区 + か 4Cgr18-21 層・21' 層 + き 5Agr6' 層	口 21、台 15.7、高 3.8、台高 0.7	製	良好	内外灰	通常	16	右	
180	66	盤 B	A・D	灰原	き 3Dgr2 層 + か 4Cgr21 層 + き 4Agr22・22' 層 + き 4Bgr22 層 + 調 D 区灰原内	口 [20]、台 [14]、高 3.6、台高 0.6	製	堅緻	内外灰白	通常	10	右	重皿類、底外回転ケズリ
181	166	盤 B	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 桁盛土 1 区 + お 4gr 盛土 + か 3gr + 調 D 区灰原表土	口 [20]、台 [15.4]、高 3.5、台高 0.6	製	やや不良 (半酸)	内外灰 (底内外明赤灰)	通常	19	右	重皿類、底外回転ケズリ
182	171	盤 B	D	灰原	き 4Agr1 層・24' 層・25 層 + き 4Dgr18 層・22-22' 層	口 19.8、台 14.6、高 3.8、台高 0.4	製	良	内灰白、外灰	通常	21	右?	底外へ記号「J」
183	170	盤 B	D	灰原	き 4Agr25 層	口 [19.5]、台 [15]、高 3.5、台高 0.7	製	良	内外灰白	通常	10	右	重皿類
184	168	盤 B	D	灰原	き 4Bgr23 層 + き 4Dgr21 層	口 [20]、台 [14.8]、高 3.5、台高 0.6	製	堅緻	内外明青灰	通常	14	右	重皿類、底外回転ケズリ
185	174	盤 B	D	灰原	き 4Bgr1 層・23 層・28 層	口 [19.8]、台 [14.6]、高 3.5、台高 0.6	製	良好	内灰白、外青灰	砂多	5	右	重皿類、底外回転ケズリ
186	173	盤 B	D	灰原	か 4Dgr18 層	口 [21.2]、台 [16]、高 3.6、台高 0.5	製	堅緻	内外灰白	通常	11	-	重皿類、底外回転ケズリ、底外へ記号「J」
187	167	盤 B	A	灰原	か 4Agr13 層	口 [21.8]、台 [16.8]、高 3.4、台高 0.7	製	良好	内外灰白	通常	16	-	重皿類
188	164	盤 B	A	窯埋土	4 桁 E 区・H 区 10 層・H 区 13 層・盛土 2 区	口 [22.4]、台 [15]、高 3.8、台高 0.6	製	良好	内外明青灰	通常	9	左	重皿類、底外回転ケズリ
189	68	盤 B	A	灰原	き 4Bgr6 層 + 調 A 区表土 1	口 [19.4]、台 [13.2]、高 3.2、台高 0.7	製	堅緻	内灰白、外暗灰	通常	14	右	底外回転ケズリ
190	67	盤 B	D	灰原	か 4Cgr23 層 + 調 D 区灰原内	口 [19.2]、台 [13]、高 3.4、台高 0.6	転	(2 次被熱)	内暗灰、外青灰	通常	11	左	底外回転ケズリ
191	169	盤 B	D	灰原	き 4Agr22 層・22-22' 層・25 層 + か 4Cgr21 層	口 19.8、台 14.7、高 4.3、台高 0.7	製	堅緻	内外灰白	通常	10	右	重皿類、底外回転ケズリ
192	172	盤 B	A	灰原	き 3Cgr1-6-16 層・1-14 層 + き 4Bgr14 層	口 21、台 16.4、高 4、台高 0.4	製	やや不良 (半生)	内白、外白~灰	通常	25	右?	
193	283	塊 B	D	(灰原)	調 D 区灰原内	口 [14.5]、台 [7.3]、高 [6.5]、台高 0.7	製	堅緻	内灰初~ア、外灰白	通常	4	右	重皿類、底外回転ケズリ、内高台軸着痕
194	27	高盤	A	舟底状ビット	舟底上層 2	口 [19.8]、高 (2.3)	製	良好	内外明青灰	砂多	13	右	盤外回転ケズリ
195	95	高盤	A・D	灰原	き 4Agr6' 層・22 層・25 層 + き 4Bgr22-22' 層 + き 4Dgr24 層 + 調 A 区盛土 1	口 [19.8]、脚 10.2、高 10.2、脚高 7.3	製	良	内外明青灰~灰	砂多	11	右	盤外回転ケズリ、脚外へキ
196	299	高盤	D	(灰原)	き 5Agr カツ	脚 [11.4]、高 (8.4)	製	堅緻	内外灰白	砂多	脚 6	-	外へキ
197	93	高盤	D	灰原	き 4Bgr23 層 + か 4Cgr23 層 + 調 D 区灰原内	口 20.1、高 (2.7)	製	良好	内灰、外明青灰	通常	23	右	盤外回転ケズリ
198	94	高盤	D	灰原	き 4Dgr6 層 + 調 D 区灰原内	口 [20]、高 (2.3)	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	16	右	盤外回転ケズリ
199	96	高盤	D	灰原	か 4Cgr23 層 + き 4Dgr22' 層	口 [20]、高 (3.1)	製	良好	内外灰	砂多	9	右	盤外回転ケズリ
200	238	鉢 F	D	灰原	き 5Agr6' 層・7' 精査・上トリフ + き 5gr 灰原	口 16.7、底 12.4、高 19.3	製	良	内外明青灰	砂多	8	右?	回転系切り、内挿、外へキ付着、容量 2.47L
201	239	鉢 F	A・D	灰原	き 3Cgr1 層・14 層 + 表土 1 + 調 D 区灰原表土	口 [17.2]、高 (16.9)	製	良好	内外明青灰	砂多	8	-	内外挿、ゆがみ大
202	235	鉢 F	D	灰原	き 4Dgr22 層 + か 5Cgr カツ + 灰原表土	底 [11.8]、高 (3)	製	やや良	外灰~灰白	通常	底 19	右	回転系切り、底外へ先刺突・不明へキ
203	236	鉢 F	D	灰原	か 4Cgr18 層 + か 4Dgr19 層 + 灰原表土	底 11.4、高 (1.4)	製	やや良	外灰~灰白	通常	底 25	右	回転系切り、底外へ先刺突
204	234	鉢 F	A・D	灰原	き 4Dgr6 層 + 盛土 1	底 [9.3]、高 (7.4)	製	良好	内外明青灰~灰白	通常	底 22	右	底外回転ケズリ・へ先刺突、底内挿、カツ・焼台付着
205	237	鉢 A (把手)	A	灰原	か 4Agr13 層	高 (4.7)	転	(2 次被熱)	内褐灰、外青灰	通常	-	-	破面へキ (転用痕か)、外へキ付着
206	253	瓶 A	A	SK01	SK1-103・C 区 3 層	口 9.5、頸 4.8、高 (10.3)、頸高 10.3	製	良	内外灰白	砂多	25	右	頸外 4 条沈線、頸胴境界剥離、外へキ付着
207	272	瓶 A	A	SK01	SK1-36・48・83・84・87・89・92・C 区 1 層	口 9.3、頸 5、胴 16.2、高 (19.9)、頸高 10	製	良好	内褐灰、外青灰	砂多	16	-	頸外 2 条沈線、頸接合 A3 類
208	242	瓶 A	A	窯埋土	4 桁 Q 区 28 層・S 区 28 層・カツリ	口 9、台 8、頸 5.1、胴 16.4、高 22.8、台高 1.2、頸高 10.5	製	良好	内灰白、外明青灰~灰白	砂多	22	右	頸外 4 条沈線、胴外 1 条沈線、胴外下回転ケズリ、頸接合 A3 類、容量 1.02L
209	241	瓶 A	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 桁盛土 1 区 + か 4Agr1 層	高 8.2、頸 4.7、胴 16.8、高 (12.5)、台高 1.1	製	良好	内褐灰、外明青灰	砂多	台 36	左	胴外 1 条沈線、胴外下回転ケズリ、頸接合 A3 類、外へキ付着
210	210	瓶 A	A・D	灰原	き 4Agr1-3 層・6 層 + 調 D 区灰原表土	台 [10]、胴 [17.3]、高 (12.4)、台高 1.5	製	良好	内外灰白	砂多	台 13	左	胴外 1 条沈線、頸接合 A3 類

掲載 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
211	211	瓶 A	A	灰原	き 4Agr6' 層	台 8、頸 5、胴 15.8、高 (11)、台高 1.2	製	良好	内灰初ア、外明青灰～灰白	砂多	台 33	右	胴外 1 条沈線、頸接合 A3 類?、かか付着
212	296	瓶 A	D	灰原	き 4Dgr18 層	頸 [4.9]、胴 [16.4]、高 (4.2)	製	良好	内灰白、外灰	通常	-	-	頸接合 A2 類
213	212	瓶 A	A・D	灰原	か 4Agr1 層・6 層+か 4Cgr1 層	台 8.4、高 (6.2)、台高 1.1	製	良好	内外灰白	砂多	台 36	左	胴外下回転アリ
214	278	瓶 D	A・D	II 2 窯床 (+ 灰原)	4 加 11+ 盛土 1+ 表土 1+ 4Bgr1 層	底 9.7、胴 [15.2]、高 (10.1)	製	堅緻	内灰白、外明青灰	通常	底 36	-	胴外 2～3 条沈線、胴内下舂、かか付着
215	273	瓶 D	A	SK01(+ 窯埋土)	SK1-5・22+4 加盛土 1+ 表土 1	底 10.2、胴 18.2、高 (17.4)	製	堅緻	内灰初ア、外明青灰	砂多	底 15	右	胴外下回転アリ、胴外 1 条沈線
216	240	瓶 D	A・D	灰原+SK07(+ 窯埋土)	4 加盛土 1 区・2 区+き 4Bgr22-22' 層・1 層・14 層+き 5Agr6' 層+SK07D 区 13 層	底 9.5、頸 [6.3]、高 (17.7)	製	良好	内灰白、外明青灰	砂多	底 36	右?	回転条切り、胴外上 2 条沈線?、胴外下舂アリ、頸接合 A3 類、底外ハ記号「×」
217	209	瓶 D	D	灰原	き 4Dgr24 層	口 9.4、底 9.5、頸 5.8、胴 18.2、高 23.3、頸高 5.7	製	良好	内灰初ア、外明青灰～灰白	砂多	36	左?	頸外 2 条沈線、胴外 3 条沈線、頸接合 A3 類、転用焼台付着、容量 2.37L
218	204	瓶 D	A・D	灰原	き 3Cgr1 層・1-14 層+き 4Bgr1-6 層・6 層・14 層+き 4Dgr18 層	口 8.9、底 9、頸 6、胴 16.1、高 [24.2]、頸高 5.8	製	良好	内褐灰、外明青灰～灰白	砂多	11	-	胴外上 3～4 条沈線、頸接合 A3 類、転用焼台 (坏蓋) 付着、容量 2.22L
219	205	瓶 D	D	灰原	か 4Cgr18 層・21' 層+き 4Agr22 層・24 層+き 4Dgr21 層	胴 17.2、高 (19.5)	製	良好	内灰白、外明青灰	通常	胴 36	右	胴外下回転アリ、胴外 4～5 条沈線、ハ記号?
220	243	瓶 D	A	窯埋土	4 加 M 区・N 区 19 層・O 区 9 層・36 層・R 区 28 層・かカアリ+盛土 3	口 8.2、底 12.3、頸 5.9、胴 19.9、高 29.7、頸高 6.6	製	良好	内灰白、外青灰	砂多	32	右	胴外 6～7 条沈線、胴外下回転アリ、頸接合 A3 類、容量 3.84L
221	202	瓶 D	A・D	灰原	き 3Cgr6 層+き 3Dgr6 層+き 4Agr6' 層・18' 層・24 層+き 4Bgr23 層+か 4Agr1 層・6 層+か 4Cgr18-19 層・18-27 層・21-20 層・21-25 層・21' 層+か 4Dgr18 層+か 5Bgr1 層	口 12.3、底 12.4、頸 7.8、胴 21、高 35.4、頸高 6.5	製	良好	内灰初ア、外明青灰～灰白	通常	36	右	胴外下舂アリ、胴外 3～4 条沈線、頸接合 A3 類?、容量 5.55L
222	207	瓶 D	A・D	灰原	き 4Agr22 層・25 層+き 4Bgr1 層	口 [11.6]、頸 [6.2]、高 (9.7)、頸高 6.9	製	堅緻	内灰初ア、外灰白	砂多	6	-	頸外 2 条沈線、頸接合 B 類、かか付着
223	208	小型瓶	D	灰原	き 4Dgr6 層+き 5Agr6' 層	口 [6.3]、頸 [4.2]、高 (4.2)、頸高 4.2	製	堅緻	内灰初ア、外青灰	砂多	5	-	
224	245	小型瓶	D	灰原	か 4Cgr21' 層	口 [5]、高 (2.8)	製	良好	内灰白、外明青灰	通常	6	-	
225	246	小型瓶	D	(灰原)	き 4Cgr 灰原表土・盛土	口 [4]、高 (3)	製	良好	内灰白、外明青灰	通常	9	-	
226	203	瓶 D (三耳)	A・D	灰原	き 4Agr24 層+き 4Bgr1 層+き 4Dgr18 層・21 層・22-22' 層+か 4Cgr21' 層	口 10.6、底 11.3、頸 7.2、胴 20.5、高 31.3、頸高 6.6	製	堅緻	内灰白、外暗灰	通常	30	-	胴外下回転アリ、頸外 2 条沈線、胴外 5～6 条沈線、胴内舂、頸接合 A2 類、容量 4.82L
227	206	瓶 D (三耳)	A・D	灰原	き 3Cgr1 層・14 層+き 4Agr22 層+き 4Bgr14 層+き 4Dgr18 層・21 層・22-22' 層+か 4Cgr18 層・18-19 層・18-27 層・21' 層+か 4Dgr19 層	口 [10.7]、頸 [6.4]、胴 20.1、高 (30.2)、頸高 6.8	製	堅緻	内外灰白	通常	21	右	胴外下回転アリ、頸外 2 条沈線、胴外 5 条沈線、内外舂、頸接合 A2 類?
228	193	壺蓋	A・D	SK01+ 灰原	SK1-94+ 4Dgr6 層	口 [10.4]、つ [3.4]、高 5.1、つ高 2.0	転	(2 次被熱)	内灰白、外灰	通常	5	-	内ハ記号「 」、外ハ記号「×」、かか付着
229	102	壺蓋	D	灰原	き 4Dgr18 層+き 4Dgr 灰原内	口 [12]、つ [4.1]、高 (5.2)、つ高 (2.4)	製	堅緻	内明青灰、外釉 (灰初ア 7.5Y/4/2)	砂多	5	-	
230	101	壺蓋	A・D	灰原	か 4Cgr18 層・18-27 層+か 5Dgr28 層	口 [10.8]、つ [2.5]、高 (5.3)、つ高 (2.3)	製	堅緻	内外灰白	通常	9	-	天外回転アリ
231	100	壺蓋	A・D	灰原	き 4Agr25 層+き 4Bgr1 層+1 加カ	口 [15]、つ [3.8]、高 (5.4)、つ高 (2.3)	製	堅緻	内外灰白	砂多	9	-	
232	99	壺蓋	A・D	灰原	き 4Agr1-3 層・6 層+か 4Agr6 層+か 4Cgr18 層・21 層	口 15.6、つ 3.9、高 6、つ高 2.9	製	堅緻	内外灰白	砂多	20	-	天外回転アリ
233	98	壺蓋	A・D	灰原	き 4Agr1 層・18' 層・25 層+き 4Bgr13 層	口 15.2、つ 3.7、高 5.9、つ高 3	製	堅緻	内外灰白	砂多	25	-	
234	104	壺蓋	D	灰原	き 4Dgr22-22' 層・19 層+き 5A g r 上トナ	口 [20]、つ 5.6、高 8.3、つ高 4.8	転	(2 次被熱)	内外灰白	砂多	12	左	天外回転アリ、内舂 Da 類、外壺口縁付着
235	217	壺 A	A・D	窯灰層+灰原	4 加 D 区 5 層・2 層+か 4Cgr18 層・21' 層・18-27 層・21-20 層+か 4Dgr20-21 層	口 [10.8]、頸 [11.2]、胴 [22.4]、高 (20.8)、頸高 1.7	製	堅緻	内外灰白	通常	36	右	胴外下舂 Ha 類→回転アリ、内外舂、胴外 3 条沈線、蓋痕跡
236	265	壺 A	A・D	窯灰層+灰原	4 加 D 区 5 層+き 4Dgr18 層・6 層+き 4gr 灰原+調 D 区表土+調 A 区盛土	口 [8.3]、台 [8.4]、頸 [8.6]、胴 [17.6]、高 16.4、台高 1.5、頸高 1.3	製	良好	内褐灰、外青灰	砂多	9	-	回転条切り、胴外 1 条沈線、蓋着痕、容量 1.94L
237	267	壺 A	A	窯灰層+灰原	4 加 C 区 3 層+き 4Agr2-3 層+盛土 1	台 [11.2]、高 (7)	製	堅緻 (一部酸化)	内暗赤褐 (2.5YR3/2～3/1)、外灰白	砂多	台 7	-	底外ハ記号「×」
238	223	壺 A	D	灰原	か 4Cgr21 層・21' 層+き 4Dgr18 層・21-21' 層・22-22' 層・7c' 精査	口 10.2、台 9.8、頸 11.1、胴 21.6、高 21.8、台高 2.4、頸高 1.7	製	堅緻	内外灰白	通常	36	右	胴外 1 条沈線、胴外下舂 Hb 類→回転アリ、胴内外上舂、容量 3.86L
239	213	壺 A	D	灰原	か 5Cgr28 層・流土+き 4Dgr6 層	口 [8.3]、台 [9.4]、頸 [8.8]、胴 [18.7]、高 [16.7]、頸高 1.5、台高 1.2	製	良好	内褐灰、外明青灰～灰白	砂多	10	右	胴外下回転アリ、胴外上 2 条沈線、蓋着痕、容量 2.19L
240	214	壺 A	D	灰原	か 4Cgr23 層+か 4Dgr1 層+き 4Bgr22' 層+調 D 区灰原表土	口 [9.3]、頸 [9.8]、高 (6)、頸高 1.7	製	堅緻	内灰初ア、外明青灰	通常	22	-	胴外上 2 条沈線、蓋着痕 (101 とセットか)、かか付着、ゆがみ大
241	215	壺 A	A・D	灰原	き 3Dgr6 層+き 4Agr1-3 層+き 4Cgr18-27 層・24 層	口 [8.8]、頸 [9.6]、胴 [18.5]、高 (8.1)、頸高 2.1	製	堅緻	内灰白、外褐灰	通常	10	-	胴外 3 条沈線、蓋痕跡
242	222	壺 A	A	窯埋土	4 加 F 区 9-10 層	高 (8.9)	製	堅緻	内灰白、外青灰	砂多	-	右	胴外下回転アリ、底外ハ記号「×」
243	264	壺 F	A・D	窯灰層+灰原	4 加 D 区 3 層・B 区+き 4Bgr14 層+灰原表土+盛土 1+1 加カ	口 [18.4]、底 [13.8]、頸 [16]、胴 [25.7]、高 [26.2]、頸高 3.6	製	良好	内灰初ア、外明青灰～灰白	砂多	9	-	外舂→胴外下舂、内舂、容量 8.34L
244	266	壺 F	A・D	窯灰層+灰原	4 加 A 区 5 層+か 4Cgr18-27 層・21 層・23 層+き 4Agr1 層・3 層・4 層・7 層+き 4Bgr23 層	口 [18.2]、頸 [15.9]、胴 [21.7]、高 (12.3)、頸高 3.5	製	堅緻	内黒 (N-2)、外明青灰～灰白	通常	18	-	胴外舂→一部ハ
245	233	壺 F	A・D	SK01+ 窯埋土 (+ 灰原)	SK1-35+4 加 E 区・H 区 10 層+1-3rd 灰原+灰原表土	底 [9.8]、高 (12.2)	製	良好	内灰初ア (5Y6/2～5/2)、外明青灰	砂多	18	左?	胴外下舂 He 類、底外回転アリ?、胴内舂、かか付着
246	221	壺 F	A	窯埋土	4 加 M 区	口 [12.3]、頸 [12.2]、高 (6.9)、頸高 2.2	製	良好	内灰初ア、外灰	砂多	10	-	頸外 1 条沈線、内外舂

掲載 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
247	250	壺 F	D	灰原	き 4Bgr24 層	口 [9]、頸 [9.2]、高 (3.6)、 頸高 1.8	製	堅緻	内外明青灰	砂多	12	-	頸外 1 条沈線
248	216	壺 F	A	灰原	き 4Agr2-3 層・6 層・7-4 層 + き 4Bgr14 層	口 [14.4]、頸 [12.7]、胴 [19.4]、高 (18.2)、頸高 2.3	製	良好	内外明青灰	砂多	15	-	胴外上 1 条沈線?、胴内 外付
249	219	壺 F	A	窯埋土	4 加 I 区 13-16 層	口 11.4、底 8.5、頸 10.8、胴 19.7、高 20.8、 頸高 2.1	製	良	内暗灰、外青灰	礫極 多	36	-	内外付、胴外下付、胴 内下 3~4 条沈線、底外 転用焼台 (坏?) 付着、容 量 3.40L
250	224	壺 F	D	灰原	か 4Cgr22 層・23 層 + ぎ 4Bgr19 層・21-22 層・23 層 + ぎ 4Cgr22 層 + ぎ 4Dgr19 層	口 12、底 8.8、頸 11.3、 胴 19.3、高 20、頸高 2.3	製	良	内外灰白	砂多	30	-	胴内外付、胴外下付、 胴外付着、容量 3.24L
251	218	壺 F	A・D	窯埋土	4 加 L 区・M 区・R 区 26 層・カ サリ・盛土 1 区 + 調 A 区盛土 + 調 D 区表土	口 [14.8]、底 [10.4]、頸 [14.4]、胴 [21.2]、高 20.3、頸高 2.4	製	やや不良	内灰初ア、外明 青灰~灰白	砂多	6	-	頸外 1 条沈線?、胴外下 付、内付、底外付、 転用焼台 (坏蓋) 付着・ 粉圧痕あり、容量 4.16L
252	254	壺 E	A	SK01	SK1-74	口 [20.4]、頸 [18.3]、胴 [22.8]、高 (6.7)、頸高 2.4	製	堅緻	内灰白、外青灰	通常	8	-	胴外付、胴外付着
253	271	壺 E	A	SK01	SK1-12・23・24・25・26・ 27・28・32・56	底 7.6、頸 10.9、胴 16.1、高 (12.6)	製	良好	内明青灰~灰白、 外青灰	砂多	底 36	-	胴外 1 条沈線?、胴外付 付? → 付、転用焼台・ 付付着
254	251	壺 E	D	(灰原)	調 D 区灰原内	口 [17.6]、頸 [16.6]、胴 [21.4]、高 (4.9)、頸高 2.3	製	堅緻	内灰、外青灰	通常	6	-	胴外 1 条沈線
255	220	壺 E	A・D	灰原 (+ 窯埋土)	4 加 + 4Agr13 層 + 加 4Cgr18 層・19 層・21-20 層・ 21' 層・26 層 + ぎ 4Agr1 層・ 24' 層・25 層 + 加 5Bgr 盛土 + ぎ 5Agr カサ + 表土 + 1 カサ	口 17.9、底 13.5、頸 15.8、胴 22.4、高 24、 頸高 3.4	製	やや良	内明青灰、外青 灰	砂多	20	-	頸外 1 条沈線、胴外下指 圧痕多数、容量 5.39L
256	276	横瓶	A・D	SK01+ 灰原	SK1-41・58・60・65・82・C 区 2 層 + ぎ 4Agr4 層・7 層	口 [11.4]、頸 [10.4]、高 (15.4)、頸高 3.6	製	良好	内外明青灰	礫極 多	20	-	外付 Ha 類 → 付、内付・ 付
257	255	小甕	A	SK01	SK1-4	口 [17.4]、頸 [15.1]、高 (7.5)、頸高 4.2	製	良	内外灰白	砂多	15	-	胴内当て具 SD 類
258	277	小甕	A・D	灰原 + SK07	か 4Agr13 層 + 加 4Cgr23 層 + ぎ 4Agr6 層・22 層 + ぎ 4Dgr18 層 + SK07A 区 13 層	胴 [25.2]、高 (24.5)	製	堅緻	内灰~灰白、外 明青灰	砂多	-	-	外付 Ha 類 → 付、内当 て具 Da 類 → 付、付付 着
259	231	小甕	A・D	灰原	き 3Dgr6 層・盛土 + ぎ 4Bgr14 層・23 層 + 加 4Cgr23 層 + ぎ 4Dgr22 層 + ぎ 5Bgr28 層	口 18.4、頸 17.1、胴 26.6、高 (15.9)、頸高 3.6	製	良好	内灰初ア、外明 青灰	礫極 多	32	-	壺 F 付、胴外下付 Ha 類、 胴内外付
260	232	小甕	A・D	灰原	か 4Agr1 層 + ぎ 4Dgr6 層 + 灰 原表土	口 [14.3]、頸 [12.9]、胴 [22]、高 (22)、頸高 2.4	製	良好	内灰初ア、外明 青灰	砂多	15	-	胴外下付 Ha 類、胴内外 付、容量 4.72L
261	247	中甕	A・D	SK01+ 灰原 + 窯埋土	SK1-C 区 + 4 加 I 区 9 層・L 区 9 層・M 区・N 区 9 層・Q 区 26 層・O 区 28 層・R 区 28 層・ S 区 28 層・カサリ・表土 + 加 4Agr13 層 + ぎ 4Agr1 層	口 [25.2]、頸 [22.3]、胴 [42.7]、高 46.3、頸高 4.5	製	堅緻	内褐灰、外灰白	通常	21	-	外付 Ha 類 → 付、内当 て具 Da 類 → 胴下一部 付?、容量 31.36L
262	248	中甕	A・D	灰原 + 窯埋土	4 加 E 区・A 区 2 層・N 区 9 層・ か 4Cgr19 層 + ぎ 3Cgr 1 層・ 6 層 + ぎ 5Dgr18 層・21 層 + ぎ 4Cgr22 層	口 [25.2]、頸 [23]、胴 [46]、 高 (34.8)、頸高 4.5	製	良好	内灰~暗灰、外 明青灰~灰白	通常	13	-	外付 Ha 類 → 付、内当 て具 Da 類
263	229	中甕	D	灰原	き 4Dgr6 層	口 [26.1]、頸 [22]、高 (7.2)、頸高 4.5	製	良好	内外明青灰	砂多	7	-	230 と同一、胴外付 Ha 類、胴内当て具 Db 類、 ゆがみ大
264	228	中甕	A	灰原	き 3Cgr1-14 層 + ぎ 3Dgr2 層・ 6 層 + ぎ 4Bgr1 層 + 表土 1	口 [27.8]、頸 [25.5]、高 (7.1)、頸高 3.9	製	良好	内外灰白	通常	12	-	胴外付 Ha 類、胴内当て 具 Dc 類、ゆがみ大
265	249	中甕	A・D	灰原	か 4Agr1 層 + 加 4Cgr18 層・ 19 層・21' 層 + 加 4Dgr24 層 + 加 5Bgr1 層・18 層 + 加 5Cgr24 層 + ぎ 4Bgr1 層 + ぎ 5Dgr18 層	口 [28.7]、頸 [23.4]、胴 [45.2]、高 (27.8)、頸高 4.3	製	良好	内灰初ア、外明 青灰~灰白	通常	14	-	外付 Da 類 → 付、内当 て具 Da 類 → 付
266	252	中甕	A	灰原 + 窯埋土 + SK07	4 加 B 区 + 加 4Agr6 層・13 層 + 加 4Bgr13 層・14 層 + 加 4Cgr18 層・21 層・18-27 層 + 加 4Dgr18-27 層 + 加 5Bgr1 層・ 8 層・21 層 + ぎ 4Agr18 層・24 層 + ぎ 4Bgr1 層 + ぎ 4Cgr18 層 + SK7C 区 13 層	口 [29.1]、頸 [24.5]、胴 [40.6]、高 (29.6)、頸高 4.4	製	堅緻	内灰白~褐灰、 外明青灰~灰白	通常	30	-	外付 Ha 類 → 付、内当 て具 Dc 類、ゆがみ大
267	226	長胴釜 (土師器)	D	灰原	か 4Cgr23 層・7' 精査 + ぎ 4gr 灰原	口 [21.4]、頸 [17.6]、胴 [20.2]、高 (19.9)、頸高 2.6	製	良好	内灰、外明青灰	礫極 多	13	-	土師器形、胴外下付 Ha 類・胴内下当て具 Dc 類 → 内外付
268	227	長胴釜	A	灰原	き 3Cgr1 層 + ぎ 4Bgr14 層	口 [18.3]、頸 [15.4]、高 (9.6)、頸高 2.5	製	良好	内灰、外明青灰	礫極 多	12	-	土師器形、胴内外付、 胴外付
269	300	長胴釜	A・D	灰原	か 4Agr1 層 + 加 4Bgr13 層 + ぎ 4Dgr21-22' 層	口 [19.6]、頸 [17]、胴 [20.1]、高 (14.7)、頸高 2.5	製	良好	内外灰白	砂多	12	-	胴外付 → 付 Ha 類、 胴内付 → 当て具 Da 類
270	225	長胴釜	A・D	灰原	き 4Agr6 層 + ぎ 4Dgr18 層 + ぎ 4gr 灰原 + 表土	胴 19.8、高 (22.4)	製	良好	内外灰	礫極 多	-	-	土師器形、胴外付 Ha 類 → 付・2 条沈線、胴内当 て具 Dc 類
271	281	長胴釜 (土師器)	D	灰原	き 4Dgr6 層	口 [25.3]、頸 [22.7]、高 (7.2)、頸高 1.7	製	良好 (酸)	内淡黄 (2.5YR/3)、外淡 黄橙 (10YR8/4)	礫極多、 赤色粒 含有	4	-	口端外 1 条沈線、胴外 1 ~2 条沈線、胴外付
272	282	長胴釜 (土師器)	D	灰原	き 5Dgr18 層 + ぎ 5Agr カサ	口 [24.8]、頸 [23.1]、高 (4.2)、頸高 2.8	製	良好 (酸)	内橙 (7.5YR7/6)、 外淡黄 (2.5YR/3)	砂多、 赤色粒 含有	4	-	口頸外付
273	280	甕 (土師器)	D	(灰原)	き 4gr 灰原内	底 [15.9]、高 (10.6)	製	良 (酸)	内淡黄橙 (10YR8/3)、外橙 (7.5YR7/6 ~ 6/6)	礫極多、 赤色粒 含有	底 6	-	外付 Ha 類 → 付、内付
274	244	鍋	D	(灰原)	調 D 区灰原内	口 [28.2]、頸 [25.1]、高 (7.6)、頸高 2.6	製	良	内灰白、外明青 灰	礫極 多	5	-	頸外 1 条沈線、胴内外 付
275	279	瓶 A (転用焼台)	A	舟底状ビツト	4 加舟底上層 35	口 8.5、高 (5.3) (全高 6.6)、 台高 1	転	(2 次被熱)	内灰、外明青灰	砂多	底 36	右	底外回転付、台端剥離 (転用痕)
276	262	焼台 C	D	(灰原)	か 4Dgr 灰原トナ	口 8.9、底 11、高 4.5	製	堅緻	内外灰白	通常	36	左	付付着
277	263	焼台 B	D	(灰原)	調 D 区灰原内	口 [13.9]、底 [15.2]、高 3.5	製	堅緻	内外褐灰~灰白	通常	6	-	付付着
278	291	焼台 A	A・D	(灰原)	調 D 区表土 + え 2gr カサ	口 [7.9]、底 9.2、高 2.8	製	(2 次被熱)	内外灰	砂極 多	5	-	底穿孔 4 個 (内面側から 回転穿孔)、付付着、ゆ がみ大
279	289	赤彩壇 A (土師器)	A	灰原	き 3Cgr1-14 層・1 層	底 [5.5]、高 (1.4)	製	良好 (酸)	内淡黄橙 (10YR8/4)、外 黄橙 (7.5YR8/8)	通常	底 17	-	内外赤彩

付章 1 その他の遺構

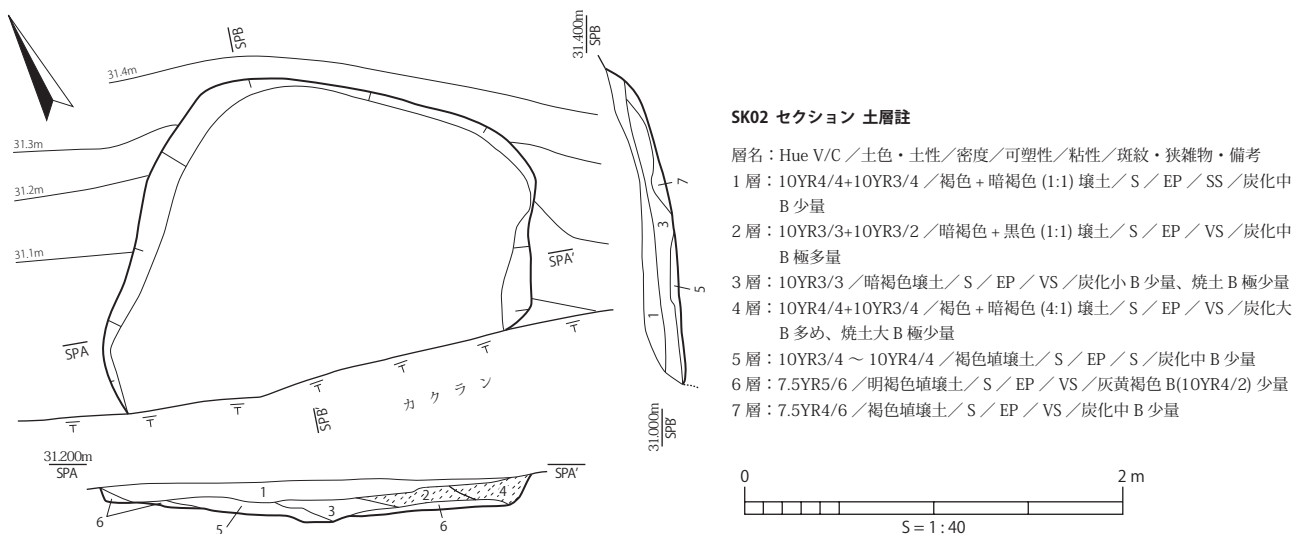
(1) SK02 [不明土坑]

4号窯から東へ約4.5m離れた調査区B区斜面に位置する。南側を攪乱坑によって削られているため全体形状は不明だが、東西2.29m、南北残存1.61m、深さ最大22cmを測り、底面は平坦に近い。2層および4層に炭化物を多量に含む。4号窯に伴うSK01(東西2.85m×南北推定2.89m)と同規模・同形状の土坑であることが推測され、類似した機能が考えられるが、出土遺物がなく時期不明である。

(2) SK03 [製炭土坑]

調査区D区からE-1区にわたって構築された全長8.22m、幅残存1.73～2.55mを測る製炭土坑である。土坑上面および斜面下方の側壁を中心に削平を受けるが、斜面に対して平行に掘削される平面長楕円形の土坑と推定される。斜面下方の側壁については全周せず、斜面を切って平坦面を造成する意図があったのかもしれない。深さ(壁高)はやや不明瞭だが、推定で40～50cm程となる。床面には所々に被熱痕がみられ、焼結硬化する部分もある(暗赤褐色～赤褐色の被熱弱と黄褐色の被熱強は酸化被熱、焼結硬化は還元被熱)。床直上には炭化物を極多量に含む層が覆い、木材の形が分かる炭化材も一部残存する。長軸に沿って並べられた炭化材に関しては、炭焼きの痕跡を示す可能性がある。床下には排水溝と思われる深さ10cm程の浅い溝が斜面上方側の壁際を巡るとともに、その溝から分岐してさらに6本の溝が長軸に直交して延びる。溝内には灰が充填され、部分的に炭化材も残る。溝底はいずれも被熱を受けず、所々肩部のみ被熱を受ける。炭化材の年代測定では11世紀前半～12世紀中頃の値が得られ、樹種同定では数種類の広葉樹材利用が明らかになった。詳しくは付章2を参照されたい。遺物は上層からわずかに須恵器の盤A・甕胴部片・専用焼台(B類)を確認しているが、おそらく5・6・13号窯からの混入と考えられる。

周辺の類例をあげると、二ツ梨豆岡向山窯跡群A地区のSK02(VI期頃)、二ツ梨一貫山窯跡の2号炭窯(VI₂期)・3号炭窯(VI₂期～VI₃期)、林遺跡の1号木炭窯(10世紀以降)・4号木炭窯(時期不明)があり、時期不明を除いて9世紀末～10世紀より古くなる事例はない。斜面に直交する一貫山3号例以外は今報告例と同様に全て斜面に平行あるいはやや斜めに構築される。床溝は壁際や長軸に平行するものはあるが、今報告例のような直交は認められなかった。いずれも地上式や半地下式の構造をもつものであり、地下掘り抜き式の須恵器窯や炭窯とは異なる技術が導入されたことを示唆するものである。



第25図 SK02 平面図・断面図

付章 2 自然科学分析

第 1 節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

1 はじめに

石川県小松市に所在する二ツ梨豆岡向山窯跡群から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている (樹種同定の項参照)。

2 試料と方法

試料は、3 次調査 D 区～E- I 区の製炭土坑である SK03 から出土した炭化材 3 点 (試料 No.73 : PLD-31692、試料 No.81 : PLD-31693、試料 No.89 : PLD-31694) である。SK03 の時期については、共伴遺物がなくて不明であったが、出土した炭化材はすべて同時期に焼かれたと考えられる。いずれの試料も最終形成年輪を測定している。樹種同定の結果、試料 No.73 はエゴノキ属、試料 No.81 はサカキ、試料 No.89 はクマシデ属イヌシデ節であった。測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31692	試料 No.73 調査区 : 3 次調査 D 区～E-1 区 遺構 : SK03 層位 : 覆土	種類 : 炭化材 (エゴノキ属) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 : dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2N, 水酸化ナトリウム : 1.0N, 塩酸 : 1.2N)
PLD-31693	試料 No.81 調査区 : 3 次調査 D 区～E-1 区 遺構 : SK03 層位 : 覆土	種類 : 炭化材 (サカキ) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 : dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2N, 水酸化ナトリウム : 1.0N, 塩酸 : 1.2N)
PLD-31694	試料 No.89 調査区 : 3 次調査 D 区～E-1 区 遺構 : SK03 層位 : 覆土	種類 : 炭化材 (クマシデ属イヌシデ節) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 : dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2N, 水酸化ナトリウム : 1.0N, 塩酸 : 1.2N)

3 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (%)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-31692 試料 No.73	-29.86 ± 0.18	925 ± 18	925 ± 20	1045-1095 cal AD (42.8%) 1120-1142 cal AD (19.8%) 1147-1154 cal AD (5.6%)	1038-1158 cal AD (95.4%)
PLD-31693 試料 No.81	-31.29 ± 0.18	924 ± 18	925 ± 20	1045-1095 cal AD (42.5%) 1120-1142 cal AD (19.3%) 1147-1155 cal AD (6.3%)	1038-1159 cal AD (95.4%)
PLD-31694 試料 No.89	-28.61 ± 0.24	984 ± 20	985 ± 20	1017-1043 cal AD (55.0%) 1105-1118 cal AD (13.2%)	997-1005 cal AD (1.3%) 1011-1050 cal AD (61.0%) 1083-1126 cal AD (26.7%) 1136-1152 cal AD (6.5%)
較正年代の統合結果				1037-1048 cal AD (11.7%) 1085-1124 cal AD (43.1%) 1138-1150 cal AD (13.3%)	1030-1056 cal AD (20.4%) 1076-1154 cal AD (75.0%)

4 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。

製炭土坑SK03出土の炭化材である試料No.73(PLD-31692)は1038-1158 cal AD(95.4%)、試料No.81(PLD-31693)は1038-1159 cal AD(95.4%)で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。また、試料No.89(PLD-31694)は997-1005 cal AD(1.3%)、1011-1050 cal AD(61.0%)、1083-1126 cal AD(26.7%)、1136-1152 cal AD(6.5%)で、10世紀末～12世紀中頃の暦年代を示した。

これらの試料は製炭土坑から出土した炭の製品または燃料材であると考えられ、同じ時期に焼かれたと考えられる。したがって、各試料の暦年代範囲は近い時期を示すと予想されるため、各試料の較正年代を結合し、重複している箇所を抽出した。計算には、暦年較正用ソフトOxCalに付属するCombineの機能を用いた。結合の結果は、2σ暦年代範囲において1030-1056 cal AD(20.4%)および1076-1154 cal AD(75.0%)で、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。これは平安時代中期～後期に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

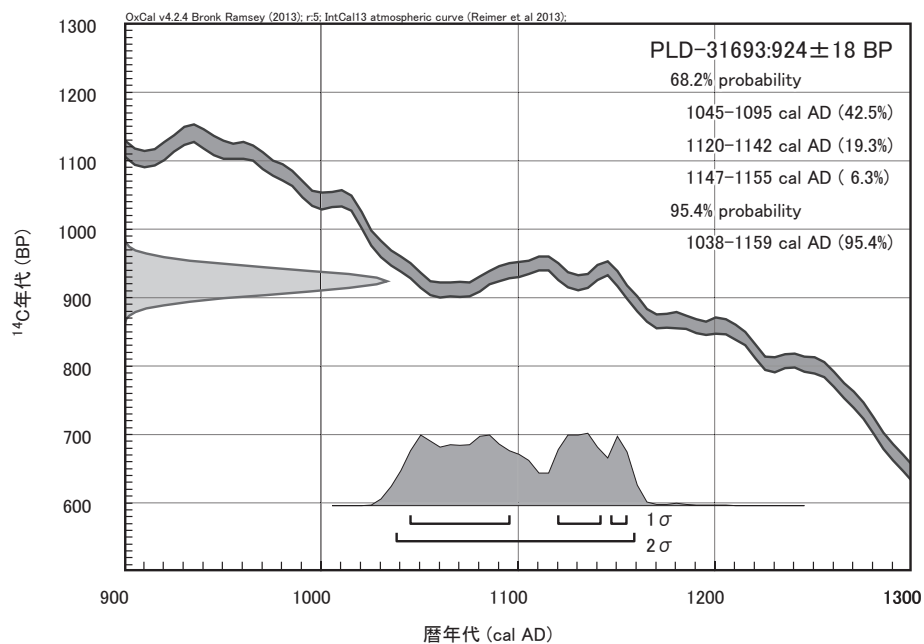
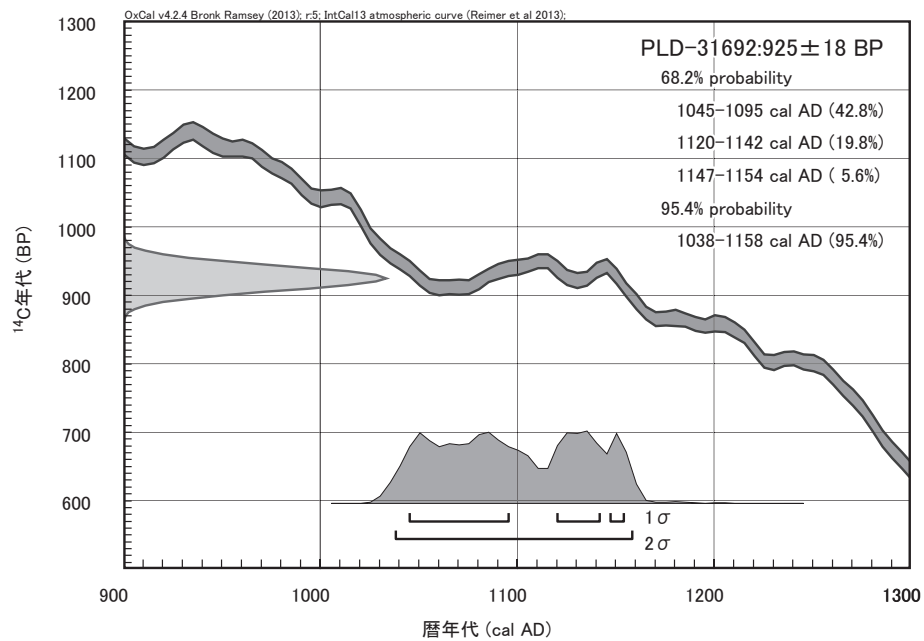


図 1-1 暦年較正結果 (1)

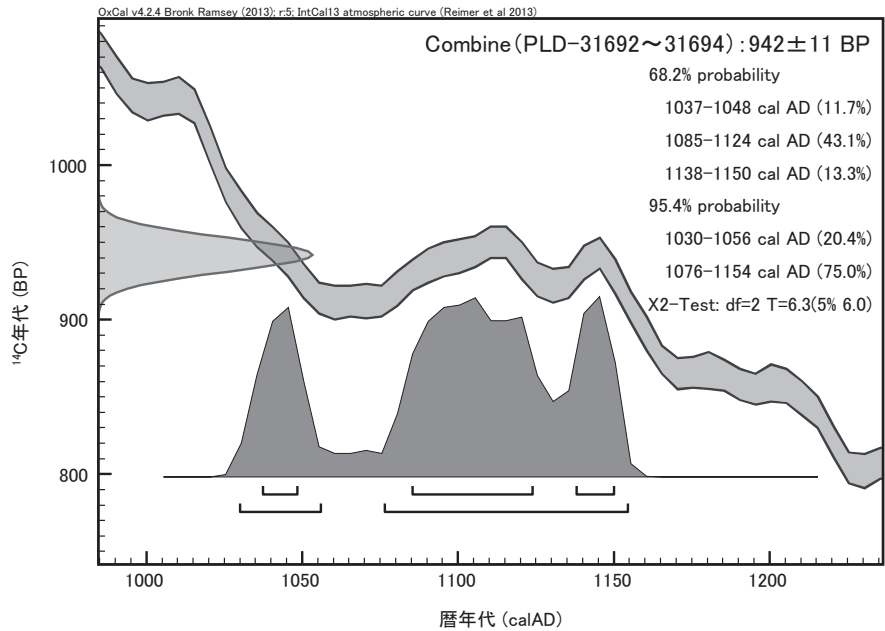
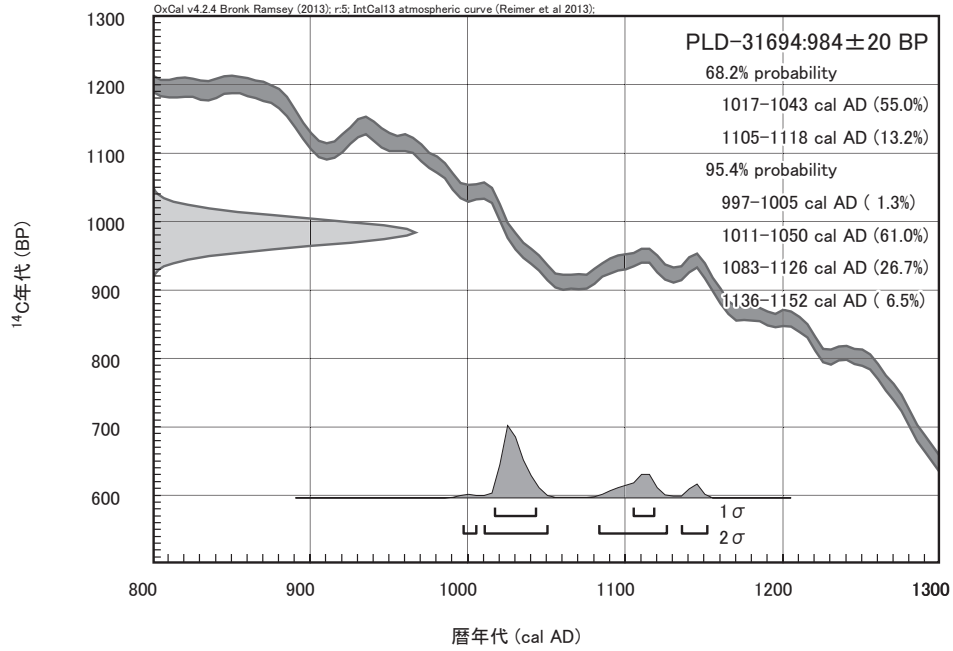


图 1-2 曆年較正結果 (2)

第2節 二ツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）

1 はじめに

二ツ梨豆岡向山窯跡群は、加賀地域最大の須恵器窯跡群である南加賀窯跡群の支群の1つである。ここでは、2次調査および3次調査で出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

2次調査のA地区（以下、2次A地区と呼ぶ）の試料は、須恵器窯跡である1-A号窯跡から7点、1-B号窯跡から9点、2号窯跡から8点、2・1-A・1-B号窯跡から22点、製炭土坑であるSK02から14点、土坑であるSK03から1点、SK07から3点、粘土塊集中2から3点の、計67点。同じく2次調査のB地区（以下、2次B地区と呼ぶ）の試料は、須恵器窯跡である7号窯跡から1点、8号窯跡から11点、7・8号窯跡から1点、土坑であるSK03から1点、グリッドで採取された炭化材1点の、計15点。3次調査（以下、3次と呼ぶ）の試料は、4号窯跡から8点、5号窯跡から7点、6号窯跡から27点、5・6・13号窯跡灰原・前庭部から25点、SJ02から1点、SK03から28点、グリッドから2点の、計98点がみられた。分析試料は、総計で180点となった。

2次A地区の遺構の時期は、2号窯跡が8世紀前半、1-A号窯跡と1-B号窯跡、SK02、SK03、SK07は10世紀前半、2・1-A・1-B号窯跡が8～10世紀、粘土塊集中2が時期不明である。

2次B地区の遺構の時期は、8号窯跡が8世紀前半、7号窯跡とSK03が10世紀前半、7・8号窯跡が8～10世紀で、グリッドで採取された試料は時期不明である。

3次では、4号窯跡が9世紀前半、6号窯跡が9世紀末～10世紀初頭、5号窯跡が10世紀前半、5・6・13号窯跡が9～10世紀、SJ02が8世紀後半～9世紀前半で、グリッドで採取された試料は時期不明である。SK03は、炭化材の放射性炭素年代測定の結果、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。

分析に先立って、計測可能な試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とスギの2分類群、広葉樹ではカバノキ属とクマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節と呼ぶ）、アサダ、クリ、スダジイ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節と呼ぶ）、ツバキ属、サカキ、サクラ属、カエデ属、ニシキギ属、エゴノキ属、ハイノキ属の15分類群の、計17分類群が産出した。

表1 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土の樹種同定結果

調査年次	2次調査										3次調査					合計					
	A地区					B地区					-										
樹種	1-A		2	2・1		粘 土 塊 集 中	7	8	グ リ ッ ド	4	5	6	5・6		グ リ ッ ド						
	号 遺 構	号 跡	号 跡	1-A 号 跡	1-B 号 跡		SK 02	SK 03		SK 07	7 号 跡	8 号 跡	7 号 跡	SK 03		4 号 跡	5 号 跡	6 号 跡	5・6 号 跡	SJ 02	SK 03
モミ属	2	2		10		3			1	8	2	2	11						41		
スギ	3		8	4			1	3			4	23	13				1		60		
カバノキ属																	1		1		
クマシデ属イヌシデ節	1			4					1	1	1			1			5		14		
アサダ				2					2			1					1		6		
クリ				1	6												2		9		
スダジイ													1						1		
ブナ属						3													3		
コナラ属アカガシ亜属				1					3								3		7		
コナラ属コナラ節			7			5													12		
ツバキ属	1																	2	5		
サカキ																		5	5		
サクラ属												1					3		4		
カエデ属									5										5		
ニシキギ属																		1	1		
エゴノキ属																		5	5		
ハイノキ属									1										1		
合計	7	9	8	22	14	1	3	3	1	11	1	1	1	8	7	27	25	1	28	2	180

スギが最も多くて60点、モミ属が41点、イヌシデ節が14点、コナラ節が12点、クリが9点、アカガシ亜属が7点、アサダが6点、ツバキ属とサカキ、カエデ属、エゴノキ属が各5点、サクラ属が4点、ブナ属が3点、カバノキ属とスダジイ、ニシキギ属、ハイノキ属が各1点であった。

2次A地区では、1-A号窯跡でスギが3点とモミ属が2点、ツバキ属とイヌシデ属が各1点、1-B号窯跡ではコナラ節が7点とモミ属が2点、2号窯跡ではスギが8点、2・1-A・1-B号窯跡ではモミ属が10点、スギとイヌシデ節が各4点、アサダが2点、クリとアカガシ亜属が各1点みられた。SK02ではクリが6点とコナラ節が5点、ブナ属が3点、SK03ではスギが1点、SK07ではスギが3点、粘土塊集中2ではモミ属が3点みられた。

2次B地区では、7号窯跡でハイノキ属が1点、8号窯跡ではカエデ属が5点とアカガシ亜属が3点、アサダが2点、イヌシデ節が1点、7・8号窯跡ではイヌシデ節が1点みられた。SK03ではモミ属が1点みられた。グリッド出土の炭化材はイヌシデ節が1点であった。

3次調査では、4号窯跡でモミ属が8点、5号窯跡ではスギが4点とモミ属が2点、アサダが1点、6号窯跡ではスギが23点とモミ属が2点、スダジイとサクラ属が各1点、5・6・13号窯跡ではスギが13点とモミ属が11点、イヌシデ節が1点みられた。SJ02ではカバノキ属が1点みられた。SK03ではイヌシデ節とサカキ、エゴノキ属が各5点、アカガシ亜属とサクラ属が各3点、クリとツバキ属が各2点、スギとアサダ、ニシキギ属が各1点みられた。グリッド出土の炭化材は、ツバキ属が2点であった。

復元直径の計測では、全体的に計測が行なえた試料がすくなかったが、2次A地区のSK02では6cm以下の試料が多く、2次B地区の8号窯跡では4～6cmにピークがみられた。また3次の6号窯跡では11～20cmの試料が多く、SK03では6cm以下の試料が多かった。

平均年輪幅の計測結果では、0.96cmある幅の広い試料（試料No.154：スギ）もあったが、ほとんどの試料は0.5cm以下であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c(No.2)、2c(No.44)、3c(No.50)、4c(No.166)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～12列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1 5a-5c(No.5)、6c(No.25)、7c(No.115)、8c(No.147)

仮道管と放射組織、放射仮道管で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1～10列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版1 9a-9c(No.98)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は10～20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4列となる。

カバノキ属にはマカンバやダケカンバ、ウダイカンバなどがあり、代表的なマカンバは北海道から本州北中部の温帯の、日当たりの良い場所に生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で強靱だが、切削加工は容易である。

(4) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版1・2 10a-10c(No.74)、11a-11c(No.77)

小型の道管が単独ないし2～7個、放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～4列となり、集合放射組織がみられる。

クマシデ属イヌシデ節は温帯から暖帯の山林などに分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬く、割裂しにくい。切削加工は中庸である。

(5) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版2 12a-12c(No.108)

小型の道管が単独ないし2～7個、放射方向に複合して密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～4列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版2 13a-13c(No.85)、14a(No.143)、15a(No.145)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(7) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版 2
16a-16c(No.38)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に 1～3 列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(8) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版 3 17a-17c(No.133)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3 列のものと広放射組織がみられる。

ブナ属にはブナやイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版 3 18a-18c(No.82)

大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 3 19a-19c(No.137)、20a(No.139)、
21a(No.140)

年輪のはじめに大型の道管が 1～2 列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(11) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版 3 22a-22c(No.65)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は 10～20 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1～2 列が直立する異性で、1～4 列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版 3・4 23a-23c(No.70)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は 20～40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1～3 列が直立する異性で、単列である。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(13) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l. バラ科 図版 4 24a-24c(No.91)

小型の道管が単独ないし 2～4 個、放射方向ないし斜線方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と区別できないため、モモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す意味で、広義のサクラ属とした。

(14) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版4 25a-25c(No.109)

中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～2列のものと幅5～8列程度のものがみられる。

カエデ属は10列以上の放射組織を持つチドリノキ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はチドリノキ以外のカエデ属である。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(15) ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 図版4 26a-26c(No.76)

小型の道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～2列が直立する異性で、単列となる。

ニシキギ属にはニシキギやマユミなどがあり、代表的なマユミは、北海道から九州までの山地にみられる落葉高木または小高木の広葉樹である。材は強韌で韌性がある。

(16) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版4 27a-27c(No.69)

小型の道管が単独ないし2～4個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は晩材部で線状となる。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は1～4列が直立する異性で、1～3列となる。

エゴノキ属は温帯から亜熱帯の低山地、原野に分布する落葉小高木の広葉樹である。材はやや重くて韌性があるが、切削加工などは容易である。

(17) ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科 図版4 28a-28c(No.99)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、1～4列となる。

4 考察

以下に、2次A地区、2次B地区、3次の同定結果について個別に考察し、二ツ梨豆岡向山窯跡群の森林利用および丘陵の植生変化について考える。なお、考察にあたっての炭化材の評価については、須恵器窯跡および灰原、土師器窯跡出土の炭化材は、燃料材の残渣であると考え。製炭土坑出土の炭化材は、焼成された製品としての炭（以下、炭製品と呼ぶ）か、燃料材残渣かの判断ができないため、炭製品または燃料材と表記する。土坑や粘土塊集中、グリッドなどで取り上げられた炭化材については用途不明とした。須恵器窯跡の燃料材や、製炭土坑の炭化材の供給源については、藤原（1992）および小林・北野（2013）に指摘されているように、窯跡周辺の樹木が利用されていると想定した。

・2次調査A地区

須恵器窯跡で、燃料材の同定数の多い窯跡に着目すると、8世紀前半の2号窯跡では針葉樹のみで、10世紀前半の1-A号窯跡では広葉樹よりも針葉樹が僅かに多いが、1-B号窯跡では針葉樹よりも広葉樹が多くみられた（表2）。須恵器窯跡の燃料材は、操業時期の経過と共に燃料材の樹種が針葉樹主体から広葉樹主体へと変化した可能性がある。また、10世紀前半の製炭土坑であるSK02で

表 2 2次調査 A 地区の樹種同定結果

樹種	8C 前半		10C 前半			8～10C		不明		合計
	2号	1-A号	1-B号	SK	SK	2・1-A・1-B	粘土塊			
遺構名	窯跡	窯跡	窯跡	SK02	03	07	号窯跡灰原		集中2	
種類	燃料材		炭製品か			燃料材		不明		
			燃料材	不明						
モミ属		2	2				10	3	17	
スギ	8	3		1	3		4		19	
クマシデ属イヌシデ節		1					4		5	
アサダ							2		2	
クリ				6			1		7	
ブナ属				3					3	
コナラ属アカガシ亜属							1		1	
コナラ属コナラ節			7	5					12	
ツバキ属		1							1	
合計	8	7	9	14	1	3	22	3	67	

は、針葉樹はみられず、クリやブナ属、コナラ節、ツバキ属といった広葉樹がみられた。これは1-B号窯跡の燃料材と同様の傾向を示しており、10世紀前半のA地区周辺では、広葉樹が一定数生育していた可能性を示唆する。

須恵器窯跡および製炭土坑の炭化材について復元直径分布をみると、計測不可の試料が多いため試料数は少ないが、須恵器窯跡の2号窯跡では復元直径10cm以上の材がみられるのに対し、1-A号窯跡、1-B号窯跡では復元直径10cm以下の材が多い傾向がみられた。また、1-B号窯跡の復元直径10cm以下の炭化材は、いずれも広葉樹であった。2・1-A・1-B号窯跡の灰原では、復元直径20cmまでの径の材が偏りなくみられた。製炭土坑であるSK02では、復元直径10cm以下の材のみがみられた(図1)。

以上のように、A地区では8世紀前半には復元直径10cm以上のスギが利用され、10世紀前半には復元直径10cm以下の広葉樹が利用されていたという傾向が確認できた。

・2次調査B地区

須恵器窯跡の炭化材に着目すると、8世紀前半の8号窯跡では燃料材・構築材共に広葉樹のみが用いられ、針葉樹は確認できなかった。構築材では、カエデ属のみがみられた。10世紀前半の7号窯跡ではハイノキ属1点のみであった。試料数が少ない窯跡もあるため推測の域を出ないが、2次B地区の窯跡では針葉樹を燃料材としてあまり利用していなかった可能性がある。

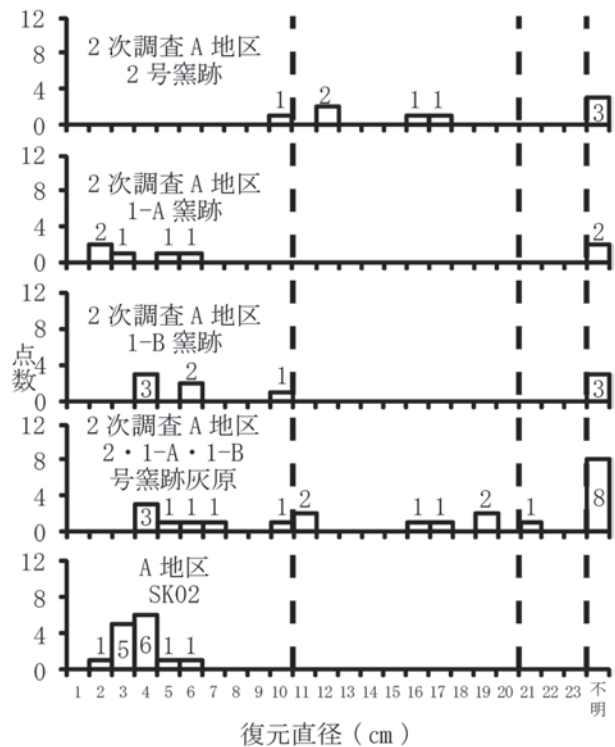


図1 2次調査A地区須恵器窯・製炭土坑の復元直径分布

表3 2次調査B地区の樹種同定結果

樹種	8C 前半		10C 前半		8～10C	不明	合計
	8号窯跡		7号窯跡 SK3		7・8号窯跡灰原	グリッド	
	種類	構築材	燃料材		燃料材	不明	
モミ属			1				1
クマシデ属イヌシデ節	1				1	1	3
アサダ	2						2
コナラ属アカガシ亜属	3						3
カエデ属	4	1					5
ハイノキ属			1				1
合計	4	7	1	1	1	1	15

須恵器窯跡の炭化材の復元直径分布をみると、8号窯跡の燃料材では復元直径10cm以下の材が多く、構築材では復元直径4～5cmの材のみがみられた。7号窯跡および7・8号窯跡灰原の試料については、復元直径の計測が行えた試料が少なく、傾向は掴めなかった。

以上のように、B地区では試料数が少ないため推測の域を出ないが、構築材、燃料材ともに復元直径10cm以下の広葉樹が利用される傾向がみられた。

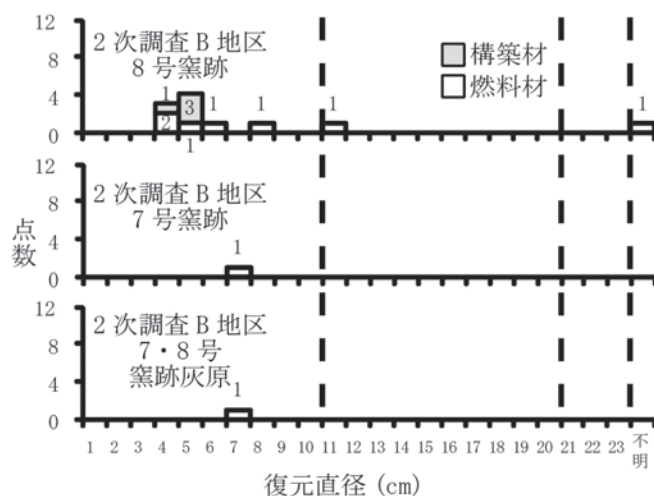


図2 2次調査B地区須恵器窯の復元直径分布

・3次調査

須恵器窯跡および土師器窯跡、製炭土坑に着目すると、9世紀前半の4号窯跡、

9世紀末～10世紀初頭の6号窯跡、10世紀前半の5号窯跡のいずれも、針葉樹が多かった。9～10世紀の5・6・13号窯跡の灰原から出土した炭化材でも針葉樹が多くみられることから、3次調査の須恵器窯跡では、通年で針葉樹を燃料材として多用していたと考えられる。一方、8世紀後半～9世紀前半の土師器窯跡であるSJ02ではカバノキ属が1点みられ、11世紀前半～12世紀中頃の製炭土坑であるSK03では針葉樹は1点のみで、イヌシデ節やサカキを中心とする広葉樹が多くみられた(表4)。須恵器窯跡では針葉樹主体、土師器窯跡および製炭土坑では広葉樹主体で、主体となる燃料材が異なっており、遺構の種別毎に使用する燃料材の樹種が異なっていた可能性がある。ただしSK03は9～10世紀の窯跡よりも100年ほど時期が新しい遺構であり、9～10世紀には周辺の森林に針葉樹が多く分布していたが、SK03が使用される頃には周辺の森林は広葉樹も多く分布する森林へと植生が変化していた可能性も考えられる。

須恵器窯跡の炭化材の復元直径分布をみると、試料数の多い6号窯跡では、復元直径10cm以上20cm未満の材が多く、15cmにピークがみられた。また、4号窯跡と5号窯跡では傾向はつかめないが、5・6・13号窯跡灰原では、復元直径1～19cmの材が、偏りなくみられた。土師器窯であるSJ02の炭化材は復元直径5cm、製炭土坑であるSK03の炭化材は、復元直径6cm以下の材のみであり、

表 4 3次調査の樹種同定結果

樹種	8C 後半～		9C 末～		9～10C	11C 前半～		不明	合計
	9C 前半	9C 前半	10C 初頭	10C 前半		12C 中頃	不明		
					5・6・13号				
遺構	SJ02	4号窯跡	6号窯跡	5号窯跡	窯跡灰原・前庭	SK03		グリ ツド	
						炭製品か			
	種類	燃料材			燃料材?	燃料材	不明		
モミ属		8	2	2	11				23
スギ			23	4	13	1			41
カバノキ属	1								1
クマシデ属イヌシデ節					1	5			6
アサダ				1		1			2
クリ						2			2
スダジイ			1						1
コナラ属アカガシ亜属						3			3
ツバキ属						2	2		4
サカキ						5			5
サクラ属			1			3			4
ニシキギ属						1			1
エゴノキ属						5			5
合計	1	8	27	7	25	28	2		98

ピークは3cmであった(図3)。

以上のように3次調査の須恵器窯跡では、6号窯跡にみられるように、復元直径10cm以上のスギが多用される傾向がみられたが、土師器窯跡および製炭土坑では、復元直径10cm以下の広葉樹が利用されていたのが確認できた。

・二ツ梨豆岡向山窯跡の森林利用

および丘陵の植生変化について

遺構ごとの主要燃料材を時期順に示した表を表5に示す。

8世紀前半操業の須恵器窯跡は、2次A地区2号窯跡と2次B地区8号窯跡であるが、燃料材の主体となる樹種をみると、前者はモミ属とスギといった針葉樹、後者は広葉樹であった。窯跡周辺の樹木を燃料材として伐採利用していたと考え、8世紀前半頃の2次A地区と2次B地区では、窯場周辺の植生が異なっていた可能性がある。

次に、9世紀前半に操業がはじまる3次の4号窯跡、9世紀末～10世紀初頭の3次の6号窯跡、10世紀前半頃の3次5号窯跡では、モミ属およびスギ

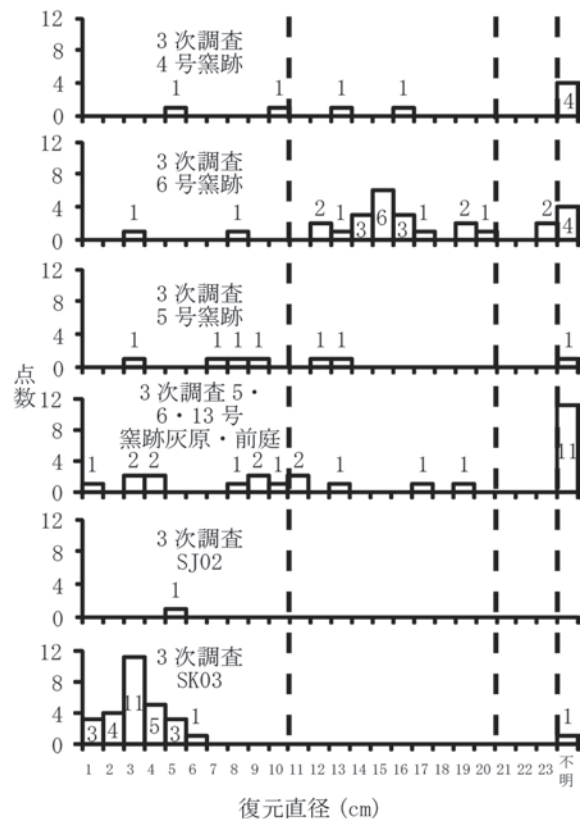


図3 3次調査須恵器窯・製炭土坑・土師器窯跡の復元直径分布

表5 時期別主要燃料材（※■は同定数が多い樹種）

時期	遺構の種類	窯跡名称	樹種		
			モミ属	スギ	広葉樹
8C 前半	須恵器窯跡	2次A地区2号窯跡		8	
8C 前半	須恵器窯跡	2次B地区8号窯跡			11
9C 前半	須恵器窯跡	3次4号窯跡	8		
9C 末～10C 初頭	須恵器窯跡	3次6号窯跡	2	23	2
10C 前半	須恵器窯跡	3次5号窯跡	2	4	1
10C 前半	須恵器窯跡	2次A地区1-A号窯跡	2	3	2
10C 前半	須恵器窯跡	2次A地区1-B号窯跡	2		7
10C 前半	製炭土坑	2次A地区SK2			14
10C 前半	須恵器窯跡	2次B地区7号窯跡			1
11C 前半～12C 中頃	製炭土坑	3次SK03		1	27

が多くみられた。いずれも3次調査の窯跡であり、9世紀前半～10世紀前半頃の窯場周辺にはモミ属やスギといった針葉樹が多く生育していた可能性がある。

10世紀前半の2次A地区1-A号窯跡ではスギ、2次A地区1-B号窯跡では広葉樹が多くみられた。また2次B地区7号窯跡では広葉樹のみがみられた。2次A地区では針葉樹、1-B号窯跡では広葉樹が多くみられるため、10世紀前半の窯場周辺では針葉樹と広葉樹が共生していた可能性が高い。ただし10世紀前半の製炭土坑である2次A地区SK02では広葉樹のみが出土しており、広葉樹主体の森林の存在を裏付けている。2次B地区は分析点数が少ないため傾向が確認できなかったが、A地区と同様に広葉樹主体の森林が広がっていた可能性がある。

11世紀前半～12世紀中頃の製炭土坑である3次のSK03では、広葉樹が多くみられた。3次調査地点の周辺では、10世紀前半頃までは針葉樹主体の森林が広がっていたと考えられるが、須恵器窯跡の操業終了時には、窯場周辺の針葉樹の大部分が伐採され、広葉樹主体の森林へと変化した可能性がある。

北陸地方の日本海沿岸地域では、金沢市畝田東遺跡群の弥生時代～平安時代にかけての遺構で行われた花粉分析の結果が示すとおり、スギが卓越する（パリノ・サーヴェイ株式会社，2006）。よってスギは、人為による植生改変を受けていない森林の指標となりえる樹種である。二ツ梨豆岡向山窯跡群が操業されていた丘陵では、8世紀前半頃は2次A地区のある北西側および3次調査地点の南西側の斜面には針葉樹を主体とする森林が広がり、2次B地区のある北東側の斜面は広葉樹を主体とする森林が広がっていたと考えられる。北西側および南西側の斜面は、窯跡の操業と共に針葉樹が減少し、10世紀前半には北東側の斜面と同様に広葉樹主体の森林に変化していたと考えられる。このような、須恵器窯業や製炭などの手工業生産活動に伴う炭化材が、針葉樹主体から広葉樹主体へと変化するのと同様の状況は、富山県立山町の上末窯谷窯跡の樹種同定結果においてもみられる（林，1989）。

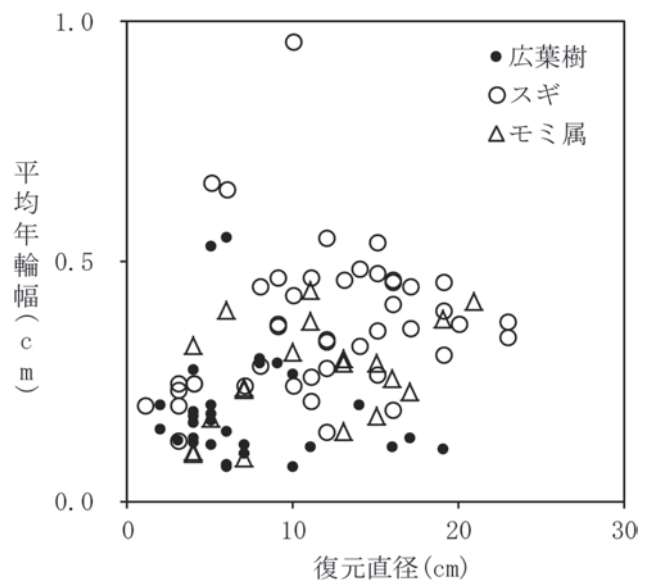


図4 須恵器窯跡の復元直径と平均年輪幅

一方、須恵器窯跡の燃料材の復元直径では、スギは平均年輪幅が比較的広く、復元直径が10cm以上の試料が多くみられるが、広葉樹は平均年輪幅が比較的狭く、復元直径が10cm未満の試料が比較的多くみられる（図4）。つまり、須恵器窯跡の燃料材には、針葉樹であれば10cm以上の径の大きな樹木を、広葉樹であれば10cm未満の径の小さい樹木を選択利用していた可能性がある。なお、製炭土坑出土の炭化材は、いずれも復元直径6cm以下で、平均年輪幅が0.5cm未満の材のみがみられた（図5）。試料が炭製品なのか燃料材なのかの判断はできないが、復元直径のバラつきが少なく、一種の規格性のような、強い選択性がうかがえる。

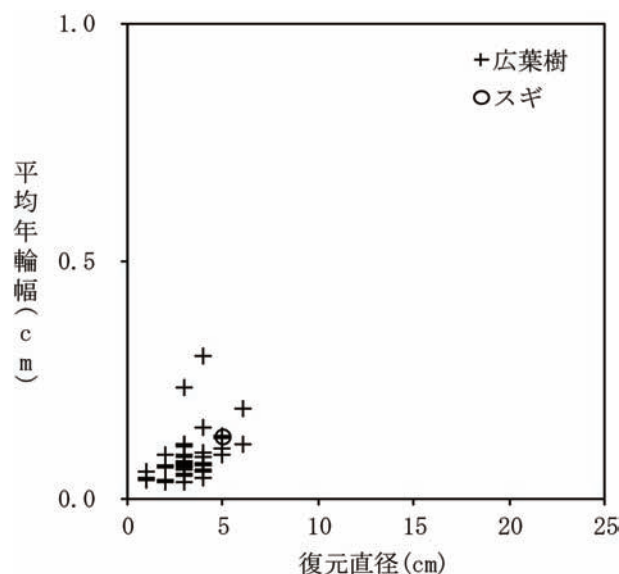


図5 製炭土坑の復元直径と平均年輪幅

上記の植生の変遷および燃料材の直径による選択性を考慮すると、二ツ梨豆岡向山窯跡群の須恵器窯跡の燃料材では、8世紀前半に針葉樹を主に利用する窯跡、広葉樹を主体的に利用する窯跡がみられる点を考慮すると、特定の樹種を燃料材として多く利用するため、窯場の選択を窯場周辺の植生で左右するような、強い樹種を選択性は確認できなかった。ただし、窯場周辺の森林内から、針葉樹なら直径10cm以上、広葉樹なら直径10cm未満を選択するような、緩い選択性が存在した可能性が考えられる。製炭土坑では、特定の樹種のみを多く利用する傾向はみられなかったが、産出した広葉樹はいずれも薪炭材として普通に利用される樹種であった（伊東ほか，2011）。薪炭材に適した直径6cm以内の広葉樹を選択的に伐採していたと考えられる。

南加賀窯跡群では、二ツ梨一貫山窯跡および林オオカミダニ支群の窯跡等で出土した須恵器窯跡および製鉄関連遺構、土師器窯跡などの炭化材樹種同定の結果により、一つの丘陵で多種の手工業生産を行う場合、生産遺構または生産工程の木材として適した材を選択し、他業種と採取する木材が競合しないような工夫をするのが基本であったと考えられている（望月，2008）。二ツ梨豆岡向山窯跡群の炭化材でも同様の傾向が確認できる。

参考・引用文献

- 藤原 学（1993）須恵器窯と燃料薪．考古学論叢 - 関西大学考古学研究室開設四拾周年記念 -, 495-517.
- 林 昭三（1989）越中上末窯出土炭の樹種．富山大学人文学部考古学研究室編「越中上末窯」：209-214，富山大学人文学部考古学研究室.
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.
- 小林克也・北野博司（2013）山形県高島町高安窯跡群にみる古代窯業における燃料材選択と森林利用．植生史研究，22（1），p23-28.
- 望月精司（2008）北陸地方の古代窯業・製鉄業の森林利用．東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター編「古代窯業の森林利用技術—陶人と森との関わり— 予稿集」：33-44，東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター.
- パリオ・サーヴェイ株式会社（2006）花粉分析等による古環境復元．石川県埋蔵文化財センター編「畝田東遺跡群VI」：4-33，石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター.

付表 1-1 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号															
1	1	3次調査		4号窯跡		-	5層	燃料材	モミ属	1.6	3	-	0.53		9世紀前半																
2	2					①区	表土		モミ属	0.7	3	-	0.23																		
3	3					P区	①層		モミ属	2.6	15	5	0.17																		
4	4					B区	2層		モミ属	2.2	7	10	0.31																		
5	5			5号窯跡				C区	3層	燃料材	スギ	2.9	7	-	0.41		10世紀前半														
6	6							①区	表土		モミ属	2.6	9	13	0.29																
7	7							アサダ	0.9		7	3	0.13																		
8	8							C区	4・5層		スギ	2.6	7	9	0.37																
9	7							C区	4・5層		スギ	2.7	6	8	0.45																
10	7										モミ属	1.0	11	7	0.09																
11	8							C区	2層		スギ	3.7	11	12	0.34																
12	9			6号窯跡				東	C区	7層	スギ	3.2	12	15	0.27		9世紀末～10世紀初頭														
13	9																			スギ	1.7	5	-	0.34							
14	10																			スギ	4.6	24	16	0.19							
15	11																			G区	15層	スギ	2.7	5	15	0.54					
16	12																			D区	3層	モミ属	0.9	5	15	0.18					
17	13																			F区(6窯東e区)	3'層	スギ	2.6	8	14	0.33					
18	13																				スギ	3.7	8	16	0.46						
19	13																				スギ	1.2	6	-	0.20						
20	14														東				f区	中層	スギ	3.4	7	14	0.49						
21	14																						スギ	3.2	5	-	0.64				
22	14																						スギ	3.5	5	-	0.70				
23	15														D区				3層	燃料材	スギ	5.2	14	20	0.37						
24	15																						スギ	3.4	9	23	0.38				
25	15																						スギ	3.1	9	23	0.34				
26	15																						スギ	3.7	12	19	0.31				
27	15																						スギ	3.7	8	13	0.46				
28	15																						スギ	3.2	7	19	0.46				
29	15																						スギ	3.6	10	15	0.36				
30	16																				F区	3層		スギ	2.8	10	12	0.28			
31	16																									モミ属	5.2	18	15	0.29	
32	16																									スギ	5.4	12	17	0.45	
33	16																			サクラ属				3.2	11	8	0.29				
34	17														F区				中③層		スギ	3.3	8	16	0.41						
35	17																						スギ	2.2	4	12	0.55				
36	17																						スギ	4.3	9	15	0.48				
37	18																				前庭部	さ5-B区	5層	スギ	1.4	11	3	0.13			
38	18																			スダジイ				1.0	5	14	0.20				
39	19										5・6・13号窯跡				灰原				さ5-C区	4層	スギ	0.6	2	-	0.30						
40	21																										スギ	1.8	9	3	0.20
41	21																										スギ	2.0	8	4	0.25
42	21																										スギ	1.4	6	3	0.23
43	22																					灰原・前庭部	さ5-B区	16層	モミ属	0.3	1	-	0.30		
44	23																					灰原	さ5-A区	1層	モミ属	0.3	1	-	0.30		
45	24																										スギ	0.4	3	-	0.13
46	25																										スギ	0.6	3	1	0.20
47	26																										クマシデ属イヌシデ節	0.4	2	-	0.20
48	28									モミ属					1.1	6	-	0.18													
49	29									スギ					0.5	2	4	0.25													
50	30									モミ属					0.5	2	-	0.25													
51	31									スギ					3.9	9	10	0.43													
52	31									スギ					1.7	6	8	0.28													
53	32							し5-D区	13層						モミ属	1.5	5	-	0.30												
54	32																モミ属	2.2	4	-	0.55										
55	32																モミ属	1.8	6	13	0.30										
56	32																モミ属	1.5	4	11	0.38										

付表 1-2 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

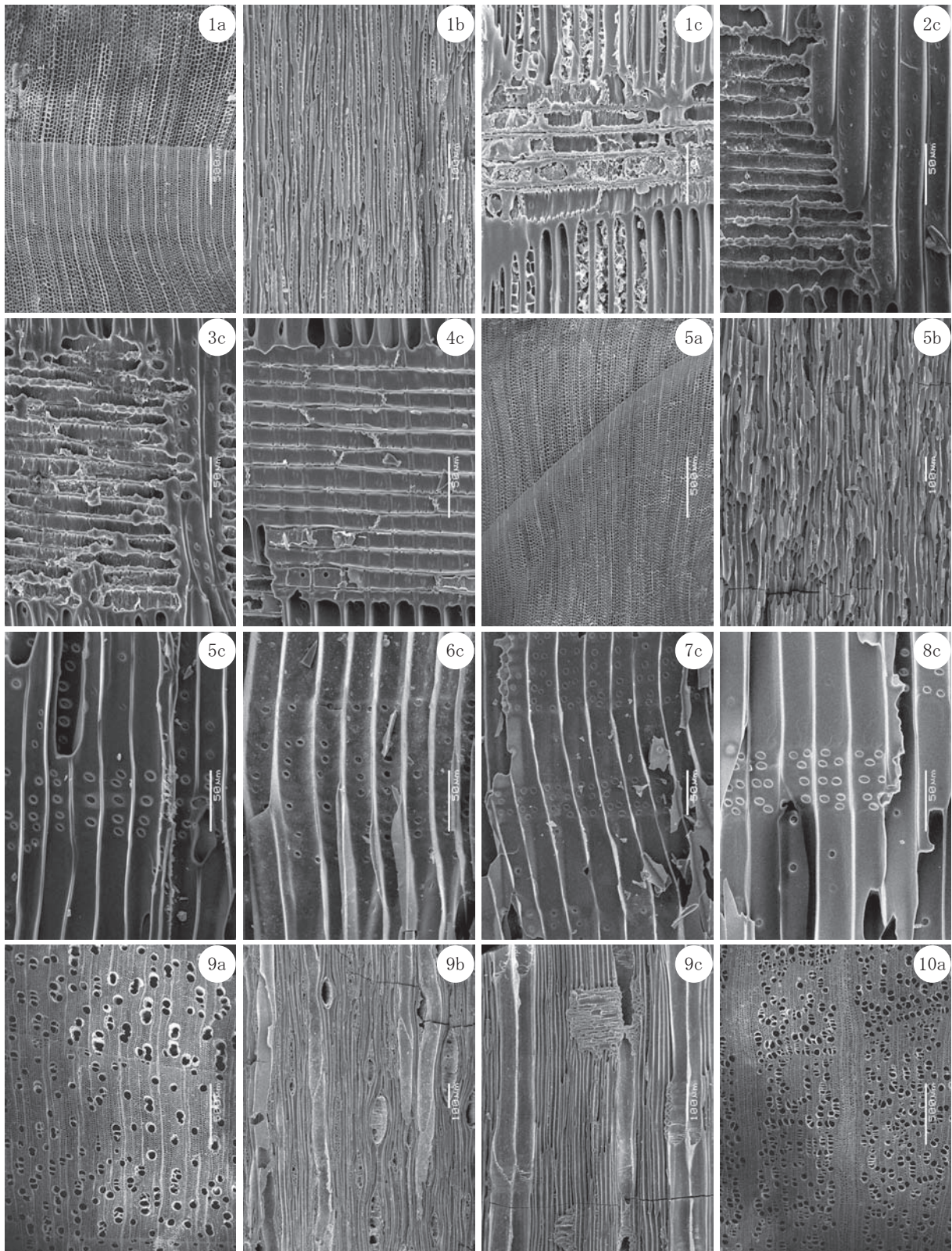
試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号	
57	33	3次調査	B地区	5・6・13号窯跡	灰原	こ6-B区	3層	燃料材	スギ	2.4	6	19	0.40		9～10世紀		
58									スギ	4.2	9	9	0.47				
59									スギ	4.2	9	11	0.47				
60									モミ属	1.6	7	17	0.23				
61									モミ属	1.9	8	-	0.24				
62									モミ属	1.7	8	-	0.21				
63									スギ	1.1	3	9	0.37				
64	20	3次調査	B地区	グリッド		こ4-C区	盛土	不明	ツバキ属	0.5	5	-	0.10	一部SK03	不明		
65	27					こ4-A区	盛土		ツバキ属	0.6	10	-	0.06	一部SK03			
66	34	3次調査	B地区	SK03		A区	覆土	燃料材か炭製品	クマシデ属イヌシデ節	0.8	23	2	0.03	製炭土坑	11世紀前半～12世紀中頃		
67									サカキ	0.8	22	3	0.04				
68									エゴノキ属	0.9	13	2	0.07				
69									エゴノキ属	1.0	16	3	0.06				
70									サカキ	1.0	11	2	0.09				
71									サカキ	1.0	15	2	0.07				
72									アサダ	1.7	18	4	0.09				
73									エゴノキ属	1.6	14	3	0.11				PLD-31692
74									クマシデ属イヌシデ節	1.6	21	3	0.08				
75									エゴノキ属	1.6	14	3	0.11				
76									ニシキギ属	0.5	13	1	0.04				
77									クマシデ属イヌシデ節	2.2	21	5	0.10				
78									クリ	1.5	5	4	0.30				
79									クマシデ属イヌシデ節	1.9	15	5	0.13				
80	エゴノキ属	1.1	14	3	0.08												
81	サカキ	0.7	12	1	0.06	PLD-31693											
82	35	3次調査	B地区			A区	覆土	燃料材	コナラ属アカガシ亜属	1.0	9	3	0.11				
83									コナラ属アカガシ亜属	0.5	11	1	0.05				
84									サクラ属	1.1	8	-	0.14				
85									クリ	2.1	11	6	0.19				
86									サカキ	1.7	24	3	0.07				
87									スギ	2.5	19	5	0.13				
88									サクラ属	1.4	15	3	0.09				
89	36	3次調査	B地区			b区	覆土	燃料材	クマシデ属イヌシデ節	1.5	17	3	0.09	製炭土坑	11世紀前半～12世紀中頃		
90									コナラ属アカガシ亜属	1.4	6	3	0.23				
91									サクラ属	1.1	25	4	0.04				
92									ツバキ属	1.2	19	4	0.06				
93									ツバキ属	0.8	14	4	0.06				
94	39	3次調査	B地区	4号窯跡	灰原	か4-A区	1層	燃料材	モミ属	2.2	15	13	0.15		9世紀前半		
95	40					前庭部	き3-D区		-	モミ属	6.3	14	-				0.45
96	41					か4-A区	-		モミ属	2.3	9	16	0.26				
97	42					き4-B区	6層		モミ属	0.5	1	-	0.50				
98	43	3次調査	B地区	SJ02	-	A区	-	燃料材	カバノキ属	2.1	23	5	0.09	土師器焼成坑	8世紀後半～9世紀前半		
99	44			7号窯跡	-	m区	2層	燃料材	ハイノキ属	1.2	10	7	0.12	報告書12層	10世紀前半		
100	45			7・8号窯跡	灰原	お6-A区	6層	燃料材	クマシデ属イヌシデ節	1.6	16	7	0.10		8～10世紀		
101	46			2次調査	B地区	SK03	-	A区	上層	燃料材	モミ属	0.3	1	-	0.30	7号・8号区域	10世紀前半
102	47	2次調査	B地区	グリッド		え9	包含層	不明	クマシデ属イヌシデ節	2.9	10	9	0.29	7号・8号区域	不明		

付表 1-3 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	袋 No.	調査 年次	地区	遺構名	部位	地区・ No.	層位	種類	樹種	残存 半径 (cm)	残存 年輪 数	復元 直径 (cm)	平均年輪 幅 (cm)	備考	時期	年代 測定番号									
103	48	2次調査	B地区	8号窯跡	-	焼成部 境	-	構築材	カエデ属	1.2	10	5	0.12	仮設天井構築 材	8世紀前半										
104	49								前庭部	床下b 区	-	-	構築材			コナラ属 アカガシ亜属	3.3	11	8	0.30					
105	50															床下c 区	-	-	燃料材	アサダ	2.6	21	-	0.12	
106																				コナラ属 アカガシ亜属	1.3	7	4	0.19	
107																				コナラ属 アカガシ亜属	1.4	7	5	0.20	
108																				アサダ	1.1	4	4	0.28	
109	51								燃焼部	D区	13層	-	構築材			カエデ属	1.7	13	4	0.13					
110	52															D区	-	カエデ属	2.4	13	5	0.18			
111	53															E区	-	カエデ属	2.4	14	5	0.17			
112	54								E区	③層	-	-	燃料材			クマシデ属 イヌシデ節	2.5	22	11	0.11	報告書6層 8-II号窯1次 床				
113	55															E区	覆土	カエデ属	1.9	13		6	0.15		
114	56								2号窯跡	-	-	-	上層			-	燃料材	スギ	2.2	9	10	0.24	8世紀前半		
115																		スギ	1.7	5	12	0.34			
116																		スギ	1.5	4	-	0.38			
117																		57	③下層	スギ	4.0	11		17	0.36
118																		58	③下層	スギ	2.8	19		12	0.15
119																		スギ	2.3	5	16	0.46			
120		59	n区	②下層	スギ	-	-	-						節部											
121	スギ	2.3	4	-	0.58																				
122	60	1-A号窯 跡	前庭部	m区	灰層	-	-	燃料材	ツバキ属	0.3	2	2	0.15	10世紀前半											
123	61								m区	灰層 上層	スギ	1.5	6		3	0.25									
124	62	1-B号窯 跡	-	g区	上層	-	-	燃料材	コナラ属 コナラ節	2.1	28	6	0.08	10世紀前半											
125									コナラ属 コナラ節	1.9	25	6	0.08												
126									コナラ属 コナラ節	1.7	24	10	0.07												
127									コナラ属 コナラ節	-	-	-	-		節部										
128									63	g区	上層	モミ属	0.4		3	-	0.13								
129									64	i区	上層	モミ属	0.3		5	-	0.06								
130	65	A地区	-	I区	上層	-	-	燃料材	コナラ属 コナラ節	1.8	10	4	0.18												
131									コナラ属 コナラ節	1.5	12	4	0.13												
132									コナラ属 コナラ節	1.8	11	4	0.16												
133									66	SK02	-	東南ア ゼ	-	-	-	燃料材 か 炭製品	ブナ属	0.6	4	4	0.15	製炭土坑	10世紀前半		
134	67	d区	上層	ブナ属	1.6	14	6	0.11																	
135				ブナ属	1.2	9	5	0.13																	
136				コナラ属 コナラ節	1.5	21	4	0.07																	
137	コナラ属 コナラ節	1.5	22	3	0.07																				
138	68	No.11	-	-	-	-	-	燃料材	コナラ属 コナラ節								1.3	25	3	0.05					
139									コナラ属 コナラ節								1.1	24	3	0.05					
140									コナラ属 コナラ節								1.0	25	2	0.04					
141									クリ								1.4	21	3	0.07					
142	69	No.12	-	-	-	-	-	燃料材	クリ								1.5	20	3	0.08					
143									クリ								1.1	16	4	0.07					
144									クリ								1.5	20	4	0.08					
145									クリ								1.4	19	4	0.07					
146									クリ								1.6	18	4	0.09					
147									70								SK03	-	う3-A 区	-	-			-	不明

付表 1-4 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

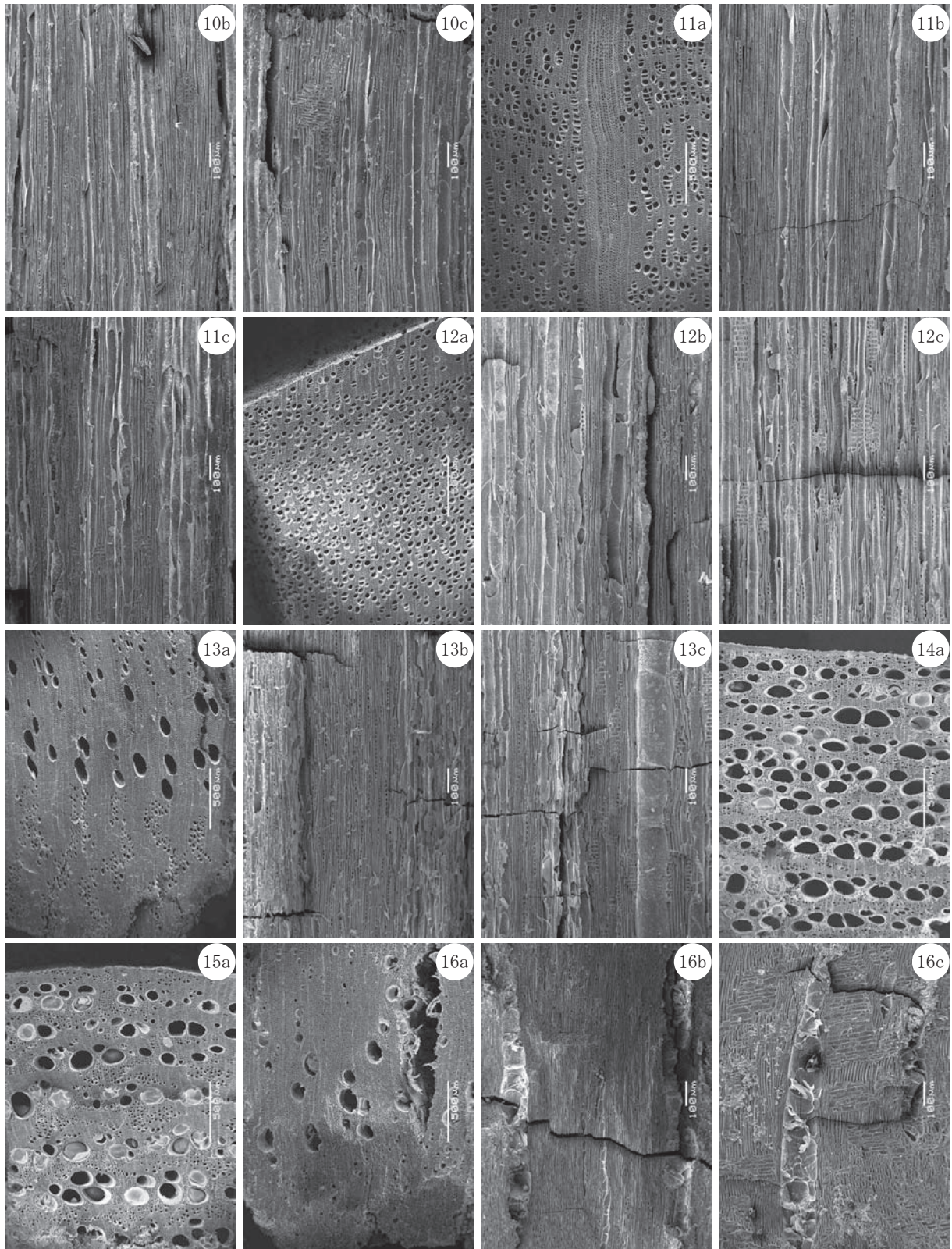
試料 No.	袋 No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	平均年輪幅 (cm)	備考	時期	年代測定番号	
148	72	2次調査	A地区	1-A号窯跡	前庭部土坑内	-	-	燃料材	モミ属	-	-	-	-	節部	10世紀前半		
149									モミ属	1.3	4	-	0.33				
150									クマシデ属 イヌシデ節	1.0	5	2	0.20				
151									スギ	2.0	3	5	0.67				
152									スギ	2.6	4	6	0.65				
153	73	2次調査	A地区	SK07	-	No.2	-	不明	スギ	1.7	7	7	0.24	10世紀前半			
154									スギ	4.8	5	10	0.96				
155									スギ	0.9	7	-	0.13				
156	71	2次調査	A地区	2・1-A ・1-B号窯跡	灰原	-	-	燃料材	う3-D区 イヌシデ節	y1層	-	-	-	節部	8～10世紀		
157	う4-A区								1層	スギ	1.2	3	-	0.40			
158	う4-A区								2層	スギ	2.6	10	11	0.26			
159	う4-A区								2層	モミ属	2.2	5	11	0.44			
160	う4-C区								2層	スギ	1.1	3	-	0.37			
161	77								う4-C区	1層	クマシデ属 イヌシデ節	2.2	4	6		0.55	
162									クマシデ属 イヌシデ節	1.6	3	5	0.53				
163	78								う3-A区	3層	モミ属	1.4	6	7		0.23	
164	79								う3-C区	2層	スギ	3.7	9	-		0.41	
165	80								モミ属	2.1	5	21	0.42				
166									モミ属	1.9	5	19	0.38				
167									モミ属	2.4	8	-	0.30				
168									モミ属	0.8	2	-	0.40				
169									モミ属	1.5	5	-	0.30				
170	81								う3-C区	7層	クマシデ属 イヌシデ節	2.1	16	17		0.13	
171									アサダ	1.9	17	19	0.11				
172									アサダ	1.7	15	16	0.11				
173	82	う3-A区	1層	コナラ属 アカガシ亜属	3.7	14	10	0.26									
174	83	う4-D区	2層	モミ属	1.3	4	4	0.33									
175	84	う4-D区	6層	モミ属	1.6	15	4	0.11									
176		モミ属	1.7	17	4	0.10											
177	85	う4-D区	7層	クリ	0.4	1	-	0.40									
178	86	2次調査	A地区	粘土塊集中2	-	-	-	不明	モミ属	3.1	13	7	0.24	不明			
179									モミ属	1.6	6	-	0.27				
180									モミ属	2.4	6	6	0.40				



図版1 ニツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c.モミ属(No.2)、2c.モミ属(No.44)、3c.モミ属(No.50)、4c.モミ属(No.166)、5a-5c.スギ(No.5)、6c.スギ(No.25)、7c.スギ(No.115)、8c.スギ(No.147)、9a-9c.カバノキ属(No.98)、10a.クマシデ属イヌシデ節(No.74)

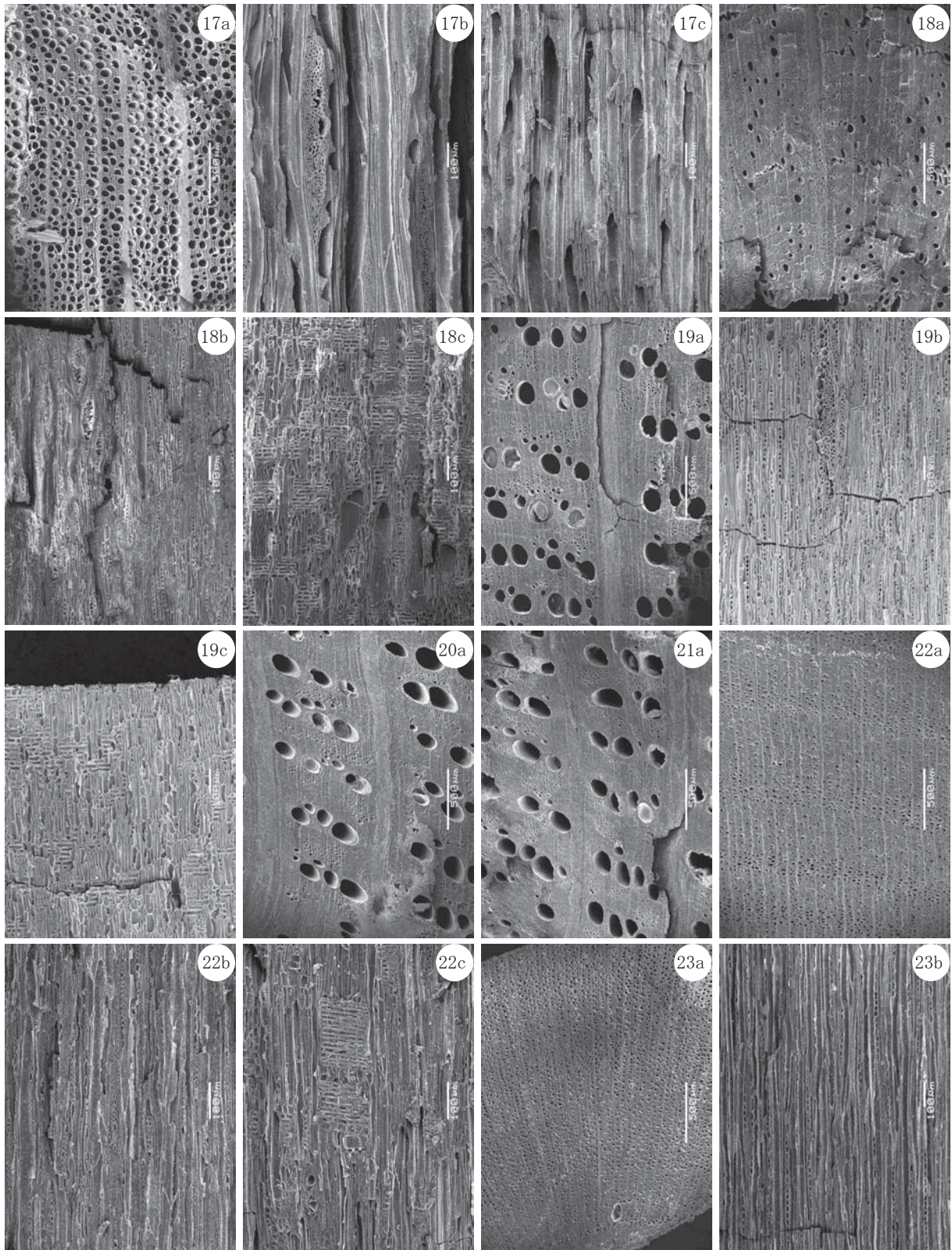
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版2 ニツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

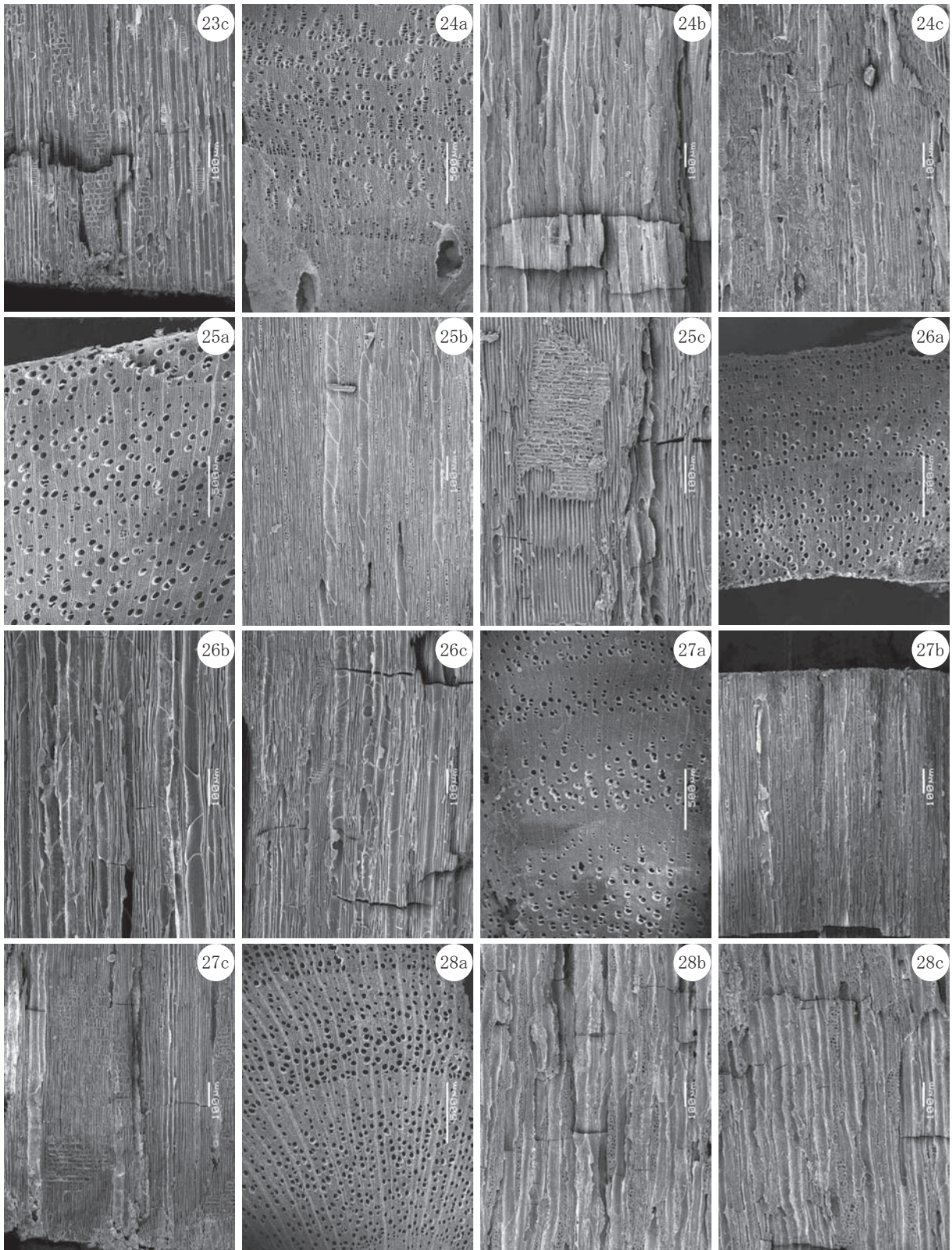
10b-10c.クマシデ属イヌシデ節(No.74)、11a-11c.クマシデ属イヌシデ節(No.77)、12a-12c.アサダ(No.108)、
13a-13c.クリ(No.85)、14a.クリ(No.143)、15a.クリ(No.145)、16a-16c.スダジイ(No.38)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版3 ニツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)

17a-17c.ブナ属(No.133)、18a-18c.コナラ属アカガシ亜属(No.82)、19a-19c.コナラ属コナラ節(No.137)、20a.コナラ属コナラ節(No.139)、21a.コナラ属コナラ節(No.140)、22a-22c.ツバキ属(No.65)、23a-23b.サカキ(No.70)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版4 ニツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(4)

23c.サカキ(No.70)、24a-24c.サクラ属(No.91)、25a-25c.カエデ属(No.109)、26a-26c.ニシキギ属(No.76)、27a-27c.エゴノキ属(No.69)、28a-28c.ハイノキ属(No.99)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

















195



196



279



193



275 ~ 278 ほか



















262



264

263



265



266





SK02 全景



SK02 セクション (上: A-A'、下: B-B')



SK03 (調査区 E-1 区側) 全景



SK03 (調査区 E-1 区側) 掘り方



SK03 (調査区 D 区側) 全景



SK03 (調査区 D 区側) 掘り方



SK03 (調査区 D 区側) セクション (手前: B-B'、奥: C-C')



SK03 (調査区 D 区側) 床面断ち割り

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはくつちようさほうこくしょ 12
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XII
副書名	二ツ梨豆岡向山窯跡群
巻次	
編・著者名	横幕 真、宮田 明
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒 923-0075 石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47 - 5713
発行年月日	西暦 2017 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたつなし 二ツ梨 まめおかむかいやま 豆岡向山	いしかわけん こまつし 石川県小松市 ふたつなしまち 二ツ梨町	17203	03014	36° 19' 53"	136° 25' 48"	2005. 7.21 ~ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19 ~ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2 ~ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1 ~ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1 ~ 2009.12.11	600	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨 豆岡向山	窯跡	平安	須恵器窯跡 1、土坑 3、 灰原	須恵器、土師器、炭化材	遺物編 1

要約	4号窯調査の遺物編。付章として、その他の遺構（SK02・03）と自然科学分析の報告を掲載。
----	---

小松市内遺跡発掘調査報告書 XII

二ツ梨豆岡向山窯跡群

平成 29 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713

印刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031
